

です。』

さう云ふた後で、美しい腕をさしのべて玉枝はまた巻煙草に火をつけた。

『先生、八卦つて當るもんでせうか？』

『私は八卦を信ずることは迷信だと思ふね。』

『さうでせうかね。』

玉枝は溜息をついて沈黙して了つた。然し稍暫くたつて、

『神様も、佛様も助けて下さらないと思へば八卦でも信ずるより外に道はありませんものね……私
は神様に見捨てられたのですもの。』

『玉枝さん、私を信ずることは出来ない？』

『あなたのやうな清い方を信じたつて仕方がありませんわ……妾は悪黨の神さんを信じたいと思
つて居ますの……』

さう云ふて、玉枝は大きな聲で笑つた。

『豊川稻荷さんは、泥棒の神様ですつてね、妾などには豊川稻荷さんで、結構ですわ、罪の贖の入る
やうな神様は怖くてよう寄り付きませんわ……そら信じますよ、妾は今もイエス様を一時も忘れた

ことはありませんよ。然し何だか、天のお父様はあまり尊過ぎて拜む氣にはなれませんね……もう一
度生れ變つて來なければ、妾のやうにこんな罪に染まると、神様にも佛さんにも見離されて了ひま
す。八卦さへ善い八卦が出ないで、行詰つた八卦だけしか出ないので……』

『そんなに悲觀したものぢやないよ、玉枝さん、私は友人と相談して救つてあげるから神戸へ歸つて
居らつしやい。』

『いやです、私はもう神戸には歸りません。』さう云ふて、玉枝は強く泣き出した。

『そんなに拗ねるものぢやないよ、素直に友人の親切をお受けなさいよ、』

『だつて、私は、もういくら救はれても、昔の玉枝に歸ることは出来ないんですもの……あなたのい
らつしやるのが、あんまり遅いのです……私は今は藻抜けの殻です……救はれて神戸に歸つたとこ
ろで善い物笑ひです。私は昔の私に歸ることが出来ないことを知つて居りますから、ひきずられるだ
け曳きずられて行きます……』

玉枝は懐からピンク色のキレイ紙を取り出して涙を拭つた。

外には遊び客と藝者達の笑ひ聲がドツと爆發する。

玉枝は、心持ち涙で臉を膨らせた、長い睫毛の美しく並んだ眼の中から、エメラルドのやうに澄んだ

眼球を、新見に向けて彼を見詰めてゐる。

「妾、あなたと一緒に後藤寺へ行つたらいきませんか？」

「なぜ？、あの男が怒りはしないの？」

「妾、あの人が嫌ひなんですから、妾は一時間でも長くあの人と離れて居りたいのです……（ひとり言のやうに）今夜も此處で泊めて貰はうか知らん、此處に泊つたらあなた怒つて？」

「私がかまわ無いけれども家から呼びに来るよ。」

「ぢや、妾、歸つて行くわ、その變り、妾、きつと、後藤寺へ行つてよ、いゝでせう。」

さう云ふて玉枝は立ち上つた。這入つて來た時の寂しい顔に引換へて、何となしに希望に充ちたニコニコした顔であつた。それを見て新見は嬉しかつた。

宿の時計がゴン／＼と十二時を打つ。

「遅くなつた、また歸つたら、おかみさんに叱られる。」

さう云ふて、玉枝は逃げるやうにして出て行つた。宿の騒ぎはまだ止みさうにも無い。驛前は終列車も立つた後なので、伽藍として人影もない。興奮した新見は睡にも就けないで、室の内をあつち、こつちと歩いて玉枝の云つた言葉を考直してみた。涙が新見の兩方の頬の上を傳ふて流れる。時計がカン

と二つ鳴る。藝者の騒ぎもいつしか過ぎ、街も靜かになつた。遠くの方に按摩の笛が聞こえる。

三十一

翌日、新見は朝早く、三菱の新入炭坑を見に行つた。そして一千三百尺の堅坑をエレヴエターで一気に降つた。それは實に痛快な地中への降下であつた。そこから斜坑を二十七町も斜に這入つて行つた。新入坑は古い炭坑だけに採炭場所が坑口より頗る遠い所に有る。一里近くも斜に這入つて行くので、遠賀川の河底を一哩近くも向ふに通り返して居ると聞かされて多少驚いた。坑内は中鶴に較べて秩序然たるもので、地下の宮殿に住むやうな心持ちがした。

然し一旦、坑外に出ると、そこは實に穢ない。丘の上に立ち並んだ坑夫納屋は中鶴よりは非道いものであつた。三菱がこんな小屋に坑夫をぶち込んで、坑夫の膏血を吸ひ、それで天下の富豪だなど感張つても、その黄金は全く坑夫の血が赤く染つて居ると、憤慨した。

納屋頭の家はみな相當に豊かに見えた。北九州の富豪某も、某々も坑夫納屋を喰ひ荒らして、出世したのだと聞かされて、なる程と頷かれる節もあつた。坑夫の一日の労働賃銀に對して何分かつの口錢を刎ね、その出炭料に對してコンミツションを刎ねるこの鬼のやうな親分共に對して、新見は腹

の底から憎しみを感じた。

時が来る、時が必ずくる。この暴虐無道な

に對して、坑道奥深いところから叛逆の聲

が湧き起る時が来る。さう、新見は豫覺して、新入坑を去つた。

然し、何時、新見の豫覺が的中するであらうか、日本は好景氣に浮されて深く寝つて居るではないか、官吏も、資本家も、労働者も、乞食も、醜業婦も、國民のありとあらゆるものが凡て戦争成金と云ふ愚かなる夢に酔ふてゐるではないか？ 彼等はあまりに黄金の酒に酔ひ過ぎた。彼等の酔ひを醒ますものは果して何人であらうか？

新見はこんなことを考へ乍ら、午後二時の列車で筑豊炭田の西北端に位する後藤寺に向つた。伊田で乗換へて後藤寺に降りたのは、午後四時過ぎであつた。それから、西日の焼け付くやうに照りつける往還を遠賀川の土手に沿ふて十八町も歩いて舊後藤寺の町にたどり付いた。

誰れも知る人のない、また誰れも知つてくれ無い、未知らぬ街に這入つた彼は寂しい思を以つて、宿を探がした。宿らしい宿は二軒しかなかつた。新見は旅にも少々疲れたと思つたので、大きい方を撰んだ。そして、日はまだ西に高いが、その日は二瀬炭坑に行くこともよして休むことにした。

晩の七時頃になつて、近くに讚美歌の聲が聞こえるので、急に暮はしくなり、坑内歩きで疲れた棒

のやうになつた足を引すつて、キリスト教の講義所を訪づれ七八名の聴衆の中に混つて、終りまで話を聞いた。何時も人へのみ説いてゐる彼が、社會の暗黒面のみを見て廻つた疲れた旅の夕、未知らぬ小さい街で、古い十字架の福音を聞くことが、何だかうれしくも感ぜられた。説教者はあまり善い話もしなかつた。然し、彼は深く祈る氣持ちでそれを聞き、讚美歌も心より歌つた。集りが済んで彼は説教者に厚く御禮を云ふて出て來た。

外は眞暗がりであつた。まだ宵の口であるので街の兩側の店はみな戸を閉じて、廢墟のやうにひっそりして居た。空は雨模様と見えて星さへ見えなかつた。が、彼は靜かに歩き乍ら考へて見た。

「……矢張り、十字架の教は説教と禮拜だけでは無力だ。それはあまりに無力である。とても北九州の恐ろしい資本主義に打勝つ力を持つて居らぬ。たゞ無氣力な信仰の福音のみを宣傳して、十字架の實行を教へない福音は無能だ。神もし許し給はゞ幾年か後に再び此地に歸つて來て、この解放の福音を説かう、それまで隱忍自重して靜かに進まう！」

こんなことを考へつゝ旅館まで歩いて居た。すると、突然――

『うれしい！ 兄さん！』

と叫んで家の陰から新見に飛び付いてくる娘がある。それは外の人でもない玉枝であつた。「まさか、

後藤寺までやつてくる勇氣はあるまい。後藤寺に行きたいと云ふのはお愛憎であらう」と思つて居たにかゝわらず、玉枝はほんとに遣つて来た。新見が返事も無い中に、玉枝は新見の胸に寄り纏つて来て、両手を新見の肩にかけ、早や泣いて居る――

『兄さん、うれしい、うれしい、うれしい！』

さう云ふて、玉枝は顔を榮一の胸に埋めて了つた。

『玉枝さん、此處は通りだから宿まで行かう。』

さう云ふて、新見は両手で玉枝の二つの肩を支へ、彼女を真直に立たせた。彼女は涙をハンカチで拭き乍ら、闇の中でシヨンポリ立つて居る。新見は黙つて先に歩き出したが、玉枝はついて来ないで、人通りの無い淋しい街路に立竦んで動かない。新見は再び玉枝の立つてゐる所まで歸つて行き、背中を押すやうにして旅館の前まで歩いた。旅館の入口で新見が先に下駄を脱いで二階の奥座敷にある彼の室に歸ると、玉枝も黙つて彼のあとからついて来た。

『よく来たね、随分勇氣があるね、どうして此處がわかつたの？』

新見は隅の机の前に坐り乍らさう云ふた。

『一軒、一軒聞いたのよ、驛前で三軒聞いて此處で二軒聞いたの……あなたが今夜後藤寺に泊つて居

られなければ、私は死んで了うと思ひましたよ、ほんとよ、私は死ぬ覺悟で出て來ましたのよ。』

さう云ひながら、玉枝は新見の前に正しく坐つた。

『恐ろしい勢ね。』

と新見は笑ひ乍ら云ふた。すると玉枝は新見の笑ふのを見て、甘へるやうに、大きな美し眼を動かして上へ回轉させ、右手で袂を掴んで、新見の膝を軽く叩いて――

『妾、眞劍なのよ、わたしは一時でも多く兄さんと一緒に居りたいから、どこまででもついてくるのです……いきませんか？ 悪ければ、悪いと云ふて下さい、妾も考へがあるのですから……』

新見は昂奮した玉枝の心理状態が理解せられるから、

『悪いことは少しも無いよ、然し、あなたの家の方は大丈夫なの？』

『家つて何處？』

『瓢軒よ――』

『知らんわ。』

『許しを得て出て來たの？』

『いや、凡呂に行くと云ふて抜けて來たの……二三日暇を下さいと云ふたのですけれども、呉れ無

二〇二
いものですから、脱け出して来たのです。……これ見て下さい、石鹼箱と手拭と金盥まで持つて来ましたのよ。』

玉枝は叮嚀にメリンスの風呂敷包を開けて、ニツケルの石鹼箱とタオルの這入つた真鍮の金盥を取り出して新見に見せた。

『之を抱えてね、お湯に行くやうな風をしてその儘抜け出して来たんです……然しまア、あなたに會へて、どんなにうれしいか……』

さう云つて、玉枝は右手で襟元をつかし、新見の顔に覗き込んだ。

『玉枝さん、夕飯は？』

『もうたべました、伊田で汽車のお弁当を買ふて戴きました。……妾ね、たんと、あなたに聞いて貰いたいことがあるから来たのですから、聞いて下さいね。』

鳩のやうな眼をして玉枝は訴へるやうに云ふた。

今日は玉枝は髪は結び方まで改めて、當世流に前髪を七分三分に分け、頬紅までつけて俏して居る。それがまた廿歳前後の女の膚にしつくり合つて、殊の外美しく見える。

新見は隅の机に依つて擬乎と玉枝の顔を見て居ると、玉枝は眼を伏せて、疊を見詰めて居る。

昨日着て居た襦袢お召に博多の帯を締めて令嬢姿に見える玉枝は、とても直方の賣春婦とは見え無かつた。

女中が這入つて来た。そして叮嚀に

『こなた様も、お泊りで御座りますか？』

『ハア、お願いします。』

新見は造作無く答へた。

『お食事はもうお済みになりましたか？』

女中が新見に尋ねたので、新見は玉枝を顧み、

『食事を取らうか？』と尋ねた。

『妾の爲めならもう結構です。』

玉枝は女中の方に振向きもし無いで、新見の顔を見てさう答へた。

『有難う、ぢや、食事は善いさうですから、泊りだけにして戴きませう。』

女中はそれを聞いて、既に延べてある床の側に、もう一つの床を延べた。

電車も通らなければ、人力車さへ走らないこの静かな北九州の田舎の街の夜は淋しい程ひっそりと

してゐる。庭の松の梢に風のあたる音が海濱にでも居るかのやうに聞こえる。

『明日は、あなたは、どちらへいらつしやるのですか？』

『二瀬を見て、大牟田まで出やうと思つて居るのです。』

『ついで行つてもかまひませんか？』

『ついで来たければ、ついで居らつしやい、あなたも炭坑を視察しますか？』

『炭坑なんか、少しも視察したくは無いが、一分でも一秒でも多くあなたと一緒に居りたいのですも

の……』

『困つたことだね。』

新見は苦笑した。玉枝はその言葉をどう取つたか泣き出した。

新見は全く當惑して了つて、玉枝を捨て置いて床の中に這入つて寝て了つた。

泣き乍ら、玉枝は室を出て行つた。そして暫く歸つて来なかつた。新見は玉枝がその儘また抜け出

して直方に歸るのでは無いかと氣遣つた。その中に三十分たち、四十分たち、晝の疲れで新見はうと

うととした。

そして一時間以上も経ち、玉枝の身の上が案ぜられるので自然目が醒めたが、いつの間に歸つ来た

たか、玉枝は新見の枕元で泣いてゐた。

『玉枝さん、もう善い加減に泣くことをよして寝なくちやいかんよ……もう餘程遅いでせう。』

さう新見は兄さんらしい口振で玉枝に云ふた。

『だつて、妾、睡られ無いのですもの……』

さう云ふて、玉枝は新見にすり寄つて来て、新見の左の手を固く握つた。

新見はその表情が戀を意味するのか、情愛を意味するのか見當がつかなかつた。

玉枝は握つた新見の手を口に持つて行つて、中指の先を齒で相當に堅く噛みしめた。

『痛いよ、玉枝さん。』

と云つて、新見は急に手を引込めた。

『痛かつた？ 勘忍して下さいね？』

笑ひ乍ら

せた。

新見は目を潰つた儘、沈黙を續けた。

『新見さん、妾を自由の身にして下さいますか？』

来た。そして、新見の着て居る寢巻の襟を引合

「その積りで居るがね、お金も少しだけは用意して来て居るんだよ……？」

「昨日ね、あれから歸つて妾の借金を計算して貰ひましたら五百五十七圓ですと、妾もう悲観して死つて、務めに出る事も、何にもいやになつて了つたんです……それで、私は私のやうなつまらないものに澤山のお金を入れて頂くことが勿體無いやうに思ひますから私はもう死なうと思ひます……」

「死ぬなんか、かりそめにも口に出しちやいか無いよ……こちらに来る時に借りただけを先づ納めて後は待つて貰うことは出来ないかね？」

「そんなことはしてくれ無いでせう。」

「僕はこんな交渉は下手だから、宇野君に来て貰ふと思ふが、あなたそれはいやですか。」

「妾は、生きて居る望は全く失つて了つたのです。あなたさへ死んでも善いと云はれるなら、いつでも死ぬ積りで此處へ来ましたの……」

「死」に關して、玉枝は如何にも無難作に、そして陶醉してゐるかの如く云ふ。

それを聞いて、新見は叱り付けるやうに云ふた。

「五百圓でも六百圓でも拂ふ可きものだけは拂ひませうよ、然し、借りもして居ないものを二百圓も

三百圓も附け加へると云ふのは全く無茶ぢやありませんか……」

「私が、出来るだけ困るやうに向ふではするのです、私は奴隷に買はれて居るのですから、凡ての鞭を受けるより仕方が無いのです。」

暫く沈黙して居て、また玉枝は言葉を續けた。

「身受けして貰つても、神戸には恥しくて、よう歸ら無いし、横禿はつけてくるだらうし、生きて居たつて少しも面白くも無いわ……身投げして死ぬなら……夏に限るんですつてね、善い気持ちで死ぬつて云ひますわ。」

玉枝はつゞけて新見の襟を掻き合せ、右の鬢のほつれを齒で噛みしめ乍ら、冗談のやうに云ふた。

「内へ来れば善いぢやないかね、喜恵子さんの手助けをして、炊事のお傳でもするが善いよ。」

「姉さんは變に思ひはしなさないでせうか？」

「別に何とも、思ひはしないよ、喜恵子もあなたのことを心配してゐる位だから……」

「私が生きて居る望みがたゞ一つあるのです……」

「それは何に？」

「……」

『云つて御覽。』

『怒つちやいやよ……それを云ふと、姉さんが怒りなさるかも知れないから止めておかう。』

『云ひたくなければ、止めておけば善い。』

玉枝は丸く垂れた頬に美しい齧を作り乍ら視線をよう上げ無いで云ふた。

『それは……ね……あなたがね……わたしをね……可愛がつてやると一言云ふて下さればそれで善いのです。』

榮一はそれを聞いて低い聲で笑つた。

『玉枝さん今迄に可愛がつてあげて居るぢやありませんか……』

『……頼り無いわ。』

『ぢや、どうすれば善いの？ 玉枝さん甘へちやいやよ……私の嫁さんになりたいの？』

『嫁さんなんかになりたくはありませんわ、それこそ姉さんに叱られるわ』

『ぢや何に？』

『兎に角ね、可愛がつてやると一言云つて下さいね！』

『では、改めて可愛がつてあげますと云ふのですか？ たつたそれだけ？……』

『それで、私は安心して今夜は寝ますわ。』

『可愛がつてあげます！』

『うれしいーうれしいー！ もう之で私は死んでも善い！』

——私は心の底から愛に飢えて居ます。兄さんのやうに、私を可愛がつてくれる人はあなただけです、私を忘れないで下さいね。』

玉枝は暫く沈黙して猶續けた。

沈黙の儘玉枝は榮一の両手を握つて、自分の顔に持つて行き、はふり落つる温い涙で掌を濡はした。泣き聲で玉枝は云ふた、

『……私はほんとに、ほんとに愛に飢えて居ます……私を玩弄物にする人もあるし、身受けしてやらうと云ふ人も中にはありますけれども、私を心から愛してくれる人は誰れも無いのです。私を馬鹿物扱ひにして私を肉慾の道具に使ふものばかりです。私は世界の人がみんなあなたのやうな優しい善い人かと思つてゐました。然し私の今日まで會つた男はみんな悪魔です……白状しませうか、今日まで私は七百六十三人の…… 來ましたのよ。それを一々日記につけて居りますがね。然し、男の顔を見る度に身震ひがして逃げ出したくなります。さう云ふ私も悪魔ですけれども、魂だけは穢さ無

い積りで、私は「男嫌ひの菊子」で通つて来ました。」

玉枝は榮一の胸に手を置いて彼に顔を向けた儘俯向けになつた。然し餘程疲れてゐるらしい。

「玉枝さん、もうお休み、話はもう明日にせう。」

「此處に、かうやつて睡ちやいきませんか？」

「床の中に這入つてお休み——」

「私を赤ん坊だと思つて、あなたの側で寝させて頂戴……」

「赤ん坊としちや、少し大き過ぎるよ——」

「だつて、赤ん坊と同じぢやありませんか。姉さんが心配なさいますか？……妾、關係なんかつたく

は無いわ……私は男に飽いて居るんですもの……」

「困つた注文だね。」

「あなたは、いつも玩弄ものにせられてゐるから、今夜は私を玩弄にする積り？ 許して下さいよ、

玩弄にするのなら御免下さいよ。」

「あなたは人が悪いわ……」

新見が叱り付けたものだから、玉枝は素直に自分の床に歸つて寝た。新見は玉枝の誘惑を必しも

怖いと思はなかつた。それは美しい誘惑であつた。そして、彼は充分それに打勝つ力のあることを自信してゐた。

然し彼は床の中で考へた。此處に彼の側に彼の自由になる女が一人寝て居る。而もその女は彼女の貞操を保護する必要の無い女である。もし彼が欲するならば彼女は彼の思つた通りになる。そして彼女は美しい。嘗ては彼も彼女に戀したことがある。そして今も猶彼女は彼を戀慕して居る。そこに彼の高く昇らんとする意志と、低く落ちんとする別れ目がある。

「自分は高く昇る！」

さう堅く決心して、彼は電氣を消して跪いて祈つた。

「どうか、父様、このよるべなき友達の魂を恵んで下さい。」

彼は玉枝を男の友達、乃至は中性の友達——美しき天の使だと思つて寝た。そして朝までぐつすりよくねむつた。

目を醒ますと、玉枝はすぐ新見の床の中に這入つて来た。さうして一人でクス／＼笑つて居る。新見は黙つてスツと立ち上つた。

初夏の太陽がキラ／＼と、松の木の枝を照らして居る。

朝食の終つた後、新見は宿の浴衣を脱いで洋服に着換へた。
玉枝は鏡の前に坐つて、家から持ち出して來た眞鍮の小さい金盥に水を入れて、一生懸命に髪を梳いて居る。

「今日は二瀬だなア。」

新見が云ふと、玉枝はすぐ尋ねた。

「妾は今日どうしませうね？」

「あなたはどうする積かね？」

玉枝は例の甘へるやうな句調で

「妾はどこまでもあなたに附いて行く積りです、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、……」
「また困るなア」を仰しやいますか？」

「……………」

玉枝は髪を結ぶ手を少し休めて、新見の方に振り向き、甘へるやうな句調で云ふた。

「わたしはあなたが歸つて云はれるなら、死んで了ふ積りで出て來たんですから……どこまででも附いて行きますよ、善いでせう——」

新見は玉枝の性格が四年前のそれと著しく變化して居て、凡ての點に於て押しが強く、強情になつたことに氣附いた。

新見は鏡臺の側に坐つた。玉枝は鏡に映る自分の姿を見詰めて、熱心に髪を結ぶて居る。

「あなたはほんとに、どうする積りなかね、あの家を出る積りなら、私も今日直方に出て、ひさご軒に寄つて、あなたの問題を片付けて上げやうと思ふが、それにあなたは賛成しないかね」

「あなたが内へ來られる？ それこそ大騒動が起るから、妾はあなたに來て貰ひませんわ、あなたは殺されるかも知れませんよ」

「それぢや、あなた一人歸つちやどう、お金だけ、あなたに洩すから、そして猶話が面倒なら、宇野君に來て貰ふことにしよう……………」

「妾一人では、お金も捲き上げられて、その上相變らず稼がされることは解つてゐます……………」
玉枝は急に哀れな聲を出して「あなたは妾を歸らしたいのですか？ 歸れと仰るなら、歸らないこともありませんけれども……歸る位なら川へ這入つて身投げした方がましですわ……………」
そしてひとり言のやう

に次の言葉を云ふた。「いつそのこと捨鉢になつて毒婦になつてやらうか知ら……」

さう云ふて、玉枝はひとりで笑つて居る。頭の頂の髪を束ね、鏡に向き聲を改めて話を續けた。

「ね、あなた、妾のね、今居るところに、もう一人の娘が居るのですよ、その娘はね、妙な娘で、それ恐ろしいことばかり妾に云ふのです。高橋お傳が理想なんですつて……その娘にあなたはお會ひにならなかつたですか？」

「會はなかつたよ」

「何處かに遊びに行つてゐたのでせう、別嬪ぢやないのですけれども、「男たらし」が面白いと云つてね、這入つたお金はみんな男たらしに使ふのですよ。その癖、男に惚れるより女に惚れる方が面白いと云つて、いよつちゆう。」

北と西の開いた八疊の座敷は午前八時になつてもまだ薄暗い。

旭日が隣の倉の白壁に反射してキラ／＼光る。庭の大きな松の木が影繪のやうに、その白壁の上へ映る。

「玉枝さんはその娘に感化せられたね！」

「そんなことはないわ……然し、どうせ今のやうな、つまらない生活を續けるなら毒婦になつて、澤

山の男を弄りものにして、死んだ方がましですわ」

「恐ろしいことを云ふね」

「だつて、善人にはもういくらしても成れないのだから、極悪人になるより仕方がないわ」

「そのつもりで可哀相な淫賣に賣られてくる娘達を助けてやる氣にはなれない？」

「自分が縛られてゐるのに、人まで、助けることが出来るのですか？……毒婦になる氣なら死ななくてもすむわ……だけど妾のやうな小膽ものはどうしても毒婦に成り了せないやうに思ひますわ……」

妾はどんなに墮落して居ても人をやう騙さないから」

玉枝は髪を束ね了つて、紙で手の膏を拭き取る――

「連れて行つて下さいね、大牟田へ、善いでせう、妾はあなたと一緒に居りさへすれば聖人になれるから、感化して下さいよ、毒婦にならないやうにね」

髪を結ひ了つて、彼女は襟元をつかせ、鏡に顔を見せて鏡を覗き込み、また振返つて新見を凝視した。

「大牟田からどうする？」

「神戸について行きますわ」

「神戸は嫌いだと云つたぢやないか！」

「あなたが否で無ければ、少しは辛抱します……然し、姉さんに悪いわ……私、あなたの側に居られるのであれば、炊事でもなんでもするけれども……然しそれも何だか變だし……」

榮一は無言の儘で、庭の木を見詰めて居る。玉枝も暫く沈黙する。

「いつまでも拘摸や、強盗の懐、具合を當にしたつて仕方はないし、坑夫や川船の船頭さんには金の工面の附くではなし、あなたに身受してもらつたつても、あなたのお嫁さんになれるのではなし、またいやな男に身を委さなければならぬとすれば、死ぬか、毒婦になるか、どつちかにせねば仕方がないわ！」

玉枝は急に聲を改めて……

「あなた私をお宅の女中さんにしてくれませんか？」

「女中さんぢや無く喜恵子さんが妹としてお世話したいと云つてゐるぢやありませんか？」

「わたし、女中さんで善いわ、あなたの側に居れば善人になれるから、わたしお宅の女中さんにして貰ひたいわ、……あなた知つてゐて？……わたしまる一年室津で妾奉公して居たのよ？」

玉枝は巻煙草に火をつけながら、また話を續けた。

「聖人つてみな臆病者ね！ 女の二人や三人に關係したからつて、それで聖人になれないのであつたら、聖人つてつまらないものね」

「聖人はみな片輪だよ、兩眼兩足あつて地獄に投げ入れらるゝよりは、片眼片足にて天國に入るは善きことなりと聖書に書いてあるぢやないか！」

「さうすると、片輪者も世界に必要なんですね」

「必要だよ！」

「あなたから見れば私は腐つた女に見えますか、私は肉は腐つても魂は腐つては居りませんのですよ、妾に云はすなら今迄に

七百六十三人の人はみな土偶です、人形です、みな魂の無い獣です、たつたひとり人間らしい人に合つたのです……今度その人に合つたら、どうしても放さ無いと、神様にお願かけて來たのです……私は人間になりたい……私はもとの玉枝に歸りたい……私をもとの玉枝にして下さい……ね、先生、私はもう一度、神様にお祈がしてみたい……神様はもう私のお祈なんか聞いて下らないのです……」

「玉枝さん、あなたがこんな社會に墮落したからつて、あなたが悪いと思へば間違ひですよ、みんな社會の罪なんですよ、あなたに悪いところは少しも無いのよ」

玉枝はまた元氣を出して云ふた。

『いくら泣いても仕方が無い、なるやうにならな。』

「慥もかなわず

行く道たゞず

泣いて蛇になる

日高川……」

玉枝は新見の知らぬ流行歌を口の中で唱つて、顔を壁の上に伏せた。

新見は靴の中から状態袋を出して、その中に二百五十圓の紙幣を入れ、玉枝の前に置いて云ふた。

『玉枝さん、こゝに先刻云ふただけのお金があるからね、後は宇野君が来るまで待つて貰つて、一先づ直方を引上げて神戸へ出ていらしやう。』

彼女は暫く黙つてゐたが、一寸前半身を上にあげて、金の這入つた状態袋を前方に投げつけた。そして一言も物を云は無い。

『どうして、そんなことをするの？』

『……………』

『そんなわけのわからぬ事をするなら、私はこの儘出發するよ』

玉枝は起き直つて、袖で顔を蔽ふた儘云ふた。

『どうせ、私のやうな穢れた者ですから、捨てゝ、行くなら、捨てゝ行かれたら善いでせう』

『ぢやどうしようと云ふの』

『もう一日だけで善いから一緒に居らして下さい、お願いだから、もう一日だけあなたと一緒に居れば、私は死んでも満足しますから』

『それぢや、大牟田まで一緒に行かう』

『大牟田つて云つたら何處？ 大牟田？ 大牟田？』

『熊本の側だよ』

『遠いのね、いつ歸つてくるの？』

『明日……と口の中まで云ふて……明後日になるね？』

『また殺す目に合はされるのも辛いし……』

玉枝はひとりごとを云ふて考へ込んで居る。

『行くところは無いし、勤めはいやだし……』

榮一は玉枝の投げた状袋を拾ひ上げて、

『之はあなたが持つていらしやい。』

と云ひ乍ら、玉枝の懐に捻ぢ込んだ。

玉枝は少し考へ込んでゐたが、

『では、直方まで、あなたと一緒に往かして頂戴ね……直方まで一緒に往かして下さるなら、もう私は断念して、家に歸ります。』

玉枝が妥協したのだから、新見はすぐ宿を出た。

二瀬の海軍炭坑への道は小山を一つ越えて淋しい田舎道を一里半も歩かねばならなかつた。二人は色々面白い浮世話をし乍ら一里半の道を楽しく歩いて行つた。

新見が二瀬炭坑を視察して居る間、玉枝は菓子屋で二時間あまりも待つてゐた。それから二人は停車場まで一里近くの道を歩いた。

三十三

二瀬で先に返さうとしたが、どうしても玉枝はついて行くと云ふて、折尾までついて來た。そして

二瀬から折尾までの蒸し暑い八月の西日のあたる客車の中で、玉枝はヒステリーの女のやうにたゞ泣いてばかり居た。

新見はもうほと／＼弱つて了つた。慰めるわけにも行かないし、叱るわけにも行かない。言葉をかけると、それをひつかかりにして泣き出し、黙つてゐると、黙つてゐると云ふて泣くのであつた。それで、寧ろ沈黙するに若かずと、折尾につく一寸前まで榮一は絶対の沈黙を守つてゐた。一哩行つては止り、二哩行つては止る牛の歩みのやうにのろい炭坑専門の列車は坑夫の群の降り降りて満員の有様であつた。田舎の鐵道に似ず復線になつて居り、客車もなか／＼しつかりしたものを使つて居る。西日あまり暑いので西側はみなセードをメめて乗客はみな居睡りをしてゐた。それで榮一もみんなのする通りにセードに首をもたせて居睡りをしやうと努力してみた。然しそれは無効であつた。

『——なんだか此調子で行けば玉枝は自殺だらう——』と云ふことが考へられてならなかつた。

さう思ふと、遠賀川の堤防の下へ美しい玉枝の死體がブク／＼浮いたまゝ流れる光景が忍ばれてならない。二重眼瞼のパツチリした眼に、孔雀のとさかのやうな瞼毛をつけて、眼音さんのやうな垂れ氣味の頬ベタに、深い笑凹を現し、薔薇の花瓣のやうな色艶をした顔色に、唇と云へば今にも咲き出しさうな、眞紅なチュウリップの蕾の形をして、古代希臘のプリスキラスでもこんな艶麗なヴキナス

は刻み得なかつたらうと思はれるほど美しい姿が、既に蠟石のやうに固くなつて、岸邊の葦に引かゝつてゐる姿が、ありありと見えて仕方がない。榮一はその幻を腦底から拭き去らうとしてもどうしても拭き去ることが出来ないで苦しんでゐた。

彼は眼を見張つて、ハンカチで顔を蔽つた儘、悲嘆にくれて泣き睡入つた玉枝の上に視線を落した。活動寫眞が白いスクリーンの上に寫映するやうに彼女の白いハンカチの上に、彼女の最後の光景がありありと寫映されるのが戦慄されて見える。

「あゝ怖ろしい！それは凡て私の責任だ！救はねばならぬのも自分の責任だし、救ひ得ないのも、自分の上に割當てられた宿命だ」

——この女を救ふたゞ一つの道はある、それは彼女を肉體的にも愛してやることなのだ。さうすれば彼女は水死することからも逃れ、彼女は一生幸福でもあらう。彼女は美しい。美の女神の如く美しい。然しその美を所有することは私にはあまりに容易であるだけそれだけ、私は自分に對して反感を感じる。彼女は魂では無い。魂としての彼女は木偶である。それは眼も耳も持たない。たゞ我儘で、無學な淫賣婦にしか過ぎない。そしてもう永遠に處女らしい所は奪はれて了つた無数に傷ついた土器である。たゞ美に耽溺するとすれば、彼女は善き玩弄物である——實際安價な玩弄物である。

然し、私自身の魂に取つては、それは最も恐ろしい爆烈彈である。彼女の若さと、嬌艶と、魅力は陶酔の價値は充分あるにしても、私は嘗て自ら立てた誓を破るには餘り臆病だ。——俺は聖人になるのだ、俺は清くなる！俺は一人の女にしか膚を許さない。俺は水晶の如く透徹した魂の持主になるのだ。——かう誓つた自分に對して、今更、美とその陶酔の爲めだ……とは云へ、姦通を許容する勇氣を持たない。

或は、それ自身は、美しいものであるかも知れぬ。然し、私自身に取つては……その魂の透徹の爲めには必ずしも感心したことではない。

美を肉に求む可きか、魂に求む可きかと云ふことに就て、今俺は岐路に立つてゐる。肉の美は外に誘ふ。然し、既に握りしめた魂の透明性とその美を濁らせ、それを破ることは、あまりに惜しいことだ

——若い娘の美は俺の美ではない。それは彼女の美でもない。容貌の美は何人の所有にも屬せざるものである。把束し得る美は魂の美のみである。容色の美は奪ふものがある。魂の美は奪ふものがない。眼を閉じて見れば玉枝も美人ではない。眼を閉じると、闇の中に癩病の血腫でも平氣で吸ふ光明皇后が立つてゐる。それは光明それ自身に没して居る爲めに容色すら瞭然わからない。然しそれは

光明そのものである。それは奉仕と犠牲の爲めには他化自在の菩薩である。それは性慾以上の光輝あるもの、それは貧しき友の爲めに一眼を捧げて微笑つてゐる貞淑なる妻である。

——永く棲みなれると、夫婦と云ふものは二つ心のものでは無い。それで自分が自分に愛憎をつかすことのあるやうに、折々は自分を祝福する爲めに存在する貞淑な妻に對して興味を失はぬことが無いでもない。新しいものは珍らしい。珍らしいものには興奮もあり刺激もある。煩悶もあれば、痛快味もある。然しそれらは、久しく棲み慣れた良妻が與へる魂の藝術の百分の一にも價しない。妻の與へるものは新鮮な空氣と、透徹せる水と、白色の光線のみである。それはあまりに靜かであり、あまりに變化に乏しい。それで、靜寂と、純一と、透明さを愛することを欲しないものには妻の面白味がわからない。肉の戀は永遠の溪流に急激な程度を嚙む程度の感性的のものでなければ承知しない。それは永遠の結婚式を要求してゐるのである。それは浮雲の變化性を愛することを知つて、驟雨の恩恵を知らない。

——妻は魂の爲めである。肉の爲めには一生に百人の美人があつても足りない。月經に、妊娠に、疾病に、老衰に、性慾の爲めのみならば、美人は千人あつても足りない。この女はこのところが面白く、あの女は他の點が興味をそゝる。人間だもの美しさを持つて居らぬ女は少ない。

美の爲めに戀せねばならぬにしても、耐久力ある美は、結局は魂の美である。そして、と妻は持久性の美の把持者と云ふことになる。

昔、ダンテが、戀人と、妻とを分離して考へた時代とは違つて、白熱した戀に酔はんとするものは二つの魂を持たない。一つを戀人に、そして一つを妻にと、一つしか魂を持たぬものは、その一つを捧げる爲めに、どちらかに決定せねばならぬ。

そして、美が結局は自分の爲めであるとすれば、自分の持つてゐるものをも突き放してはならぬ。

——自分は魂の透徹さを破りたくない。自分はその魂を既に妻に與へた——そして自分の魂は落付いた筈だ。それを再び美しく若い……と云ふ理由で、新しいヴェキナスに捧ぐべきものはなす。

——結局、自分は自分である。瞬間の色欲の満足の爲めに、今日まで護つて來た法域を何人にも開け渡すことは出来ない。俺は神に近づく爲めに、もう一つ上の階段に昇る！俺は残酷ではあるがこの美人を踏み躪つて、魂の美の爲めに供養にする。俺は残酷の神カリのやうだ。容色の美は、楽しむことは出来ても、自分のものにはならない。自分のものにならないものは絶対性を帯びない。近く可き

美は逝かせるが善い。美人の美も魂の中に植えつけられて、初めて美として完成する。魂に植付けられた美人は、尤早や單なる感覚から遊離する。

永遠に愛する道は、性慾を越えて愛する憧憬に勝るものはない。若き娘の美を魂の美に置き換へんとするものは、それを永遠への無限曲線に結びつけねばならぬ。

魂を愛するものは、眞に美を愛する工夫を知つてゐる。俺は若き娘の魂を愛してゐるから、若き娘を永遠の美と結びつける。

永遠の爲めには、瞬間を犠牲にせねばならぬ。

——然し、玉枝は無限も、有限もない。玉枝は生か、死か、二つの中一つしか知らぬ。そして、愛せられる道を發見すれば生きるし、捨てられるれば死ぬことはわかつて居る——』

そして、榮一は今や固く決心した。

『——玉枝を捨てる……彼女は捨てられる

それは魂の爲めである。永遠の途の爲めである——神よ、この小雀を守り給へ——

——さう決心してみると、玉枝は生きた屍である。生きた屍だと思ふと不憫になつてくる……』

驛々に乗客の乗り降りが激しい。然し、わざとか、知らずでか、乗客の込む中で玉枝はとう／＼折

尾に着くまで、一言も云はなかつた。

そして、客車の窓で別れる爲めに手を出すと、たゞ一言玉枝は小さい聲で云ふた。

『姉さんよろしく——』

さう云ふて、俯向いてハンカチで顔を蔽ふた。

『兄様——もう之が、この世の最後のお別れです——』

新見も、その聲を聞いて、先つきからの幻想と思ひ較べて、涙無しには立つて居られなかつた。

『そんなこと云はないでねえ、お世話しますから、どうか、私達のところまで来て下さいよね——』

さうは云ふたものの、榮一は汽車が出るとすぐ身投げでもしないかと心配した。それで、一列車遅

れて、大牟田に行かうかとも思ふた。然し別れることが遅るれば、遅れるほど、彼女の煩悶が募る

ばかりだと思ふたので、潔よく、玉枝の手を振り切つて、榮一は熊本直行の列車の片隅に座つて了

つた。

汽車は出た。玉枝は顔もあげ無いで、ハンカチで顔を隠した儘、プラットホームに立つてゐた。新

見はもしや玉枝がレールの中に飛び込みでもしないかと、玉枝の姿を凝視してゐた。やがて彼女は眼

からハンカチを取り去つて、大きな瞳で、窓から顔だけ出してゐる新見の姿を、うらめしさうに見詰

めてゐる。列車はカーブになつたところに來た。プラットホームに立つてゐる嬌艶な玉枝の姿は見
えなくなつた。

新見は三等室の坐席に小さくなつて、玉枝の爲に祈つた。

三十四

一も三井、二も三井、三も三井、三井でなければ、夜も日も暮れぬ感を與へられたのは大牟田市で
あつた。

かほどまでに、一つの株式會社が、日本の社會組織に喰ひ込み得るものであると云ふことは、新見
が大牟田を訪問して初めて知り得たことであつた。三池と云へば彼が幼ない時には極惡の囚人ばかり
が送られるところだと聞いてゐたが、そこは實に資本家の寶庫であつた。大牟田は三池を初め、熊本
縣にかゝつてゐる萬田など七つばかりの炭坑が集つてゐる坑夫街である。三井はこれらの炭坑の生産
物を色々と利用して、亞鉛工場其他色々の化學工場を設けてゐた。あの淋しい田舎に、よくもあれだ
けの工場設備が出來たものだと思はされる程であつた。
榮一はもう旅に疲れてゐた。そして何處を廻つても不愉快なことばかりであつた。玉枝の碎かれた

魂を見ては、北九州も何にも少しも面白くなかつた。

玉枝と別れて、大牟田で一晩驛前の旅館で泊つたが、何となく淋しくて耐えきれなかつた。それは
妻の喜恵子が居らぬからと云ふのでも無い、玉枝が特別に可哀相と云ふのでも無い。性慾を要求する
以上に彼は疲れてゐた。彼は見て廻ることに疲れた。自分がいやになつたやうに感じた。何だか、神
聖な気分が自分から蒸發して了つたかのやうに感ぜられてならなかつた。自分一人で、いくらやきも
きしても駄目だと云ふ感じが強く湧いた。

これは俺一人の力では、どうにもならぬ。之は組織と民衆の力でなければならぬ。俺は民衆の間
に行く――

かう考へて、彼は直に急行で神戸に歸つて來た。

そしてその汽車の中で見た新聞號外は、神戸の米騒動を報じてゐた。

三十五

XXXXX。XXXXX。

今朝は、お米が五十九錢五厘になつたと、水道側で長屋のおかみさん達が口繰く、米屋とお上を罵

山川は花木の總支配人である。

『おまへんところは米を買ひメめただらうがな！』

最後の聲で、事務員はその群衆が何であるかよくわかつたらしい。

奥の方から丸苧の男が慌たしく出て来た。卵色の麻の質素な夏服をきてゐる。

『どうか、お通り！ どうか應接室にお通り下さい。詳しくお話を承ります。そして當方に於て辯明させて頂く點はよくお聞入を願ひます。』

その番頭は相當有力なものと見えて、その男が立ち上ると、すぐ應接の間に電氣をつけるものがある、椅子を運ぶものがある。勝之助も少なからず花木の番頭達の腰の低いのと、よく動作の一致してゐるのに驚いた。

應接室へ通つたものは、十五六名あつた。

勝之助は、丸苧の男と相對して坐つた。外のものは勝之助の後ろに立つてゐた。

勝之助は例の頓狂な聲で丸苧に云ふた

『—あんたのところは、我等勞働者の困ることは、何とも思はんのですか？』

勝之助について行つたものの中で、相當に人品の高い紳士風の男が一人ゐたが、生意氣に口髭をひ

ねり乍ら、丸苧を睨み付けてゐる。

『—さう仰しやらないで、當方の云ふことも少しお聞き下さい！』

『聞かんでもわかつてるがい！ お前んところが、日本の米を買占めするものやから、我々勞働者が食はずに居らんならんやないか！』

『當方は少しも 今年になつて、米を買占めては居りません。私方は唯今外米輸入が専門であります。』

『嘘ぬかせ！ こん畜生！』

仲仕風の男が、勝之助の椅子の後ろに蹲つてゐたが、急に立ち上つて、足踏みしながら叫んだ。

『俺はなア、辨天濱の倉庫に居る仲仕ぢや、フランスへ送るつて云ふて、今年になつてから、お前んとこの米をどれだけ外國へ積み出したか俺は知つてゐるぞ！ 嘘ぬかしよつたら、ぶん擲つて了ふぞ！』

突然、サーベルの音がした。八九人の巡査が警部に引率せられて、應接の間の入口に立塞つた。

中學生のやうな顔をした警部が聲荒だてて云ふた。

『此處に居るものみな一度警察に來い。云ふ可きことがあるならば警察で云へ。』

丸刈はぼつと息をついて苦笑をした。

群衆は黙々としてそこを出た。巡査の一人は「××××××？」と尋ねた。「××××××善し」と警部は小さい聲で答へた。

「勝」は應接室を出る時に、丸刈を尻目にかけて突鳴つた。

「××××××！」

巡査の一人はつかくと勝の處に近づいた。

そして勝の腕を捕へた。

「早く行け！」

事務室のものは總立になつて彼等の出て行くのを見守つて居た。

室の正面の大時計がカンカンと九つを報じた。裝飾傘のついた電燈は燦爛として輝いてゐる。

勝之助は、陽気な事務室の空氣と、暗い貧民窟の我家——そして今引かれて行く警察署の監房とを頭の中で思ひ較べて、××××××××××××。

三十六

翌日の新聞紙には京都七條の貧民窟が騒いだことが詳しく報ぜられてゐた。然し神戸は在外平靜であつた。相生橋警察署に引張られた山内勝之助初め外十三名のもも、みな一度釋放せられた。

この調子では何の事なくして済むであらうと考へられた。

午後四時過ぎになつて、市内の米屋は思ひ合せたやうに立札の文字を書き換へた。そして「六十二錢五厘」と書いた。貧民窟の路次から、五十錢銀貨一枚持つて、表の米屋に出掛けたおかみさん達は「お米が一升六十二錢五厘やぜ！」

「嘘、云へ！」

「ほんとやがいし、今行つて來たんや、五十錢で一升買へんやでエ」

「京都に大騒動が起つて居るつて、ほんとかいな？」

「米屋は無茶やな！」

かうした聲は路次の隅から隅まで擴がつた。そして午後五時過ぎには貧民窟の凡ての米屋の前に人山を築くほど人だかりがしてゐた。神戸葺合新川のお米屋で最初人だかりしたのは電車筋に沿ふた北本町四丁目の西角の村尾商店であつた。

「こら、貪慾阿爺！」

『二十五銭にまける！』

『こんなに高うては仕方がないな』

こんな聲が群衆の中から聞こえた。群衆の中には村尾の主人と直接談判してゐるものもあつた。然し村尾の群衆はイエス團の竹田の弟が解散せしめた。

『此處の主人は、善人や、こらへてやれ！』

さう二三度繰返して叫ぶと、群衆は自ら退散した。

然し、同じ群衆はすぐ電車線路に沿ふた南本町五丁目の竹井の米店に集つた。日は暮れかゝつてゐた。そして軒々の電燈がぼんやりついてゐる。竹井の店に集つた群衆は村尾の群衆より獷猛であつた。初めから家の中にXXXXXX。氣の早いものはXXXXXX。木賃宿から出て来たおかみさんらしい女は勝手に風呂敷を擡げて、XXXXXX。それから全く商脈であつた。四五百人の群衆は竹井の店をXXXXXX。戸も障子も、押入の諸道具もXXXXXX。逕査はたゞ手を拱いて見てゐた。

XXXXXX群衆は、新川の米屋十四軒を片端から征伐した。そして唯一つ残したのは、水田の親分にすがつて、護衛をつけて貰つた、北本町六丁目の前原商店だけであつた。更に群衆は午後七時半頃神戸の東端、春日野道にある、貸家取次業の株式會社兵神館までもXXXXXXと云ふ大騒ぎになつた。

まだ下の竹井が襲撃されて居る頃であつた、山内勝之助は人に知れないやうに新川を出た。そして、また湊川公園に駆け付けた。此處は存外靜かであつた。たゞ、昨日と同じやうな程度であしここで集團を造つて論じ合つて居た。日はとつぶり暮れた。新開地の活動小屋は客で一杯であつた。

勝之助は全く張り合ひが抜けたやうな調子であつた。然し彼はまた「高飛び」の臺の上に登つて、群衆を招いた。

群衆はドツと集つて来た。

『……諸君、之から再び花木商店に談判に行かうぢやないか！昨夜僕等は花木に談判に行つた爲めに警察へ拘引せられたのだ！今度はもう最後の談判をせねばならんだ。葺合では、米が高い爲めに、今暴動が起つてゐる。僕は先刻にそれを目撃して来た。我等はそれをXXXXXX出来ない。これと云ふのも全く天下の奸商共がみな我等を虫けらのやうに思ふてゐるから起るのだ。……』

此處まで叫んだ時に、群衆の中に

「××、××！」

「××××！××××！」

と叫ぶものがあつた。そして氣の早い連中は先に走り出した。一人が走り出すとみな走り出す。で、勝之助も演説を中止して、大勢の走る方について行つた。今日は電車に乗らなかつた。群衆の凡ては走つてゐた。十四五分走つて花木商店の前に来た時に、花木商店は戸を鎖して光を消してゐた。土方風の男が、入口の硝子戸を叩いたが何の返事も無かつた。一三十人の方が一度に叩いた。表の硝子戸は××××。

薄闇の中に西側の避難梯子を仲士風の男が登つてゐると見えたが、間もなく、××××××××

××××、××××××××。

「××、××××！」

「××××！××××！」

「××××××！」

「花木は××××××××××××××××××××！」

相生署の消防隊が駆け付けた。群衆はそれを通さ無い。ホースが引かれた。群衆はそれを××××××××××××××××。消防隊は神戸新聞社の方から水をかけた。群衆の一人は「神戸新聞社」に

棟木に火が燃え移り焰が高く上る度毎、群衆は「××」×××。××××××××××××××××。それは恰もネロ皇帝がローマの焼けるのを見て痛快がつたやうに、民衆は花木の總本店の焰上することを痛快がつて見物して居る。焰を見て集つたものはその數幾萬人有つたかわから無い。

群衆は騷擾に酔ふてゐる。火の子が、仕掛花火のやうに散る！焰が渦巻の形をして立ち上る、幾萬の見物人の顔がその爲めにほてる。恐ろしい速力で焰が流れる。或は高く低く、或處は紫色に、或所は紅に、或所は白色に、或所は青く、錦の衣を光で織り出したかのやうに光線の藝術がそこに現れる。拜火教徒が太古、火を拜んだやうに、近代人も火には魅力を感じる。火は日没の夕燒雲の如くほてつた。花木の向側の頑強に出來たルネサンス式の三菱銀行が、照明燈で照らされたやうに、暗の中にくつきり浮き出してゐる。群衆はたゞ、もうその異常なる色彩と運動の藝術に酔ふて居る。

巡査が××××××××。消防手がやきもきする。所々に群衆と巡査が小競合をやる。群衆が巡査を

擲擄する――

「あんたも月給が少ないのでお米が上つたら、おかみさんが困るでせう」

巡査が笑ふ、群衆はそれを見て、ドツと吹き出す。巡査が「×××××。群衆は「××」×××。

消防夫が花木の家にホースを向けると、群衆は承知をしない。何百人のものがそこに雪崩込んで、消防手の筒先を反対の方向にむけさせる。そこに格闘が起る。それが明暗のついた舞臺で操人形が活躍してゐるやうに人々の眼に映る。人の顔は誰が誰だか少しもわからない。たゞ、みな刻々の變化に興奮し切つてゐる。消防手はたゞ周囲の家屋に飛び火しないやうに勤めてゐるのみである。細い溝のやうな宇治川を挟んで、東隣は郵便局である。そこを消防夫は懸命に守つてゐる。水が時雨のやうに注がれる。水滴に火焰がうつる。街路は水でダブ／＼になつた。そこも火焰が映じて、赤く染まる。群衆は口々に花木の暴状を數へて居る。そして、若旦那の成金振り、釣竿に一萬圓かけた話から妾が何人あるとか、嫁入に幾十萬圓使つたとか、一匹幾千圓とかする獵犬は犬の學校に通學して居るとか、花木の經營する造船所では職工が藁小屋に住んで、犬だけの待遇も受けて居らぬとか、成金時代によりさうな事を一々數へあげてゐた。

花木の女御主人さだ子は總本店の襲撃を聞くや、早くも須磨の本邸を逃げ出した。山川支配人は東京に居たが、すぐ歸る準備をした。

一火を見て勇氣を得た群衆は、更に三派に別れた。一團は萬歳を連呼しつゝ宇治川を溯つて縣廳裏に出で、一團は湊川公園より兵庫の方面に出動した。第三團は最後まで榮町筋に止つた。そして警察の××××××××××××××××。花木系統の重要な工場、神戸市内の借家三分の一を支配する悪家主の統領兵神館の本店支店合計七ヶ所が焼拂はれた。その間に刑事の活躍も相當に目醒しかつた。暴動の指導者として眼ざすものには後から尾行して彼の知らぬ間に白墨で×の印をつけ、後からその者を片端から檢舉した。

細長い神戸の街に、一度に七ヶ所に火の手を見た神戸市民は、どうなることかと夜の眼も閉づることが出来なかつた。神戸が成金の最も増長したところであるだけそれだけ、市民は彼等に對して反抗的であつた。それは殆んど組織を持つた暴動では無いかと有産階級の膽を冷からしめた。

神戸市長は慌てゝ兵庫縣廳にかけつけた。眞夜中であるにかゝわらず知事は正廳に坐つて居た。彼は市内に立ち上る焰を見詰めながら、各方面から集つてくる報告を聴取して居た。

岩下知事の二倍もある大男の島谷市長は立つた儘慌てた句調で云ふた。

「出兵を陸軍省へお願して下さらないでせうか？」

「出兵？」

聰明な知事は彼の小さい顔に微笑をたゞへ乍ら市長の瞳を見詰めた。その態度は如何にも市長を見詰つたものであつた。

「出兵つて……君、……軍隊を出して何をするのぢや、君」

市長はあばたのある知事の顔を凝視して答へた。

「こら、全く、XXです」

「君、何を云ふてゐるんだ、單なる米騒動ぢやないかー 市民は決して政府に恨みがあるのではありません、その證據には先刻、この裏を走つて通つた群衆の一團は、縣廳に向つて萬歳を連呼したではないかー あまり成金が横暴をするから、下層民が成金に對する反感心から、こんな騒動を起したのです。……」

私は陛下の赤子を征伐する爲めに一人の兵卒をも動かすことを欲しませぬ。」

知事は斷乎として出兵に反對した。そして顔を背けて窓の外に見える花木の焰を見詰める。ひつきりなしに電話がかゝる。

市長は猶も知事を動かさうと努力した。

「然し、他の良民が迷惑するぢやありませんか？」

「さう云ふけれども、君、今日までの情報によるならば、襲撃を受けて居るのは單に市内の米屋とその問屋筋の花木の如き、また悪家主として世評のある兵神館だけぢやないかね、出兵する理由がどこにあるかね、物價變動によつて突發した經濟的暴動を武力で鎮壓することが出来るであらうか？ 君の要求は全く當を得たものとは考へられ無い。寧ろ中央政府に要求して、米價公定價格を發表し、日用必需品の物價を一定する方が百萬の軍隊を動かすよりも有効だと思ふが、どうだね？」

市長は曇つた顔をして黙つて聞いてゐたが、知事が息をつくとすぐそれを反駁した。

「理論から行けば、さうに違ひないかも知れないが、實際、市内は全くXXの狀態ぢやありませんか？」

「それは私も認める。然し、それはひとり軍隊の力だけで解決は出来ない。もし間違つて、軍隊が良民を傷けるやうなことがあれば、それこそXXに導く恐れがある。」

飽迄、知事が反對するものだから、市長はその儘引き上げて了つた。

市内七ヶ所に燃え上つた焰は、午前一時頃には、全く終熄した。

夜の静寂はまた翼を擴げて人口七十萬の大都會も大自然の一部に復歸させた。そこには騒擾も、反亂も、憎悪も、火焰も無かつた。たゞ六甲山脈が獺のやうな姿をして、茅の海に水を呑みにでも行く

かの如く海岸に首をさし伸べてゐた。

三十七

騷擾の後の静かな夜は、晴れ渡る八月の空と置き換へられた。十三日の朝神戸市民はまた特別に美しい日出を見た。

然し神戸葺合新川の貧民窟はその清い朝に祝福はされてゐなかつた。

誰れ云ふともなく水田の乾分が護衛して襲撃させなかつた北本町六丁目の角の米屋を、今日西から人が来て焼き拂ふのだと云ひ出した。

「サア、大變だ、今日は新川全體の焼打ちだとさ」

さう布れて廻つたものもあつた。それがまたどうしたとか耶蘇教も一緒に焼き打ちせられるのだと聞いて来たものがある。

戦地からの避難民のやうに新川は上を下へとゴツタ返した。或者は新生田川の川底に家財道具を一切持ち出す、吾妻通四丁目の廣場に一族を纏めて、そこに避難する。元來貧しい人々である爲めに、家財全部を取り出したところで澤山あるわけでも無いが、それでも最近の好景氣に衣裳箆筒、茶箆筒、

それに「みづや」など持つて居るものが随分多い。夏の太陽は昇つた。午前八時頃までには葺合新川の長屋の軒の隅々まで太陽が覗いて居たが、そこは全く伽藍洞であつた。彼等の凡ては避難を怖れて、他に避難したのであつた。

北本町六丁目の新見の二疊敷附近の騒ぎつたら並大抵ではなかつた。おなつさんは一つの品物を取り出す度毎に、それに説明を附けた。それを鶴田のおばさんが一々應待するのであつた。紙屑買ひの連中はこんな時を善いことにして、新川を漁り歩いた。おみさも天秤棒を肩にしておなつの家の前を通る――

「勝ツさんがやられたさうやでエ」

とおみさが云ふ、おなつがそれに應待する。

「勝ツさんて、誰れやいな？」

「あの山内の勝ツさんやがいな……あの飴屋の勝ツさんやがい――」

「やられたつて、どこいや？」

「昨夜の騷動に加盟でもしてゐたのやろ」

こんな騷動の中に、酔拂ひが路次をうろつく。子供等が昨夜の暴動の眞似をして騒ぐ。然しそれも

暫であつた。凡ては静かになつた。そして午前八時頃には北本町の路次には人影を見ることが稀になつた。

表筋はまだ騒いでゐた。殊に吾妻通五丁目のイエス團の騒ぎ方と云へば大變であつた。恰度その時は久方振に呉の海軍に志願兵として海兵團に入隊してゐる益則の弟の義敬が歸つて来て居たものだから騒ぎは一層大變であつた。

——その騒ぎの眞最中に新見榮一は九州から歸つて来た。——

市内はそれ程までどもなかつたが、葺合新川にくると、まるで大掃除の日のやうに騒いで居た。榮一は何をしてゐることかとお可笑くなつた。神戸の騒いだことは姫路で新聞の號外を見て知つてゐた。

義敬が丸裸になつて、二階の欄杆の前の軒屋根の上から書物を下に投げつけて居る。

「義敬さん！ 何事が起つたのだね、えらい、慌てゝ居るねエ」

旅装も解か無いで、榮一は街路から軒屋根の上立つてゐる弟を呼びかけた。

「兄さん、お歸り：かうせんとなア、今夜は此處が焼打に會ふと云ひますからな、貴重品はみな廣場へ取り出して置かんと、もしものことがあると悪いですからなア」

彼の顔は日に焦げ、如何にも逞ましく見えた。

「義敬さん！ よしときませうや、そんなところから書物など抛ると、たゞさへ落付の無い人心が一層落付かなくなるから、止して下さい。そして、もう少しみんなが落付くやうに方法を講じませうや……」

「運んで置けば、安心なんだがなア」

義敬はそれに對して如何にも不平らしかつた。然し、上官の命令に慣れてゐる志願兵は敢て反抗しやうともせず直に中止した。

榮一はイエス團に這入つて行つた。そしてイエス團の青年達に集つて貰つた。そして人心の鎮まるやうに逆宣傳をやることをきめた。「新川一帯の人々は安心して、労働にお就きなさい！ 困つた人々の家を焼き拂ふやうな亂暴なことをする人は決してありませんから、家財家具はその儘にして落付なれ」と布れて廻ることにした。

實際、新見は貧しい人々の住宅を案内もなしに焼拂ふことの不合理を考へた。花木を焼き、兵神館を焼いた人々は被征服階級の人々であるに違ひない。その人々が、自分の家に火を附けるとは考へられないことであつた。

然し、新川の人々が騒ぐに道理の無いこともなかつた。もう十年も前のことであつたが、新川の大親

分の水田と、新川のすぐ近くに住んでゐる關西切つての土木の大親分吉田との間に大争鬭があつて、新川に血の雨が、一週間も續いて降つたことがあつた。昨夜のやうな大騒動を見た眼には、水田對吉田のやうな大騒動がまた再現しはしないかと恐れるのであつた。

新見の逆宣傳は相當の効果があつた。

『さう云へば、さうやな、貧乏人助けの米騒動に貧乏人の家を焼くと云ふことは理窟に無いこつちやな—』

など云ふて、廣場に運び出した釜をまた長屋に運び入れるものもあつた。

『今迄に來なかつたら、晩にも來はしませんな』と云ふて、ノソノソまた一旦捨てた自分の家を怖る怖る見に歸るものもあつた。

然し、逆宣傳に耳をも借さないで、どしどし家財を運び出すものゝ方が歸る者の數より遙かに多かつた。その時ほど榮一が流言蜚語の勢力の強いのに驚いたことはなかつた。「こんなに殺氣立つて居れば、必ず今夜は何か起ると彼は信じた。その中に誰れ云ふともなく、

『今夜は元町を××××××さうな』

と流言が傳つて來た。

新見は直に家を飛び出して、兵庫縣廳の岩下知事に會見を求めた。新見は知事に云ふた。

『—知事さん、酒屋を直に閉鎖して下さい、一週間の「絶対禁酒令」を出して下さい。で、なければ神戸市は危険です。』

知事は小さい身體を大きな椅子に埋め、その細い眼を新見に向けて云ふた。

『—そんなことが君出來るものか、それは中央政府の権限に屬するものであつて、地方長官はそんな権能は絶対に持つてゐないのだ。』

『然し禁酒令を出さなければ今夜は酔拂ひが暴れますよ、』

『さう云ふ模様かねエ……、然し今から内務省に電報を打つたところで返電の來るのは早くて明朝、少し遅れると明後日頃になるから、君の御忠告は有難いが、それは實行不可能でせうね』

新見は自信のある態度で知事に云ふた。

『それでは仕方がありません、然し、あなたは必ず私の言葉をお聞きにならなかつたことをお悔ひになるでせう』

さう云ひ棄て、彼はまた貧民窟に飛んで歸つた。

その日の午後五時、暴徒の一群は糞合新川を出た。そして磯上通五丁目の酒輔本高田屋の總本店を

襲撃し、酒樽の蓋を抜きビール瓶を奪ひ三十分たぬ中に市價九千圓の酒を全部呑み干して了つた。そして、酔拂ひ氣分で、元町筋の襲撃に出掛けた。ワツショ〜と幾千人の彌次の連中が一緒になつて走る。暴動の近づいたことを知つた店舗はみな思ひ合せたやうにガタンピシャン〜店を閉じる。その時はもう遅かつた。何の爲めの餘憤かは知らないが、立派な商店が軒を連ねて並んで居る神戸の銀座である元町通は襲撃を受けた。一枚數百圓もする鏡のやうに磨ぎ澄まされた裝飾窓の舶來ガラスが××××××××××××××××。

酔拂つた群衆は酒輔のコップを庭に擲きつける調子で、或物は棒先で、或者は鳶口の尖先で、或者は切石の先で、走りつゝ打砕いて行つた。瞬く間にアスファルトを敷き詰めた膚のやうに滑かな大道路はガラスの破片で充滿した。その日百十三萬圓のガラスが破壊せられたと後に新聞紙は報じてゐた。罪の無いガラスの破壊で調子づいた暴徒は引續いて園池の本店の襲撃に向つた。

園池は評判の悪い貿易商で、阿片の賣買や、米の買占めでしこたま儲け、それによつて、山本通の五丁目に帝王の宮殿を凌ぐ立派な本邸を建築し、その庭を造る爲めに十七軒の家を立ち退かせた成金黨の旗頭であつた。

園池の本店と云ふのは、榮町三丁目にあつた。あまり見榮えのしない店であつた。木骨にブラスタ

1を塗つた粗末な西洋造りで、近所に並んでゐる三井銀行のやうな大きな建築物や正金銀行に較べて如何にも貧相に見えた。それだけまた眼につき易くあつた。群衆が元町から榮町三丁目に廻つた時は、何處から出て來たか、先廻りした群衆は園池商店の門先一杯になつてゐた。電車は勿論運轉を中止してゐるので、街は廣かつたが、何萬人と數へられぬ程の群衆の爲めに殆んど身動き出來ぬ位であつた。それでも元町を荒した暴徒の一團が榮町に現れた時には群衆もパツと道を開いた。仲仕風の男を先頭にして、十五六人の土方と見える一團が手に手に兇器を携へ、園池本店の前に現れた時に、群衆は『萬歳！』を以つて彼等を歓迎した。

園池の店の鐵の門は固く閉ざれてゐた。表に向いた二つの窓も鐵戸が閉つてゐた。彼等はそれを高口で引き壊つた。然し、そこから侵入するにはあまり窓が高過ぎた。警察は××××××××××。彼等は努力して鐵門を破壊せんと試みた。そこへ何處からともなく軍用自動車に乗つて一小隊の軍隊が颯付鐵砲で現れた。

規律整然たる軍隊の前には民衆もサツと道を開いた。自動車は園池本店の前に止つた。軍隊が自動車を離れた。園池の前でゴソ〜してゐた連中の二人は××××××××××××。他のものは群衆の中に逃げ込んだ。

それを見て群衆は怒り出した、軍隊の乗つて来た自動車を擔ぐやうにして海岸まで押して行き海の中にそれを投げ込んで了つた。

軍隊が出たと聞いた群衆は、方向を轉換して、山本通の園池の本邸を襲はんとした。然しそこにも早や一大隊の軍隊が見張してゐた。

軍隊の居らぬ市内の貧民窟では酒屋の略奪が始まつた。新見は新生田川の交番所の前を平氣の平左で「ふご」に略奪品を入れ貧民窟に運ぶ幾組かの強奪者を見た。

新見は市民が之以上亂れないやうに強く祈つた。その晩は祈の中に過した。

翌日彼の目醒めた時に、保田は廣場で數十人の壯漢が酒樽を中心に酔ひ潰れてゐる光景を見ないかと注意してくれた。保田に連れられて行つてみると、事務所から東へ一町もない吾妻通り四丁目の廣場に數十人の壯漢が算を亂して酔潰れてゐた。勿論それは略奪品で散財したのであつた。

その夜は大阪でも、岡山でも、姫路でも大騒動を演じたらしかつた。それらは、みな社會主義者が煽動したらしく報ぜられた。然し實際騒いだものはみな貧民窟の人々であつた。

四日目に巡查の示威運動が始まつた。五百人位いの白服の巡查が帽子の皮紐を固く頸に締め付けて四列縦隊で貧民窟を行軍した。そして、木賃宿を一軒一軒檢擧して廻つた。然し、その時はもう大抵の略奪品は隠され飲み盡されてゐた後であつたから、檢擧されたものは僅か十人位であつた。然し五百人の巡查はその十人の捕虜を縛つて意氣洋洋と引上げた。

イエス團の二階から巡查大隊の行進を見て居た新見榮一は、その珍らしい光景に哄笑を禁じ得なかつた。彼は側に立つてゐた喜恵子に云つた。

『今頃何をして居るんでせうね、あの人達は？』

神戸の米騒動は西へ、西へと蔓延して行つた。九州が騒ぎ出したのは八月十五日からであつた。新聞紙によると、新見が視察して来た炭坑で騒が無いものは、たゞ貝島系の炭坑と二瀬の海軍炭坑だけで、他の凡てのものは騒いだ。中鶴も、坑夫は日用品配給所を破壊し、大牟田の萬田坑でも坑夫は放火してあばれたと報じてゐた。新見は彼の豫覺があまりに早く當つたのを不思議に思つた。

新聞紙を眺め乍ら、新見は日本のXXXXXXつゝあることを固く信じた。

米騒動が済んで間も無いことであつた。村山佐平が突然紀州の新宮に接した三重縣の傳道地から歸つて來た。そして何にも云はないで、たゞそわ／＼して居る。

村山は伊豫の宇和島の師範を半途で退學し、神戸神學校も一年で飛び出し、貧民窟の彼を慕ふて新見が渡米する前は、長く一緒に居たが、いつも長續きしないで、出たり這入つたりしてゐた。新見はアメリカに出發する前に徳島の宣教師マコウレー氏に彼を依囑した。よく勉強したと見えて、不思議にも村山はキリスト教傳道師の試験に一番で及第した。そして彼はすぐ阿波を飛び出して、三重縣の傳道地に赴任した。

米騒動の後、彼は突然官權の手に捕はれた。それはこんな理由である。夏休みに、東京から歸つて來た波多野と云ふ私立大學出身の司法官試補の青年と、涼みがてらに話をしてゐた。そして話が偶々××××××××××××××。村山は冗談混りで××は國寶だから骨董品として取扱へば善いと一寸と口を迂らした。

『それじゃ、君は、××はなくても善いと云ふのか？』

司法官試補が尋ねた。それに對して、

『まあそんなもんだね』

と村山は別にそれがたいした問題になるとも考へないで、夕涼み気分で答へた。

翌日、司法官試補は區裁判所に出頭して、檢事に、村山と云ふ耶穌教の傳道師は危險思想の宣傳をしてゐると報告をした。早速村山は檢事局に呼び出された。それまで閑で困つてゐた區裁判所の檢事は、大收獲が有つたことを非常に悦んだ。そして村山と駈け出しの司法官試補の夕涼みの問答が、鄭重に取扱はれ、聽取書にとられ、變屈で正直な村山は云はないことまで云つたやうな聽書を作られて、それに捺印を捺させられた。

何が何やら薩張りわからない村山はびつくりして、すぐ兄哥のやうに思つてゐる新見のところへ引上げて來た。頑強に見えるけれども小膽な彼は何にも云はないで三日を過ごした。そしてたゞ「傳道地を變りたい、傳道地を變りたい」と繰返してゐた。いつもの村山と違つて、元氣がなく、發狂者のやうに、イエス團の庭からすぐ二階にかゝつてゐる階段を登つたり、降つたり恐ろしく落付かないでたゞ外から訪ねて來る人を待つてゐる様子であつた。

「村山君、君は、何をそんなにそわ／＼して居るんだね」

新見がさう尋ねると、初めて村山は答へた。

「實はね、新見さん、僕には、刑事がついて来てゐるんですよ、」

「どれ？」

「あしこの電信柱に倚り懸つてゐるでせう、あの男です、あれが私の尾行です、三重縣から尾行せられて、三宮署の刑事と交代になつたのです。」

「どうしたんだね、君は危険人物と見られて居るのかね」

そこで村山は始めて凡てを白状した。話を聞いて新見は官権のあまりに無常識なのに驚いた。

九月十一日の午前十一時——恰度村山と榮一の二人が例のイエス團の三疊の臺所に這入つて、茶を呑み乍ら雑談に耽つてゐる時であつた。三宮署から高等警察の係長に巡査が二名附添つて、村山を逮捕に來た。

『すぐその儘、来て下さる』

新見は事のあまり突飛なのに驚いてゐた。然し、明治四十四年の大石綠亭君の例の事件のこともあり、新宮附近の検事も警察もみな神経過敏だから、こんなことになるであらうと、新見は推測してゐたが果してその通りになつた。

村山は泣く泣く新見と別れた。貧乏な彼は小使錢は勿論のこと、手拭一筋だに持た無いで、その儘ひかれて行つた。新見はすぐ後から含嗽具一切と、小使錢と、新約聖書を持つて三宮警察署に飛んで行つた。そしてこの村山が、不敬罪に問はれて、懲役四年の極刑に處せられるとは、その時、夢にも考へなかつた。

村山が三重縣安濃津の監獄に收監せられてから神戸の新見に當て、手紙が來た。それには彼が愈々不敬罪に問はれたから有力な辯護士を入れてくれと鉛筆で走り書きがしてあつた。彼は直に日本に於ける普選運動の第一人者である今村博士と、政友會の幹部である吉澤博士の二人を依頼すべく奔走した。今村博士は直に承諾してくれた。吉澤博士は東京まで頼みに行つたが顧みてくれなかつた。

「イエス・キリストも不敬罪で磔殺にかゝつたのです、不敬罪には辯護の方法がありません、それは司法官が勝手につける刑ですから辯護は何の役にもたゝないものです」

こんな云つて教へてくれた。教へられなくとも新見は法律の眞價をあまりによく知つてゐた。然し、裁判官の中にも「博士」を畏敬するものがあつて、少しは刑の割引位はしてくれるかも知れぬと、たゞひとへにそれを希ふてゐたのであつた。

裁判はすぐ第二審に廻された。それで、今村博士と新見は一緒に津市の安濃津地方裁判所まで出掛けた。然し、傍聴禁止で新見は法廷に這入れなかつた。今村博士は唯一人の辯護人として努力してくれた。然しそれは裁判官の意志を翻すに多大の影響はなかつた。判決の云ひ渡しは第一審より六ヶ月減じて三年六ヶ月の刑の云ひ渡しがあつた。

たゞ單なる夕涼の會話が、三年六ヶ月の禁錮の重大問題になるとは、おそらくは誰も考へなかつたであらう。それは新見に取つては全くの驚きであつた。

『——この×××！この××××！これを××××××××××、××××××××××！』

新見が村山の刑の執行を聞いた時に、彼はすぐかう考へた。

三十九

八月の暴動は日本政府に非常なショックを與へた。公設食堂、公設市場が全国各地に設けられ、米價調節の基金が農商務省に積まれ、外國米の輸入税は解禁された。

それでも米は相變らず高い。俸給生活者の中には泣いてゐるものが頗る多かつた。小學校の教員、巡查、下級官吏など、その生活は眼もあてられぬほど悲惨なものであつた。日本は政治革命の變りに

物價革命に見舞はれた。家賃はみるみる中に二倍半昇つた。それだけでも猶足らなくて、やれ、権利金だとか、やれ敷金だ、やれ店賃だと、色々の文句が附いて實に恐ろしく暴利を貪る家主が多くなつた。

高くなつたのは家賃ばかりではなかつた。砂糖が高い！洋服が高い！紙が高い！本が高い！車賃が上る！電車賃が上る！散髪賃が上る！上らないのは月俸取りの給料ばかりであつた。日本に住むことは苦痛であつた。新見は日用必需品の物價の安い米國に歸つて行きたいと思つた程であつた。

彼が苦しい中から辛じて經營して居た齒ブラシ工場などでも、一ヶ月に職工の賃銀だけで一千圓を支拂はねばならなかつた。そしてその割合に能率は上らなかつた。

彼は工場の經營に時間を費すことが段々苦痛になつた。イエス團の青年は不熟練工ではあるし、大阪から來た連中は熟練工では有つても懶け者だし、彼は性格の揃は無い職工を一纏めにしてはとても美しい製作品を世に出すことは出来ないといつづく考へた。一つの織物、一本の齒ブラシ、それは畫工がキャンパスの上に繪をかくのと少しも違はないものである、と云ふことを深く考へさせられた。それは全く一つの大きな創作である。綜合的人格の創作である。各部の従業員が最上の努力をして始めて

完全を期し得る復合的天才の作成すべき工芸品である——かう云ふことが工場を自ら経営してみても、榮一の胸に沁々と感ぜられた。

彼は、賃銀の支拂ひに困難した時、金融の爲めに高利貸の門を敲く時、商品を大阪の商店に納める時、彼には全く新しい経済的智識が啓示されることを覺えた。損得の問題は第二義の問題だ！

—— 真正の経済はそんな表面的なものでは無い筈だ！真正の経済は生命それ自身の活躍とその創作にある可き筈だ。生命の發展しない場合にはそれは損であり、生命が延び上る場合にそれは得なのだ。生命を離れて真正の経済は無い。

—— それを資本主義の経済制度では、生命の本質を忘れ、人間の能力を測定するのに貨幣を以てするやうになり、労働を機械化し、人間の創作的態度を機械的に毀ふやうになつた。

その爲めに人間性の凡ては打破され、労働者は賃銀奴隷となり、資本家は利子換算器と變化してしまつた。

—— 企業界の凡ては人間性を失ひ、人類社會の各部に痲痺が廻つた。黄金の中毒は先づ資本家に廻つてゐる。物價の大波を押し切つて彼岸に到着するものは、大船でなければ到底望まれないことであ

る。小船は大船の作る波まで受ける。三井や花木や園池が濠洲から輸入した牛骨の相場は直に新見の小さい工場の製作品の相場に影響する。彼等は工場経営者の苦勞を少しも爲さないで、その利益だけを搾り取る。而も工場を経営する爲めには彼等の勢力範圍の何處かに置いて貰はねば、逆も永續性の望みは無い。彼等にまで行かなくとも、企業家は土地の高利貸だけにでもお愛憎をしなければ、経営が困難である。平生新見が蛇蝎の如く嫌つてゐる高利貸が段々親切な人として、彼の眼に映するやうになつてくる。

何といふその矛盾——何と云ふ妥協——何と云ふ臆病！

彼の胸を刺すものがある。彼の愛する弟子達を失業から救ふ爲めの工夫とは云へ、それはあまり、妥協し過ぎてゐると深く

然し、黄金の中毒はひとり資本家ばかりに廻るのでは無い。労働者にも廻る。酒と女と美服とに酔ひ、朔日と十五日には必度女郎買ひに行き、向上心も無く、たゞ賃銀の値上げばかりしか考へて居らない職工、そして、労働の尊嚴を知らないで、少し金が蓄ればすぐ、商買人にでもなりたいたと考へる賤むべき彼等の考へ——新見は黄金中毒があまりに多くの人々の心を支配してゐるのを悲しんだ。

××××××××—然し、黄金中毒から出發した社會主義は永遠の勝利を約束しない。唯物主義から

出發する社會主義は、黄金主義の餘毒にあまり多く犯された人々の考である——

生命の爲めに！生命の活躍としての勞働とその高擧の爲めに、社會主義は永遠に唯物主義と一致出來ない筈だ。勞働を機械化より解放し、その創作的理想に導く運動は唯物主義では無い筈だ。それなのに資本主義の餘毒を受けて、あまりに唯物主義であることは、過去の疾患から未だ充分目醒めて居らないからだ。

一生命を黄金萬能の偶像主義より、勞働を機械より、交換を投機より、社會を黄金の專制者より解放するのが、社會主義の使命である可き筈だ。それは生命の道であり、神の道である。×××××人類愛の宗教である——さう深く信するに到つた榮一は、新しき經濟學を書く爲めに貧民窟の書齋の机の前に坐つた。

社會の迷妄はあまり深く行き過ぎてゐる。彼は時間の上に延び上る靈魂の爲めに、新しき經濟學を書かねばならぬと思ふた。それは心理學であつた。それは勞働心理と欲望心理と、本能心理と、社會心理の錯綜する新しき經濟學であつた。それは消費の進化する心理的解剖と、生産行程に發明と機械の成長を心理的に考へ、所有の本能、權力の本能、色欲の本能、生存の本能が經濟學そのものの本質をなして居ることを研究せんとする努力であつた。

彼の經濟學は、新しき社會主義の行く可き方向を示さんとする努力であつた。彼の苦しい工場經營はこの新しい經濟學を、彼に暗示した。

四十

新見榮一が、魂を基礎とする新經濟學の體系に熱中してゐた時に、却つて、米の騰貴を喜び、自らの成功を祝しつゝあつたのは彼の實弟吉田益則であつた。

彼は昨年末、大阪の靱で肥料問屋を開業した。そして、順調に進んでゐた。米が上れば肥料も上る。肥料の高い間は商買になると、彼はまだ年が若いにもかゝらず随分冒險的な取引をしてゐた。米騒動の一寸前であつた。吉田家の古い親類に當る、道修町で藥種屋をしてゐる大塚の勧めに従つて益則はウラジオストクから智利硝石を輸入した。

戰時中、米國はウラジオストクに幾億圓と云ふ軍需品を輸入したものである。それが、ロシア革命と共に全く無用なものとなつて了つた。

ウラジオストクはオムスク政府の管轄であつたが、軍用金が要ると見えて、亂暴な方法で、港に並んで居る何百かの倉庫に這入つて居る凡ての軍需品を賣拂つてゐた。××××××××××××××××

さへすれば、倉庫に這入つてゐる屑鐵や硝石が、殆どたいで貰へると云ふ有様であつた。

大家はウラジオに支店を持つてゐた。その支店の支配人と組んで益則はオムスク政府から硝石三千噸を買ひ取る事になつた。豪膽な益則は硝石の直輸入をする爲めに、第三祝丸と云ふ五百七十噸のトロール汽船を臨時雇船して、小樽より、それを受取りにやつた。

あまりの冒險に靱の問題は誰も、彼を信じなかつた。で、彼がそれを市場に「賣」に出しても問屋筋では誰も買手がなかつた。それで彼は凡て田舎筋にそれを賣渡す契約をした。不幸にもトロール船は一時間十哩と出ない恐ろしく遅い船であつた。七月一杯に門司に着く可きものが一向着かない。その中にドン／＼相場は暴騰した。一噸に就て三十圓も上つた。それで買手は矢の如く催促して來た。益則は氣が氣でない。彼は百圓の料金を拂つて、門司、下關、兵庫三ヶ所の船舶監視所に「もしや第三祝丸が入港すれば直に電報を打つてくれ」と依頼した。幸にも大きなトロール船はロシアの荷を積んで八月三日の朝、門司に入港した。それを大至急に兵庫に回航せしめて、それによつて彼は四萬八千圓を儲けた。

靱で彼の評判は高くなつた。萬事保守的な大阪の商買人も彼には、ど膽を抜かれた。彼の名はパツと阪神間の肥料商の間に知れ渡つた。これに味をメめた吉田益則は、更に第二回、第三回の直輸入を

試む可く、第三・三笠丸と云ふ汽船と日露戦役に殊勳を立てた一、〇一二噸もある東和汽船會社の女海丸を雇船した。そして三千噸の硝石を輸入した。その結果合計十三萬圓の大金を儲けた。彼は忽ち肥料成金になつたわけである。油虫のやうにうじよ／＼してゐる肥料のプロカーは彼の商品によつて、六十萬圓以上の取引をして一萬圓のコミッションを儲けた。それで、プロカー連中は彼を神の如く敬ひ出した。益則は忽ちにして關西に覇を争ふ肥料界の大立物となつた。數へて二十三才の青年が幾十年來營業し來つた古い店を差し置いて肥料界を支配するやうになつた爲めに、彼は麒麟兒の如く多くの人々より驚異の眼を以つて見られた。

喜んだのは益則を婚に貰つた吉田家で、益則はやると思つてゐたが、矢張り豪い兒ぢや！と彼の爲めに更に三萬圓出資することになつたのであつた。

然し彼の店は舊式なもので、米國あたりの新しい店を見て來た新見などには「よくまアこんなところで事務が取れる」かと思ふ程陰氣なそして濕氣の多い店であつた。

古狸でも住んでゐるかと思はれるやうな靱三丁目の大きな家——そこは、恐らく豊臣太閤秀吉のお墨附が靱に下附せられて以來、家の形を全々變更しないものであらうと考へられる。今日も尚豊臣時代から残つてゐる堺の商家と、靱の商店の構造とは全く同一である。實際、大阪でも靱ほど、古い同業

組合の残つてゐるところは無い。太閤さんが城を大阪に築いて以来、鞆は少しも動か無いで居るのである。軒は低く、臺所は高く、庭は敷石を凝らし、庭に面して必ず四疊半の茶室がある。庭の隅に必ず鎮守があつてその横が倉庫になつてゐる。之が鞆の凡ての商家の構造である。その天井の低い白晝でも暗い、道路に面した十二疊の店に十四人の店員小僧が机を並べて坐つてゐる。吉田の店は誠に骨董的に出来てゐた。

然し、商賈はなか／＼急がしかつた。電話はひつきりなしにかゝつてくる。そんなところに榮一でも飛び込んで行かうものなら、一時間経つても二時間経つても話もしてくれない。

益則は卓上電話を持つたきり、怒つたり、笑つたり、顔を擧めたり、怒鳴つたり、まるで發狂者のやうになつて一人騒いでゐる。

労働組合の演説會が天王寺公會堂にある時など、一寸資本主義經濟の景氣の善いところを覗きに行かうと思つて、益則の店に立ち寄つて一時間位ぼんやり店の上りかばちに腰掛けてゐると、大阪の商況が手に取るやうにわかる。新聞社が明日の經濟欄に相場の立値を問ひ合せてくる。倉庫會社がスペースを報告してくる、麻袋の立値が報ぜられる。荷約の監視から歸つて來た小僧が、その日の報告を

する。汽船のチャーター契約が報ぜられる。岡山から電話が懸ゝる、徳島から、北越の伏木から、取引の電話がかかる、門司の船舶監視所から汽船の發着の電報が這入る。

益則は碌々兄哥に挨拶もしないで、電話にかゝり切つてゐる。

『——アメリカ、太平洋、三十六圓五十錢、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十圓落ち、賣買一圓びらき——』

こんなわけのわからぬことを電話に向つて大聲で叫んでゐる。電話はまだ續く——

『——三十八圓であつたら、あつさり三本やるわ！三圓か？五圓か？……そら駄目です三十六圓でしたら……おい、ほんな馬鹿なことがあるかい……』

こんなわけのわからぬ符調の多い電話をかけてゐるかと思ふと、そこへどや／＼と八九人のブローカーが人力車で馳せ集る。或者は手帳を出して彼に數字を示してゐる。或者は人に隠して、算盤の上に數字を現して見せる。或者は、指で符號をする。

四十恰好の狡猾相な顔をした、髪をフランス刈にした男が、店の眞中に坐つてゐる益則に、

『大きな聲で云へまへ……』んげどな、周とが出來ましたんだね、三十四圓五十錢だんね、あんなの出様では商賈になりまへんわ』

益則は算盤を膝の上に置いて考へ込んでゐた。

『よし、これだけで奮發しやう』

彼は算盤を取つて、ブローカーにそれを見せた。フランス刈はそれ見て、

『よろしおます、手を拍ちませう！』

益則は算盤を側に投げて、相手と三度手を拍つてゐる。

ブローカー連はまた車で四方に散る。

そこへ地方から村會議員の連中であらう、購買組合の共同買入だと云つて四五人連で、肥料の値段を瀬踏みにくる。話が悠然してゐるので若い益則が電話機を前にしてチレつたがる。

一寸息つく間が有つて、兄の榮一と奥に這入つて話する暇があると、自慢さうに

『兄さん、さつきから一時間あまりの電話の取りで二千圓儲けました。……今日は朝から八千圓儲けました』

と微笑み乍ら云ふ。職工を三十人から集めて、毎月四百圓づゝ損をしてゐる兄哥とは全く段が違ふ。

然し、榮一としては、それを少しも羨ましいとも何とも考へなかつた。彼はたゞ益則の商買を通じ

て、所謂現代の資本主義經濟の實際があまりに投機的であるのに驚くのみであつた。榮一の眼に映つた益則の生活は、たゞ波の上を歩いてる手品師にしか過ぎなかつた。

戦争が止る！一度に不景氣が来る。そして、その時、益則も首を縊らねばならぬやうな時が来るのであらうと、それを白眼視するのであつた。

四十一

社會の變動が激しいので、新見も靜かにして居れなくなつた。

好景氣と共に、日本の風俗習慣までが著しく變化することを覺えた。文化生活が唱道される、婦人に洋服をきるものが殖えて來た。猫も杓子も自動車にのる。女の髪の毛の結び方が全く西洋風になつて來た。今迄日本に無かつた歌劇と云ふものが盛んになつて來た。

それと共に労働組合と云ふものも、漸く世間に認められるやうになつた。労働の「勞」の字も忌まれ、社會主義の「社」の字も嫌はれて、社會事業を取り締る常路の監督官廳は名を地方改良課と稱して居た程であつた。

それが米騒動と共に、各縣廳争つて、社會課を設け、中央政府にも『社會局』と云ふものが出来る

こととなつた。

そして『普通選挙』など云へば危険思想だなど云はれてゐたものが、新見榮一が大阪の中央公會堂で、普通選挙の演説會を開いても誰も不思議に思ふものはなくなつた。

明治三十八九年頃、幸徳傳次郎氏の平民新聞などは、『普通選挙』『労働組合』『八時間労働』三ヶ條を主義綱領として掲げて發賣禁止になつてゐたのである。それを知つてゐる新見は時代の變遷の甚しいのに自ら驚く位であつた。今や、普通選挙も、労働組合も、八時間労働制も別に危険なものではなくなつた。

それと共にそれを實際に現はす爲めに、それを要求する人々の運動は一層繁忙をきめた。

『おい、また發賣禁止だぜ！』

さう労働者の一人は表から突鳴り乍ら、神戸聯合會に駆け込んで來た。その男は茶葉服を着た人品の高い一人の職工長に迎へられた。

『どうしたんな？』

『どうしたんなつて、森本君が書いた、「叫び」がいけないんだそつな。』

『君、警察に行つとつたんか？』

『久能さんが、私に行つてくれと云ふてやさかい、湊川署へ行つて來ましてん……あんなこと書かれたら困ると署長から叱られて來ました。』

『どんなこと書いたんや？』

『たいした事無いんですがね、新神戸がいやなんですよ、あいつら労働組合を壓迫しよるのや、……然し可哀さうやな、森本君のお蔭で新見さんも前科一犯出來たなア。』

『なんでや？』

『なんでかて、「新神戸」は新見さんが署名人やおまへんか？ 必度みなはれ、裁判所から呼び出しが來ますよつてに！ 私、新見さんに知らせてあげよう、可哀相や。』

さう云ふて、戸田は表に出た。

職工長は奥の間に這入つて、長火鉢の前に坐つた。そこには年頃四十五六の主婦が反對の側に坐つてゐた。小綺麗で上品な何處となしに奥ゆかしいところのある婦人である。壁には神棚が一杯に飾られて、主婦の信心深いことを現してゐる。近處からは日蓮宗のお勤めの太鼓がドン／＼響いてくる。秋風の漸く立初めた九月の末、此處、湊町四丁目の發電所前の路次を這入つた——一名「お手掛小路」の——二軒目の神戸聯合會には、美しい太陽が格子戸を照らし付けてゐた。今日は日曜日で、朝から聯

『あきらめなさいよ、罰金より非道いことはないだらうから……お茶でも一杯お飲み！』
彼女は湯呑に、煎茶を入れて、久能と船場にすゝめた。

この主婦は長谷川まつと云ふ陸軍大尉の未亡人であるが、實に感心な婦人で、勞働階級の爲めには是非立派な組合を作つてあげねばならぬと朝晩の神信心にまで、そのことを拜んでゐるのであつた。

『新見さんに氣の毒だけれども仕方がないなア長谷川さん、新見さんは僕より金持だから罰金位拂へるだらうなア。』

路次の衝當りのお寺から、勤行の太鼓の音が聞こえてくる。長火鉢の鑊瓶の湯氣が美しい唸りを立て、立ち上る。

毎日多額の損害は、いと貧しい貧民傳道師である新見榮一の耐え得るところではなかつた。彼は九月になつて早くもブラシユ工場を放棄する意志のあることを竹田に漏らした。

『私にはどうも事務的なことは向きませんから、私は手を退かうと思ふがどうでせうか。』
と云ふと、竹田は

『此處までやつて下したのでですから、もう私達だけで獨立してやつて行けると思ひます。』

と答へた。

それで新見は彼を最も善く援助して既に四千圓以上の出資をしてゐる中村氏にその意志を告げた。中村氏も、新見の意見が尤もだと云ふので、彼自身が凡て引受けると云ひ出した。

新見が三千圓の持株を放棄することになると、中村氏は二千圓位を、新見に手渡すだけで、凡てを自身のものに出ることが出来るのであつた。中村氏は十月十五日に、二千圓の小切手を新見に手渡しした。それで新見が計劃した自治工場は、全く一人の手に渡つて了つた。彼は工場と縁を切つて清々とした。毎月毎月高利貸の門を潜らなくても善いし、晦日と十五日の賃銀の支拂ひに就て心配する必要もいらなくなつた。毎月工場經營で損をして居た金を醫藥の施療に使ふことが出来る。篠田の豫言がそんなに早く的中するとは思はなかつた。三千圓の金が惜しいやうにも思ふ。然し、またと得られぬ經驗をしたと思へば必しも惜しいとも思へぬ。

彼が醫藥の方に力を入れたと思つてゐた時に、ひよつくり、阿波の國から名古屋の醫專出身の磯村と云ふ青年醫師が訪問してくれた。彼は東京に上つてレントゲンの研究をするのだが、一寸時間があるから立寄つたと云ふてゐた。

その時恰度新見は下痢をしてイエス團の事務所の二階で寝てゐたが、彼は磯村君に、貧しい人々の

爲めに献身を促した。

彼はフランス式の鬚を生やした二十七才の青年とは見え無い、年より老けてみえる青年醫師で有つたが、

『よく考へてみませう、一ヶ月後に返事ませう。』と云つて別れた。

新見は、イエス團の事務所の二階に作った無料診療所が、思つた程進歩しないことに失望してゐるのであつた。

去年の七月、最初、この二階に診療所を開いた時この小さい診療所は彼に取つて、どんなに喜びであつたらう。

彼は大工を呼んで来て、自ら藥棚を作つたり、水の流し場を作ることを指圖したり、藥罐の置場所を手傳つたり、大、小、種々に彩色せられた藥瓶をそこに並べることを楽しみにした。彼は感謝の祈に溢れてゐた。硝子戸の這入つた戸棚の奥に藥瓶が並ぶ。それが一々貧しい人々を癒してやらうと躍つてゐるやうに見えた。

然し、醫師は思つた程熱心になつてくれなかつた。それで貧民窟に病人が多い割合にイエス團の診療所に來るものは少なかつた。彼は岩下知事に『葺合新川に施療病院を一つ建て、くれ』と注文した。

それは聞かれた。そして濟生會の病院が新見の經營して居る工場のすぐ脇に立つことになつた。然し、濟生會の病院だけでも、まだ不自由であつた。夜中に突發する急病患者や、色々な事情で濟生會に行け無い人々——淫賣婦とか、前科ものとか、梅毒患者は濟生會に坐つてゐる巡査がこわいので行くことを好まなかつた。それで、榮一は小さい乍ら眞心の籠つた診療所を開きたいと思つてゐた。で、もし磯村君が來てくれるなら、ほんとに幸福だと考へてゐたのであつた。

四十二

景氣が善いものだから、貧民窟も困つてゐるものが少ないと見えて、新見に金をくれとか、世話をしてくれとか云ふてくるものは非常に少なくなつた。

それでも、村山佐平の妻とその一人娘の世話をせねばならず、その外にも、勉強が過ぎて發狂した祖川と云ふ中年の郵便配達夫を世話せねばならなかつた。

祖川は最初電報配達をしてゐたが、配達すべき電報を持つた儘、二時間位、イエス團の黒板の前で遊んで行くことは珍らしくなかつた。彼は鳥取縣で中學校の教員をしてゐたのだが、途中で發狂したものだから、黒板を見ると、その前を去りたく無いものらしい。黒板の上にフランス語を色々書いて

なくなつて了つた。

阪神の藝妓と云ふ藝妓で、旦那を取つて、こんなところに毎晩遊びに行か無いものは恥辱のやうに考へられた。

須磨も舞子も、いつも藝妓連れのお客で満員であつた。殊に、舞子の萬龜の宴會と云へば一月も前から申込まなければ拒絶されると云ふ有様であつた。

それらの客の多くは阪神の成金連の下働をしてゐる店員乃至はブローカー連であつた。

「君、一寸と、新地の菊水へ一千圓持つて来てか？」

かう云つて、大阪鞆の吉田益則の宅へなど、東洋汽船のチャーター係の男から電話がかゝると、誰々でも、益則は小僧に一千圓を持たせて菊水樓へやる。

その一千圓は別に取引の金でもなければ、借用證書を書いて渡すものでもない。船のチャーター係が少し厚意を示すと、月に五千圓なり、一萬圓なりすぐ違ふものだから、係員が増長して賄賂の徴發をやるのである。

こんな風であるから、藝妓屋と云ふ、藝妓屋で繁昌しない者は京阪神に一軒もなかつた。どんな穢い顔をした藝妓でも、藝妓と名のつくものはみな賣れた。貧民窟の淫賣婦の料金が五倍に騰貴した

と同様に、藝妓の線香代も五倍、十倍した。それでも、まだ不景氣知らずであつた。娼妓はその割に繁昌しなかつた。それは之等の小成金の連中の懐具合が善いものだから、娼妓と遊ぶ場合のやうに一々住所姓名職業を公けに届出で無くとも、秘密裡に充分本能の満足を遂げる工夫が附いたからであつた。

之等の趨勢に従ふて、密娼は恐ろしく跋扈した。藝者だけでは足らなくて、それより安價で、平民的に遊び得るものと云ふ三味線もひけなければ、舞も出来ぬ、大正藝者と云ふ不思議な階級が生れた。それは多く大阪天王寺のルナパーク附近とか、神戸であれば湊川の神戸聯合會附近に幾百となく軒を並べて出現した。そこには絃歌もきこえず、酒も賣らず、たゞ公娼ならず、藝妓ならざる、私娼が公けに看板を掲げて客の轉がり込むのを待つてゐるのであつた。

悪い風儀は、善良な家庭にまで沁み込んで行つた。未亡人や、海員の妻で、虚榮の爲めに操を擧ぐものが日一日多くなつて來た。大阪では上本町から寺町方面にかけて、神戸には湊町から奥平野にかけてかうした秘密の家が幾百となく現れた。

吉田益則の店員で最初にこの誘惑にかゝつたものは恒川秀雄であつた。彼は吉田の店に來る前から相當に道樂を知つてゐた。彼は主人より三歳上の廿六で、色白の眼のパツチリした美男子であつた。

彼は新地にも飽き、寶塚にも飽き、住吉にも飽き、生駒にも飽き、たゞ一つ知らなかつたのは、この評判の高い秘密の家であつた。

恰度、硫酸アンモニア二百噸の船腹を、東洋汽船の船腹係の田島茂吉に頼みに行つたその日であつた。田島はデスクに凭れて考へ込んで居る。

『何考へ込んでゐなはるのや？しつかりしなはれ！』

恒川は元氣善く云ふたが、田島は思案顔に『君んとこ、今度は六ヶ敷いぞ！』と云ふ。

『困りまんがな、田島さん、どうぞ、二百噸だけだつさかい、どうにかしておくんはなはれ、また、善いこともありませんがな。』

田島は、ペン軸を右の耳にはさみ大きな皮表紙の帳簿を開けて、それを熟視しながら、恒川に云ふた。

『よし、どうか都合するわ！』

恒川はその聲を聞いて大悦びで、戸口まで飛んで行つた。田島はそれを呼び止めて、

『おい、恒川、今夜、俺のところに来んか、面白いところに連れて行つてやるわ！』

『どこだんね！ またおかしいところやおまへんか？……兎に角、今夜お宅へお邪魔しまつさ——』

その晩、恒川は田島がどんなところに連れて行つてくれるかと夢を楽しみにして待つて居た。然しその日に限つて、荷約が輻輳して、午後の八時過ぎまで、店を離れることが出来なかつた。すると、先方から誘ひにやつて来た。

『えらい、勉強だんな、大將！』

さう云つて、田島は益則に挨拶をした。益則は電話を手にして、

『フム、疏安、一、二、三、三百噸……二本やな、兵庫廻し、三百三十八圓五十錢』

と云ふて、一寸田島に挨拶をして、また電話を續けてゐる。

恒川はそれを善いことにして、

『大將、一寸行つて來まつさ！』

さう云ふて、田島と外に出た。二人は何れ劣らぬ美服を着て、何處の大成金かと思ふやうな装束をつけてゐる。

田島は鞆から太郎助橋の停車場に出るまでに恒川はこんなことを云ふた。

『君、遊びもなア、變つたところに行かんと面白くないでなア、今日は、一つ、君を風變りのところに連れて行つたるわ……何處か云ひあてゝみい……』

恒川は色々それを推測してみた。然し田島はそれに對して首りを振つた。

『そら、面白いところやで、温泉でもなければ、藝者も居らんや、然しなア、極く静かなところやなア、こつそり遊ぶにはほんとに都合の善いところや、派手に遊べるところやないで、然し、思ふ存分女と遊ぶうと思へば今行きよるところに限るのや、つまり黒人の遊び場所やなア。』

『私、わかりまへんわ……市外だつたか？ 市内だつたか？』

『わしにまアついて来い！』

かうした會話も二人が電車に乗ると全く中止せられた。

田島は上本町行の乗換切符を求めた。それで、恒川は奈良にでも連れて行かれるのかと怪しんでゐた。上本町六丁目で田島は恒川に降りる合圖をした。恒川が降りると田島はすぐ人力車を呼んで、小さい聲で行先を教へた。

夕刻から降り出した小雨は段々激しくなつたので、四方に幌を降ろした人力車の内からは、何處を走つてゐるのかわからない。然し、隆寺の門を五つ六つ通過して右に曲り、坂を下つて細い筋をくるくる廻つて、十四五町走つたと思ふ時、車はパタリと、新築の立派な『しもたや』風の家の前に止つた。

田島は少々慌て氣味で、二人の人力車夫に車賃を自分のポケットから支拂つた。

恒川はそこが何を意味するか全くわからなかつた。然し大抵見當が附いてゐた。之は例の評判の高等淫賣宿だなど。

田島は黙つて奥に通つて行く。そして恒川を指し招く。それで恒川は黙つて従いて行つた。そこは立派な上流向きの家具の這入つた室で有つた。奥は頗る深いやうで、庭を隔て、離れもあるやうであつた。

座敷の真中には長火鉢が置いてあつて、そこには藝妓上りのおかみとも思はれる年増の女が一人と、十八九に見える初心な綺量の善い娘が一人座つてゐた。そして、二人に叮嚀にお辭儀をした。

恒川はまるで、狐に憑まれたやうであつた。

年増の女は田島に云ふた。

『旦那、今日は新しいお友達をお連れになつたのですね。』

『ウム、君らに紹介しようと思つてね、靱の若旦那を連れて来たよ、別嬪を世話してくれ』

『お好みは？』

恒川は沈黙した儘、かしくまつて坐つてゐたが、田島は彼を顧みて尋ねた。

さすがの恒川もあきれた顔して、田島の腫を見詰めてゐたが、聽て笑ひ乍ら叫んだ。

「——田島さん、あんたもよつぽど助平だんなア。」

「君、この附近ではなア、「夜泣きうどん」の鈴の振り方まで違ふんださうだぜ、明治四十二年だつたか、この邊一體の大檢舉があつたときにア、がうした秘密の家に信號したものは四辻に立つてゐる「夜泣きうどん」であつたさうな……今夜も「夜泣き」の鈴が鳴つとりやせんか？」

田島は耳を澄ませて、街の音響に聴き入る、恒川もそれに習ふて耳をそばだてる。そこには十月末にすだいてゐた「けり」の聲も絶え、遠くに聞こえる電車の轍の音と、軒の亜鉛屋根に降り注ぐ雨の音のみ聞こえた。

「もう、歸りまひよいな、私もう淋しゆうなつて來た。うちこんなところ嫌ひや……ひとり身震ひがするわ……」

恒川は顔を眞青にして田島に歸ることを促した。

かうした誘惑にかゝつたものは恒川ばかりではなかつた。京阪神地方にある無数の青年がかゝつたのである。吉田の店でも、最初恒川から擴まつて、島津、小山田、宮井、佐比江と段々傳はつて、店

の中心人物にひとりとして病毒を受け無いものはなくなつて了つた。

然し、儲ける爲めには若主人の益則も、それらのものゝ不品行を默視せねばならなかつた。

四十四

大正七年の十一月十一日、世界戦争は突如獨逸の革命と共に終末を告ぐることとなつた。何人も勝利を得ず、何人も得ることのなかつた、世界の戦争はたゞ困憊と疲弊を後に殘して終末を告げた。そして、大戦争によつて日本の勝ち得たものは淫蕩と、投機と、賭博と、奢侈と、不品行とであつた。新見は日本人があまりに上調子なので、彼自ら日本人であることが恥かしいと思ふ程であつた。貧民窟には淫賣婦が跋扈する。梅毒で、身動きも出來ぬチヨンマのおとめでも、イエス團の向ひの路次の隅に立つて居れば、食ふだけ儲かるのであつた。

「あの人は、淫賣買ひに來るんではなくて、梅毒買ひに來るやうなものです、あのおとめをいぢるやうではね。」

と、無口な喜恵子が、愕きの眼を見張つて彼の夫に云つたのは此頃であつた。

「喜恵さん、日本には道德的の革命があるんだよ、こんなこととして居れば、此國は亡びるより外に道は

無い、酒は毎年十億圓からのむ、放蕩の爲めには二十億圓から費う、そして國民擧つて投機然に浮かれて居る時に、どうして、どうして、神様が、此國を亡ぼさないで置き給ふものか……やらうじや無いか、一つ、我等は、此國の道徳的革命的爲めに、立ち上がらうじやないかね！」

「ほんとに、私達がしつかりしなくちや仕方がありませんね、大にやりませう。」
かうした話は、例の狭いイエス團の食堂のテーブルの前で交された。

「僕は思ふんだね、國民に政治的權力を與へ無いだらう、政治はたゞ少數の金權階級に與へるだらう、衆議院議員を選ぶにしても、六千萬人からあるこの廣い日本の國に僅か百八十九萬人しか無いだらう。それに貴族院と云へば、あの馬鹿殿様の寄合じやないか！國民の勢力の吐け口が無いじやないか！實際、國民が淫蕩に流れてゐる間は特權階級も政治は取り安いよ、然し、それだけ、國民としては墮落しつゝあるのだ。」

政治と云ふものは、國民の道徳だ、少數のものが壟斷すべきものぢやないのだ。國民が政治的に甦つて初めて、國民の安全なる生活が出来るのだ。社會主義でも、普通選舉でもなんでも善い。國民は民衆道徳の政治に目醒めなければいけない。そして、今日の墮落した金權階級の蛆虫を退治しなければいけない。政治に、經濟に、一般の社會道徳に、特に、性道徳に、日本が目醒めなければ日本は亡びるよ……」

新見はイエス團の青年を集めて、こんな演説めいた話も屢々、例の狭い食堂でした。

公娼制度破壊、福原遊廓移轉大演説會が開催せられたのもこの頃であつた。

新見は神戸にある二十七のキリスト教會が凡て沈黙して、亡び行く國民道徳に對して何等の措置も取らないものだから、ひとり叫ぶことにした。幸にして、同志は數人出來た。神戸聯合會主事久能元喜、大阪毎日新聞記者島村信之、ウキリヤム博士、それに相愛會の戸田良太君と、カトリックの信者の谷岡一平君の五人であつた。

神戸キリスト教青年會が好意を持つてくれたものだから、その大講堂を無代價で借りることになつた。

押し迫つた暮の十二月廿七日と云ふに、公娼制度破壊福原遊廓移轉大演説會は、神戸市下山手通六丁目青年會館で開かれた。公娼制度破壊が目的であるに、「福原遊廓移轉」と下に喰附けたのは、公娼問題だけではあまり問題が大き過ぎて、神戸市民の胸に響かないので、さうしたのであつた。

定刻前から聴衆は無數につめかけた。壇上には帶劔着帽の儘警部補が巡查四名を引き連れて監督し

てゐる。その中には遊廓から廻された壯漢も多数混つてゐた。定刻には、八百人位這入れる演説會場にはもう座席がなかつた。

演説會が始まつた。女郎屋の廻しものが彌次り出した。然し、その彌次り方が如何にも下手なので、みんなの哄笑を買ふのみであつた。

島村がすんで、新見が立つた。新見の演説には福原の壯士連も餘程の反感を持つたと見えて、新見が「女郎屋の亭主はみな人非人だ」と云ふたのを捕へて、

「今いつたことを、もう一度云つてみい！女郎屋の亭主は、人非人だ？」
壯漢の一人は立ち上つた。すると聴衆の或者も立ち上つた。

「ゴロツキ引込め。」

「叩き出せ！」

「撲れ！」

聴衆の大多数は公娼破壊の賛成論者であつた。それで、壯漢は沖もかなわぬと見て取つたかまた坐席に附いて沈黙して了つた。

新見がまた聲を張りあげて「彼等は貧民の高血を絞る吸血鬼である」と叫ぶと、演壇めがけて、四

人の壯漢が飛び上つて行つた。聴衆もそれを見て承知をしない。五六十人の聴衆は直に演壇にかけ上つた。會場は總立ちとなつて騒ぐ。

「つまみ出せ！ つまみ出せ！」

「撲つて了へ！」

「遊廓を焼拂へ！」

眉毛を引抜いてその跡に刺青をしてゐる壯漢が眞先になつて、新見を撲ぐらうとしたが、臨臨の警部はそれを遮ぎつた。他の二三人のものが、新見の背部から、彼を撲らんとしたが、今度は聴衆がそれを遮つた。五六十人の聴衆は巡查の手を借らずに、四名の壯漢を會場の外に撮み出して了つた。聴衆はまた「萬歳！」と叫んで坐席に附いた。

新見は聴衆に感謝して再び演説を初めた。

「——今日の性道德の問題は今や全く、資本主義化して了つてゐるのであつて、賣るものも買ふものも、戀愛を基礎にして居るものではない。彼等は全く金錢の多寡によつて肉情を翳で居るにしか過ぎないのである。然るに、國民道德の廢頽したる結果、市會議員、國會議員の中に女郎屋の亭主を發見するとは何事であるか？」

聴衆は無暗に拍手する。

「——彼等は貧民の子女の膏血を吸り、その得たる金を持つて租税を納め、その租税の多額なる爲めに或者は市會議員の、第一級の候補者として立ち、情實によつて市會に當選してゐるのである。神戸市市會議員七十餘名の中、女郎屋の亭主を二名も發見する理由は、どう云ふわけであるか？ 國民道徳の廢類も此處に到つては、極まれりと云ふ可きではないか！……」

福原の壯漢がまだ残つてゐたと見えて、

「遊廓は貧民の娘を救済する處ぢや、なにぬかしやがるんだい！」

それを聞いた聴衆はドツと笑ふ！

「——然し、この現象は、たゞ單に神戸だけでは無く、大阪にも、京都にも、名古屋にも、横濱にも、東京にも、市會には必ず、女郎屋選出の市會議員が當選してゐるのである。——」

壯漢がまた彌次る——

「そら、あたりまへぢやがな！」

聴衆はそれに應酬する。

「黙れ！」。

「つまみ出せ！」

「——名古屋に近い愛知縣一ノ宮町の如き町會議員二十七名の中七名までが女郎屋の亭主であるといふ珍現象を呈して居る。然し、之は單に、地方の市會とか、町會とかに限らない、衆議院議員の中にも、高松由之助の如き大阪松島遊廓の樓主があり、水口彌市の如き東京吉原遊廓の大親分があるではないか？」

——諸君、諸君はかうした墮落した國民の吸血鬼に政治を任せて置いてそれで、國家の向上が計れると思ふか？——」

「ノウ、ノウ！」

「然らば、何處に、この國民道徳の缺陷があるか？ それは、要するに金錢によつて貞操を賣買なし得ると云ふ性道徳に對する資本主義の浸潤が而かあらしめるのでないか？ 私は、公娼制度の破壊が、たゞ單に、娼妓を全部身受けしたからとてそれで完成したとは思はない。金錢によつて、貞操を賣買しない、——即ち貧しいが故に、貞操を賣らず、富めるが故に、貧しきものゝ貞節を蹂躪しない、資本主義經濟の終焉と共に、公娼制度の破壊が完成されると思ふのである。」

演説會はそれですつた。聴衆は散つた。その後反響は少しもなかつた。反響が起るにしては、市民

演説會の
反響

はあまりに深く睡つてゐた。國民は黄金の中毒に徹底的に酔ふてゐたのである。

五〇〇

四十五

神戸市内だけで正月三ヶ日の間に巡査が泥酔者に注意を與へた數が一萬二千件、喧嘩して拘留處分にしたものが八百件あつたと新聞が報じたは、大正八年の一月であつた。

暮は例年に稀な程、泥棒が少なかつた。好景氣が續くものだから、竊盜のやうな危険な職業に従事しなくともみんな、どうにかかうにかやつて行けたとみえる。

休戦になつても、懐具合の善い經濟界は、猶樂觀を續けた。春になつて、凡ての會社は云ひ合せたやうに増資した。それがみなプレミアム付きであつた。

ウラジオオの硝石で十六萬圓儲けた吉田益則も、五萬圓位の株を買ふた。それまで、彼はプレミアムと云ふ言葉の意味さへ知らなかつた。然し大阪商船會社の新株が十二圓五十錢の拂込みに、百三十圓のプレミアムを附けなければ買へないと云ふのは、吉田も驚いて了つた。それは全くたゞで取られる金だとも考へた。然し、考へてみるとなるほどその株に對して、それ相當の配當があると思へばさう高いものでもないと思つて領いた。

新聞には東亞信託銀行株の大きな募集廣告が出た。それを吉田の義父は千株程申込んだ。一株五十圓のものを百萬株募集し、その中八十萬株を發起人が持ち、二十萬株を公募すると云ふのであつた。

申込は株數に對して千二百倍に昇つた。そして、プレミアムを多く支拂ふものほど、多く株を持ち得ると云ふので、千株申し込んだものも僅かに五株位しか手に入れることが出来なかつた。プレミアムだけで、發起人は一十萬圓も儲けたと云ふ話であつた。

益則の義父は土地が暴騰したのでホク／＼であつた。他の商買には手を出さ無い彼も堅い株だけに

はこつそり手をつけて居た。政黨關係で妙な會社が出来、大阪證券交換所とか、大阪株式現物取引會社とか、政黨屋が選舉費の捻出の爲めに法律の裏を潜つて株式取引所まがひの會社を建てた。然しそれにも相當プレミアムが附いて、政商連中は大きに儲けた。

益則の義父の家が大きいだけに、新設會社の株式募集には、いつも叮嚀な創立趣旨書を添えて勸誘状が舞ひ込む。

大阪アルカリは一時一株七圓六十錢であつたものが、今や、百九十六圓してゐる。暮には四百八十割のレコード破りの配當をして世界を驚かせた。日本舍密株式會社の増資には、新株申込が募集數に

對して、百七十倍の申込があり、プレミアムだけで六百萬圓儲たつと傳へられた。大阪商船の新株は一株十二圓五十錢の拂込に百三十圓のプレミアムを附けて買はなければ手に這入らぬといふ好景氣であつた。株さへ持てば儲かるものと、考へた時代である。吉田の義父も随分誘惑を感じてゐたらしい。

「何云ふても、取引所の山貫は偉い奴じや、一億圓儲けたさうじやなア、大阪に今度一億圓以上儲けた男が何人位あるだらうなア、株屋の山貫に、鐵の岸本に、材木屋の石川位のもんやろかい……益則もおまへしつかり儲けなあかんぜ……」

偶々江戸堀の本家に晩飯を食ひに歸ると、義父正雄の話はいつもこんな話ばかりであつた。株の話が出ない時には、嫁入の話が出る。

「——今度、神戸川崎男爵のお嬢さんが、京都の野崎家へ嫁がれるさうじやが、こしらへ計りが三十萬圓かゝつたさうやなア、大きい内は違つたもんやなア、なんでも、衣裳ばかりでも三百七十枚持つて行かれるさうな、あしこらになると違つたもんやなア。」

さう正雄が云ふと、妻君は眼を見張つて吃驚してゐる。

「まア、どんなにして、それを着るんやろな？ 毎日一度づゝそれをきても一年三百六十五日にまだ五枚餘る勘定やな……立派だつしやろな。」

この頃であつた、益則の義父の正雄が、大阪の南の飛田遊廓の、土地會社の株を二千五百株も買ひ占めて出入の細田長七と云ふ吉田家の支配人に出資して女郎屋を開業させたのは、大阪の商買人は、金の爲めに随まで腐つてゐた。

四十六

「金權階級の道徳は全く腐り果て、了つた。彼等は金と共に亡ぶ可きである。新興の民衆は新興の道徳と共に立ち上らねばならぬ。新興の道徳とは何ぞ？ 黄金に毒せられず、因習に囚はれず、勞働と、生命と、人格の至上を信することそれである。それは遊惰なる今日の資本家に望むことは出来な。たゞ勞働階級のみ之を保證し得る……」

かう云ふ書き出しで、新見榮一は、東京の雑誌『革新』に出す『道徳の革命』と云ふ論文を大急ぎで書きなぐつてゐた。彼の机の坐つてゐるイエス團の二階からは、貧民窟の長屋がまるみえであつた。北側の棟割長屋と裏堀の間は、僅かに三束しか開いてゐない。裏の仲仕は朝から酒に酔拂つて、八釜敷く騒いでゐる。西横の駄菓子屋の前で、大勢の子供が賭け事をして喧噪を極めてゐる。

隣の醫務室には、施療を求める患者が詰めかけてゐた。

かうした喧嘩の中で、いつも新見は急ぐ原稿を片付けねばならぬのであつた。今日も論文を途中まで書いてゐると、妻の喜恵子が下からあがつて来た。

「身寄りの無い方ですつて、老婆さんですがね、是非お世話願ひたいのですが、どうでせうかつて下に訪ねて来られてゐます、お會ひになりますか？」

彼は万年筆を投げ棄てて、下に降りて行つた。そして老婆さんの身の上話をきいた。聞いて見ると、誠に氣の毒なので階下の説教所にしてゐる六疊の間でも善ければ一緒に住みませうと云ふ。

また駆け上つて、ペンを走らせてゐると、酔拂ひの上杉が無案内で上つて来て、机の側に立つ。彼は挨拶もせず黙つて書いて居ると、

「偉い人は、違つたもんじや、わしらのやうな油虫には挨拶もしてくれん。」

「新見さん、わしもなア、あの今下に來て居るおばんのやうになア、世話しておくんははれ、實際、わしもつらうて弱つて居るんやがな、あんたは、竹田や、浅田のやうな書生ほばかりにえ、ようにしてやらないで、ちつとうちらにも甘い汁を吸はしておくんははれ、わしなア、新見さん、此間、お乞食さんを一人蹴殺してなア、監獄へ這入つておつたのや、然しそれはすぐ證據不十分で出て來たがな、

何處にも居るところが無いのや、今居る越中屋でも無理しておいて貰つて居るのやがな、今夜限り出て行けと云はれて居るのや、お婆さんと一緒でもかまひまへん、おいてくれてやおまへんか？」

上杉は、新見が暮合新川に來た當時から随分新見をいぢめ抜いた心のねぢけた男で、酔拂うと西洋人の乞食の眞似をして、新見から金を搾つて行く癖があつた。長いことの間、彼の顔を見なかつたが、今日は久し振りにひよつくりやつて來たのであつた。

新見は論文を急ぐものだから、

「少し、急ぐ用事があるのでなア、一寸待つてくれ給へよ、一時間位すれば書いて了ふからなア。」

さう断つておいて、また書き續ける。

「一時間でも、二時間でも待つよ、泊るところが無いんやからなア、明日まででも此處でかうして待つとつたるわ。」

さう云ふと、上杉は墨の上にとツかと座り胡坐を書いて、巻煙草を吸ひ出す。

ものの五分間も待つてゐる中に、退屈だともみえて、

「お醫者さんを冷笑して來てやらう。」

さう云ひ乍ら、隣の室に無案内で這入つた。

磯村先生は急がしく診察してゐて、上杉の對手にならない。それをみて上杉は大きな聲で奴鳴る。

『こら、鍼醫者、俺の心が直せるか？』

子持ちの女の患者は吃驚した様子で、帯もしないで、階下に降りて行く。そして、次の患者が診察椅子に腰をかける。

上杉は巻煙草の煙を吹かせ乍ら、磯村に近づき、

『わしの何處が悪いか診断してくれ！』と叫ぶ。

磯村は微笑みながら、

『魂の病氣はお隣の先生に頼め！』と答へる。

『えらいこと云ひよる！ 此先生は一寸話せるなア。』

彼はまた新見のところに舞ひ戻つて來た。

『新見さん、私の魂につける薬はありまへんやろかなア？』

新見はベンを止めて、上杉を見上げて云ふた

『あるよ！』

『ありまつか？ そりや、なんだす？』

『そら、改心することだよ！』

上杉は手を左右に振つて、

『耶蘇だつか？ 耶蘇はきゝまへん。わたしはきらひだす、もう少し違つた薬はおまへんか？……魂につける薬はほんとに無いんかいなア。』

さう云つて、彼はどツかとそこに倒れた。そして體で、高軒で睡て了つた。

それ以來、上杉は、押しかけで、イエス團に止宿することとなつた。

四十七

戦争は熄んだが、神戸の港はまだ殷盛を極めてゐる。殊に市の中央にある神戸造船所は新造船を造るに繁忙をきはめて居る。

それは、榮一に取つて不思議に見えた。戦争が休止し、歐洲列國は國を擧げて、戦後の國民經濟に就て頭を悩ましてゐるにかゝわらず、わが日本の國だけは必要もない船舶を作つてゐる。それでどうして戦後の大恐慌に備へることが出来るのか知らと、ひとり案じてゐた。神戸大阪の商人は皆、現になつて、元祿以來の榮華に酔ふてゐる。

株は少しもさがらない。船の値段もまだ下らなかつた。休戦條約が取り結ばれてもまだどんなことが勃發するかも知れないし、歐洲列國が平時狀態に復歸するには、尙一年間位はかゝるだらうと云ふ豫測から、日本の商人はまだ、一般に呑氣であつた。

新見榮一はその時、日本の恐慌を豫言してゐた。大阪の弟には常に警戒するやうに勸めてゐた。彼は口癖のやうに云ふてゐた。

「――米國の南北戦争後には、不景氣が廿五年も續いた。世界戦争の後に列國の勢力の恢復するのは容易じやない、戦後には必ず一大恐慌がくるから、氣をつけろ。」

かう豫言はしても戦争がすんだ頃になつて家の値段が上り、土地が暴騰するので不思議に思へてななかつた。困つた國だ、變則な國だ、これじや必度乗り上げるわいと新見は大に心配してゐた。

神戸造船所は元老大久保侯爵の次男大久保幸次郎が社長で、東洋一の大造船所を以つて誇り、大量生産の經營方針を以つて進んでゐた。戦争がすんで、米國では幾百萬噸の商船の遣り場が無くて困つてゐるにかゝわらず、相も變らず徹夜までしてストックポートを製造してゐた。

東洋一を誇るだけあつて、まるでマツチ箱でも貼るやうに九千噸もある大船を、僅か二十八日間に進水させることによつて、世界の造船界を驚かした。

四萬噸の軍艦でも容易に造られると云ふ大きなガントリー、クレーンが巨人の寢床のやうに天を壓し、幾十となく亞鉛葺きの機械工場が立ち並び、その中には幾萬臺とも知れ無い大小の機械が所狭しと据えられてあつた。そこには三寸もあらうと思はれる厚い鐵板に穴を穿けるものもあれば、眞鍮のプロペラーを精巧な機械で削つてゐるものもある。その機械はまるで、砲臺にメリ・ゴー・ラウンドを喰付けたやうな仕掛けになつてゐて、職工は臼のやうな機械の上に乗せられ、グル／＼廻つて歩く構造になつてゐた。

造船工場の片隅では一萬噸に近い汽船のシャフトを一分の曲りもなく削つてゐる。その次の所では蒸気タービンの羽根を町重に削つてゐる。

鼓膜が破れるやうな音を立て、空氣槌が鳴る。大きな船の胸腹に幾萬本の鉄が打込まれる。槌も響けば鐵板も叩鳴る。それが海面に反響して、神戸市全體に聞こえる。神戸市民は毎日この響きを聞かなければ淋しく感じるのであつた。

櫻もまだ咲か無い、春の朝午前六時半、神戸の盛場である新開地はまだ睡つてゐる。アスファルトを敷き詰めた鏡のやうに美しい八間幅の道路の上を幾萬の職工が同一方面にむかつて急ぐ。恰もそれは水が間に吸ひ込まれるかの如く、また鐵粉が磁石に引かるゝやうに、カーキー色の職工服を着た筋骨

遅ましい人々が、舊湊川筋を下に海岸へ、海岸へと急ぐ。見上げると湊川のトンネルを越へて、鋼鐵で美しく組み立てられたガントリー・クレーンが——巨人の寢床のやうに街路を見下して居る。海から立ち昇る水蒸気が薄桃色にそれをつむむ、今しも太陽が昇る。

一夜の休息の後、元氣に満ちた多くの労働者は、沈黙の中にスタク／＼歩く。或者は洋服の儘、すぐ足駄を穿き、或者はゴム靴を、或者は、草履を、或者は雪駄を、それ等の足音が一々、アスファルト路に響きを立て、奇しい諧調を造る。小刻みに行くものがある。大股で歩くものがある。大太鼓に小太鼓、拍子木に木魚、足の響きも様々である。沖に巨大な遠洋航路の汽船が這入るらしい、ブーウ、ブーウと大洋の吁鳴りを立て、港に近づく。それが市街の大きな厦に反響して、街路に唸が残る。職工を満載した割引電車が、新開地の端でチン、チンと小刻みに鈴をならして西に走る。職工は背後に、たばこの烟を紫色の曲線に残して前に進む。

両側に並ぶ、活動寫眞館のゲト／＼した極彩色の繪看板に注意する職工は誰れも無い。みな一直線にガントリー、クレーンの方に頭を向けて、同一歩調で暮進する。十、百、千、萬、コト、カタ、バタ／＼、彼等の工場通ひの姿は神戸に於ても名物になつてゐる。

社長の大久保孝次郎はいつも一頭立の馬車で通ふ。彼は職工と共に出勤して、職工より遅く退出す

る。彼はそれを誇りとしてゐる。米國ハアバアト大學の出身だけあつて、凡てが善良なヤンキー式である。その生活振、その態度、その身振まで一八八〇年代のヤンキー式である。善き男である。彼は親分膚で、親切で、そして金のある割に質素である。

嘗て、こんなこともあつた。彼が例の一頭立の馬車で、出勤時間に遅れ無いやうに急いでゐた。もう閉門の七時に、一分前であつた。彼の馬車が湊川のトンネルを越へた時に、一人の神戸造船所の眞鍮のマークを胸につけた小僧が、大きな辯當箱を小脇に抱へ込み、工場めがけて走つてゐる。そこからどんな快走力で走つても、工場までは五分間以上かかる。大久保社長はすぐ馬車をとめさせてその徒弟をさし招いた。

『工場まで、乗せて行つてやらう！』

さう、社長は馬車の上から叫んだ。

徒弟は躊躇つた。すると、社長は態々馬車から降りて、小僧を馬車の上に引張りあげ、七時の閉門間に合ふやうに車を急がせた。

かうしたことは、一度や二度で無いから、社長がわざとしてゐると思ふものは誰れも無かつた。彼を心から底から親切な人だと四萬の職工はみな信じてゐた。職工は、大久保孝次郎が大好きであつた。

それと云ふのも彼が一日に一回は必ず工場の隅から隅まで巡つて、ヤンキー式に平職工の肩を叩いたり、腕を握つたりして彼等をいたわつたからである。大勢の職工が無理な労力を費してゐる時には

『機械が足りないやだな、——よろしい、研究して、そこには新しい機械を入れよう。』

と聲をかける。そして、その機械は三ヶ月もたぬ中に外國から這入る。

彼には、彼の経営方針があつた。彼は屢々親しい彼の友人である花木商店の總支配人の山川金之助にこんなことを云ふた。——

『俺はなア、××のやうになア、表面だけ職工の爲めになるやうに施設をして、賃銀だけは他所より少なく拂ふやうなことはしないよ、職工に多く賃銀を與へさへすれば、職工は自分の力で善い病院にも行けば、善い着物も買ふことが出来るぢやないか、俺に市民の營業の妨害になるやうな施設は、工場内で經營したくないね、職工にも癖みがあつて、工場の醫者にかゝるよりか、矢張り、縣立病院か、大學病院とか云ふところにかゝりたいだらうからなア。』

かう云ふ自由主義を取つた彼は、また極端に職工の私的生活に對しては無干渉であつた。一つの購買組合も作らなければ、一つの寄宿舎をも建てなかつた。職工に對する給料は他に比較して稍高かつた。そして傷害を受けた職工などは、縣立病院に入院させて決して、職工扱ひをせぬやうに依頼し

た。

然し、工場の内部の設備に到つてはまた極端であつた。一つの洗面所なく、一つの清潔な便所なく一つの食堂なく、一つの湯呑所なく、一つの休憩所がなかつた。雨の日など職工は亞鉛板を拾つてきて、それを蒙つた儘、食事をすますことは平常のことであつた。

『いくら、日給を澤山貰ふても、こんなところで、辯當を食ふのはつまらんア……』

かう職工Aがトタン板の下から出て来て叫んだ。

『まア、湯を沸すところに行つてみてみい、大騒動や、會社だつて、湯呑所の一つ位、作つても善かりさうなものになア。』

かうまたBの職工が云ふ。

『この工場ほど、機械設備を完全にして人間を虐待してゐるところはないわ、あの便所みい！』

ポンス工場の野天に、荒板や、鐵片で、職工が臨時に建てた大便所を指さして、Cの職工が云ふ。

便所の戸には白墨で、大きく樂書きがしてある。

『コノ便所ハ不潔デアル、清潔ナモノヲタテ下サイ。』

それを見たAは笑ひ乍ら云つた

「誰れや、あんな樂書きしたのは、あれは社長が見るやうに書いたのか？……社長はいつもこつちへ廻つてくるか？一體誰れが書いたんや？」

「誰れだらうな？」

Bは小首を傾ける。

こんな小言は云ひ乍らも、凡ての職工はいつも快活に働いてゐた。

四十八

貧民窟に近い、労働者街に、今迄見たことのない赤の鳥居が立つ。

間歇的に信仰が伏起することを知つてゐる新見榮一は、それらの興亡に注意を怠らずしてゐた。病

氣の流行るとき、戦争のある時、天變地異のある時などは、それらの流行神様は、根強い力で蔓る。

警察官が立退を命じようが、新聞が悪口書かうがそれ等の信仰は不思議な力で擴がる。新見はそれらを通して日本人の原始的の信仰を見るのであつた。

新見を訪ねてくる若い人々の間には、綾部の大本教の本部を見て來たと云ふ人々も相当多くあつた。彼はその人々の言葉を綜合して、彼が幼い時に、阿波の田舎で義理の祖母から聞かされた「丑寅

の良神」の信仰がまた丹波で復興したのだと思つてゐた。

彼は大和の丹波市の天理教本部を訪ねた時、亦岡山縣の黒住教や金光教を思ひ出す度毎に原始日本人の純化した敬虔的態度を見る心地がした。——宇宙の奥に、秘められた不動の神がある、それは、

不動のものでいつも不思議なる方向から、人類の運命を覗いてゐる。之が今日の日本にある各種の原始的信仰の基礎になつてゐる——こんなに彼は考へて之等の人々の宗教運動に深い尊敬を持つてゐ

た。「丑寅の良神」の信仰は、大本教が來ない前から關西には相當古くから傳はつてゐる信仰である。

それは氏神のやうな社會宗教ではない。一種の自然宗教に近いものである。

「私達は、世界の立直しを信じて居るものであります、近い中に必ず日本にも立直しがあります。それは神から我等にお告げになつたことであります。」

かう云つて市島頼吉は長髪をなで上げた。彼は身丈六尺もあらうと思はれる立派な體格をした二十六七才の男で、五ツ紋の木綿羽織にガス織の袴をつけ易者のやうな風采をしてゐる。新見は黙つて聞いてゐる——

「我等から見れば、綾部はエルサレムであります、我等はキリストの再來を待つて居るのです。神の力を借らなければ、この墮落し切つた社會を改造することは出來ないと思ひます。社會の改造に就て

の社會運動も、宗教運動も結局は同じ目的を以つて兩方面に向つてゐるだけで、『道德革命』を主張してゐるより外はないのです。神は良心を通してのみ、人類の衷に現れ給ふのです。』

『それでは、あなたは如何なる意味に於ても暴力革命を否定なさいますか？』

『私は外なるものあまり信頼を置いておりません。私を豪くするのは結局は私です——私の衷に働く力です——私を豪くしてくれるものでなければ、私は少しも信頼いたしません、外部的の革命は私の全體ではありません。それは私の成長に對する豫備行爲です、最後に出陣すべきものは、私です、私の衷なる神です——』

『するとあなたの神は主觀的なものですか？』

『さう思ひません、「私」と云ふものが徹底せる主觀であると共に、窮極せる客觀であるやうに、神は私の絶望主觀であると共に、宇宙に於ける絶對的實在です……それは無始無終の生命です、法則です、力です……永遠の人格です……』

『つまり、あなたは例のあなたの無抵抗主義で、世界が改造出来ると思ひますか？』
葬儀屋が放つた鳩であらう、裏の長屋の屋根にとまつて、クツク／＼と鳴いてゐる。

『取り間違へないで下さい、私の無抵抗主義は私の主義ではないのです——』

市島は、嘲笑するやうに云ふ——

『では、何ですか？』

『それは事實の説明です、暴力は發明に較べて無能であり、人間の靈魂に對して外なるものは内なるものに較べて無能であり、愛に較べて腕力は無能であり、神に較べて人間は無能であるといふことなのです——それは主義ではありません、事實の説明なのです。』

市島は屋根の上の鳩を見詰めて居る。新見は尋ねた。

『大本教が暴力××を待つてゐると云ふのはほんとですか？、何でも竹槍とか、鐵砲とかを準備してゐると云ふぢやありませんか？』

『私はその段は深いこと知りませんが……立直しの時に備へねばならぬと云ふことはみな申して居ります』

『魂の立直しは何時來るのでせうね、あなたの宗教は、外側の「立直し」ばかりを考へてゐられるやうですが、私は魂の「立直し」を今考へてゐるのです、酒と、女と、賭博と資本主義的貪慾で亡びつゝある、日本の魂を立直すことは何によつて出来るのでせうね。』

『それはやつぱり、大本教でせうね。』

『では、しつかりやつて下さい。御互にその信仰の道に従つて進みませう……』

さう云ふて、新見は椅子より立ち上つた。市島も歸る仕度をした。新見は晩の大阪天王寺公會堂の労働組合演説會に出席する爲めに家を立つた。通りには貧民窟の子供等が世の「立直し」も氣にとめ無いか、嬉々として遊び狂ふてゐた。

四十九

米騒動を見た新見榮一は、低能な政府が、たゞ一億五千萬圓の米穀調節基金を準備して、政商どもに、儲けさせてやる工夫を考へてゐると云ふことを知つて憤慨した。彼は覺束ないながら消費組合の運動に着手した。

日本の凡ての人が凡ての商人の手を離れて、自ら組合を作り、生産者から直接に仕入れることになれば、誰れも損をするものはなく又誰れも得をするものもなく、商業上の投機と、労働階級から搾取することもなくなる。さう考へた新見榮一は労働運動をする傍ら、消費組合の完全なものを造らねばならぬと努力した。

労働組合の仲間では、消費組合に對して議論が區々であつた。或者は「それは階級闘争の精神を鈍

らす」と云ひ、或者は「労働組合の勢力を二つに割るから駄目だ」と云ふて反對した。然し、新見は社會的秩序と互助組織を得る爲めに、消費組合は、生産階級を助けこそすれ、それを破壊するものではないと深く信じた。彼は敢然として、凡ての反對に眼をくれないで、その宣傳に取りかゝつた。

彼は大阪の商業會議所に行つて、人口に對する小賣業者の割合を調べてみた。そして驚いたとは、近世都市は全く盲目的に出來上つてゐると云ふのであつた。東京などでは白米の小賣店が人口六百八十人に對して平均一軒あり、菓子屋が、人口二百八十四人に對して、平均一軒あると云ふことを發見した。こんなことでどうして、人間生活が幸福であり得ようか、東京市二百二十萬の人口に對して日用品小賣店が五萬九千七百八十五軒、普通の民家九軒に對して一軒の日用品小賣店があると云ふことを發見した。深海の魚類が共喰ひをするやうに、日本の都市では小賣業者が相互に共喰ひをしてゐる。この九軒に一軒の日用品小賣店を二百軒に一軒にすることは容易である。而もそれは何等購買者側も損を蒙むることなく販賣する側も打撃を受くることなく、賣る方と、買ふ方が同一の人——即ち組合員であれば、米が少々高くとも、儲けられる心配がないので不平は無い筈である。

彼は先づ、それを、村山佐平の辯護士になつてくれた今村博士に話した。今村博士は大賛成であつた。それから新見は大阪のキリスト教信者の間を馳け廻つて、同志のものを集めた。然し、教會の人

々の多くは、中流階級のもので、あまり困つて居らぬものだから、彼の説に賛成はしても運動に加はつてくれるものは少なかつた。

彼はブラツシユ會社を作つた時と同じやうに祈りつゝ組織に着手した。彼が熱心に説くものだから、砲兵工廠に働いてゐる職工からも、印刷工場に働いてゐる労働者の間にも數百名の賛成者が出来た。伏見教會の牧師の義弟梅野兼三君は商業學校を卒業したばかりであつたが、事務の方を扶けてやらうとすぐ會員募集に従事してくれた。八月の終りには略々形も整ふことになつた。事務所を大阪市西區靱中通三丁目に借り入れた。

それは弟益則の店の近所であつた。會長には今村博士を推し、専務理事にはゲートル屋の坂上直吉君になつて貰つた。會員は瞬く間に千三百名以上に増加し、彼の理想は束の間に實現出来るかのように見えた。

五十

『斷然、要求しようぢやないか！』と云ふ聲は神戸造船所の職工の間に漸く定まつた意見となつた。彼等は屢々神戸聯合會に集つた。

『やるなら今だぜ！ づんと不景氣になると駄目だぜ、まだ景氣の善い時にやらんと敗けるよ、對手は、なに云ふても、元老の次男坊で、政府の後楯があるからなア。』

『然しストライキやるには訓練が無いし、まだ多くの職工は目醒めて居らないから、何か新しい戦術を以つて戦ふんだね。』

『何か、善い戦術はおまへんか？ 島村さん。』

集つてゐる連中の長老野村初太郎が島村に尋ねた。

『あるよ、そらね……誰れも新聞記者や、外の人は居らんか……ぢや、幹部だけに教へてあげるよ、隣りの室に來給へ。』

島村信之は新見榮一の友人で労働階級への奉仕者としていつも聯合會の手傳をしてゐた。今日もひよつくり、やつて來たばかりに、新戦術の奥義を授けねばならぬことになつたのだ。

七八人の幹部達は隣の部屋に這入つた。そして一時間位秘密で何か囁いてゐた。

それから恰度三日目であつた。大阪の各新聞の夕刊に神戸造船所の怠業が報ぜられた。一般の讀者は「怠業」が何を意味するかを知らなかつた。然し詳しくその記事を讀んでみて、それが日本に於ける新しき労働爭議の戦術であることを知つた。

職工は會社に對して、大體三つの大きな要求を持つてゐた。戦時手當を本給に繰入れること、公傷を受けたものに休業中相當の手當を與ふること、衛生設備を完全にすることの三つであつた。神戸造船所に限らず、何處の會社でも戦時中特別手當と云ふものがついてゐた。それは神戸造船所に於ては本給の七割に當つてゐた。物價が四年半の間に二倍以上に昇騰したのであるから、七割の特別手當を貰つても別に善い賃銀ではなかつた。狡猾な會社は特別手當をいつまでもその儘にして置いて、賞與の時などはいつも本給に對する比例で給與した。ところが、休戦となり、世に不景氣が來襲すると云ふ噂が立ち始まると、職工側に於ては何時特別手當を中止されるかも知れないと云ふ不安が湧いて來た。物價が高い時に七割の特別手當が除去されると、逆も妻子を養つて行くことは出來ないと考へたのである。歩増手當を貰ふ爲めには職工も一生懸命に働かねばならなかつた。日本の工場法は女工幼年工に對しては、労働時間の制限がある。然し、一般の労働者にはそれが無い。神戸造船所のやうに忙しい工場では、四十八時間も打續けて勤務させられることが珍らしくなかつた。そんな時には晝間の激務に疲れた職工はアンペラ一枚を持つて機械の下にもぐり込み監督の目を盗んで寝るのであつた。その爲めか戦時の好景氣時代に忠實に勤務したもので體重十二貫あるものは誠に珍らしかつた。多くは十一貫前後で、ひよる長い男でも十一貫位しか無かつた。職工連と一緒に風呂に行くと、よくそれが目

についた。

衛生設備の要求は、洗面所、食堂、便所、湯呑所、休憩所の要求を意味した。

嘆願書は十五日の朝、各部の部長の手を経て、大久保社長の手に渡された。回答は十八日と云ふことになつてゐた。

十八日が來た。

恰度正十二時と云ふに、左腕に赤または黃の布切れを巻いた七十名の委員が社長室に詰めかけた。

晝休みのこととて、各工場は彼等を拍手と萬歳で送つた。

社長室と云ふのは、三間に四間の大廣間であつた。中央には馬鹿に大きなアメリカ式の事務机が二つ並べられてあつた。一つは社長の常用の机と見える、文書用の整理箱がのせられてゐる。もう一つの机の上には設計書や、参考書が山の如く積み上げられてあつた。壁には造船所で進水した軍艦や汽船の寫眞が額にして掲げてある。室の片隅には美しい汽船の模型が硝子箱の中に入れてある。博覽會に出品したものである。床には敷物も何にもなく、木目が著しく目立つ。そこは全く事務室と云ふ感じよりか、工場と云ふ感じのより多く與へられるものであつた。然し荒削そのまゝのところか、如何にも社長の性質を善く現してゐる。

社長はアメリカ式の粗末な、木製の広掛椅子に腰をかけた儘、委員の顔を一通り見廻し、極く落付いた句調で問ふた。

『おまへたちは、各工場を代表してゐる委員か？ 役付は誰れも居らんのだな。』

『はい、さうで御座ります。』

と造機の委員、野村初太郎は鄭重にお辭儀をして答へた。

『此工場にはな、規定があつて、平職工は先づ、伍長、組長に申出で、それらの人々を通じて會社に要求することになつて居るが、おまへたちはこの工場の規定を全く踏み付けたやりかたをするのぢやな、』社長は初めからブーブー云ふてゐる。

社長は「俺に託せろ！」一點張である。職工が要求しない八時間労働制を近い中に實行する氣で居るなどと云ひ出す。それには職工側も吃驚した。そして「歩増の本給繰入は出来ない、既に七月に二割の増給をしたのだから、そんなに早く増給は出来ない」と主張する。委員連は「では、要求は拒絶ですな、』と駄目をおして各自の工場に去つた。

その日の正午神戸造船部の動力が先づ止つた。そして壓搾空気を送る機械が動かなくなつた。修繕職工は叮嚀に動力を解剖し出した。動力が來ないものだからガンドリ・クレーンの下では三千人の

職工が腰をおろして煙草を吸ひ始めた。旋盤や、仕上の方はそれでも機械だけは廻してゐた。別に仕事を休止したわけでもなかつた。然し、能率をあげるものは誰れもなかつた。平常一度磨けば善いものを五度も六度も磨き、一時間に五分削る所を一分二分しか削らずに、たゞブラ／＼してゐた。壓搾槌の部分は別として誰が見ても忘れてゐるものは誰れもなかつた。然し、仕事は少しも進捗しなかつた。

會社がぐ／＼してゐる中にサポターチは一週間續いた。その間工場の管理は完全に職工の手に移つた。造船所の出入は勿論のこと、機械場、道具場、屋外作業に到るまで、一つとして、爭議委員の選出した管理委員の指揮を受けぬものはなかつた。サポターチが完全に行はれる爲めにも、爭議に參加せる労働者が裏切りしない爲めにも、サポターチが持續性を保つ爲めにも管理を徹底的に實行する必要があつた。會社の役員はみな眼を見張つて見物して居た。

サポターチも遂に十日目となつた。その間漸次軟化するものと、益々硬化するものが現れてきた。或工場では「社長を信賴して爭議を中止しようぢやないか」と云ふ議論が強くなり、工場管理委員の云ふことを聞かないで、ドシ／＼仕事を始めた。然し、一方ではサポターチの程度を通り越して、ストライキをしてゐるものもあつた。工場委員は遂に決心して、各工場に同盟罷工すべきことを命じた。

そして二十七日の朝から同盟罷工になつた。その日工場に出て労働するものは一人もなかつた。

社長は敗けることは嫌ひだし、職工の要求を入れなければならず「全部俺にまかせろ、でなければ俺は辭職する」と拗ねた大久保も結局敗けねばならぬと云ふことになつた。

で大久保社長は、例の稚氣のある親分氣質を出して時間労働制と、職工の要求したものと殆ど同分合になる改正賃銀率を作成して、サボターチをしてゐない兵庫の分工場に掲示した。最後の交渉の段になつて「俺の腹を見てくれ！」と職工側に一驚を喫しさせてやらうと考へたからであつた。

ストライキになつた二十七日の午後三時に最後の交渉が例の地下室で行はれた。

社長は右手の指にハバナの葉巻煙草をさし挿んでゐるが、昂奮してその手は震へてゐる。

「——今日はおまへたち何しに來たのぢや、兵庫の工場へは八時間労働制の實施を、賃銀増額と掲示しておいた、おまへ達は、私を飽迄信用しなければ、兵庫工場に與へた條件は、おまへたちに與へることは出来ない。それで、私に凡てを託せるか、それとも、私は辭職することにする——」

大黒さんのやうな大きな頬に、大きな耳をつけた大久保社長は特に委員長の野村を凝視してさう云つた。

職工側は少しの間黙つてゐた。暫くして

野村は社長に云ふた。

「——少しの程お待ちを願ひます。明日改めて、お返事を申し上げます。」

委員長が工場に引上げると、各工場では既に兵庫工場に掲示された内容をよく知つてゐた。

「社長はするい——」

「大久保は食へない奴ぢや、敗けるのがいやだから妙なことしよる。」

「然し……今度だけは社長に託してやれ。」

かうした聲が四方から叫ばれた。工場委員はまた寄つた。そして社長一任に決定した。

二十八日は日曜日であつたので二十九日の午後三時に、また、委員十名は、社長に面會した。そして、工場委員の決議を傳へた。

社長は昂奮した句調で云つた。——

「お前達の付けて居る腕章を俺にくれ、俺はそれを室にかけて、朝夕それを見て自らを戒めることにする——」

然し、云ふて置くがね、サボターチと云ふやうな、卑怯なやりかたは、眞平御免を蒙るよ、やるなら、男らしく堂々とストライキしてくれ、此後そんなことが無いやうに注意しておく……」

それで社長のお説教はすんだ。八百名に近い役付職工と、争議委員は地下から外に出た。それらの人々の口からは

『大久保はやつぱり、華族のおぼつちやんだ！』と云ふ批評が漏れてゐた。

神戸造船所のサポターチは、たゞ單なる一つの地方的争議で有つたが、その影響するところは實に絶大であつた。恰も大正七年の米騒動が波及するやうに、三菱造船所、神戸製鋼所、住友電線、住友伸銅、大阪鐵鋼を始めとして百〇八の工場が、神戸造船所の争議があつて僅か一ヶ月たぬ中に、一日労働八時間制を原則として採用せねばならなくなつた。勿論その中でも或者は九時間制で止まるものも有つた。然し、神戸造船所の争議以來、労働時間と、それに對する賃銀率を根本的に變更せねばならなくなつたことは大きな出来事であつた。

「サポターチ」の語は「サポ」と云ふ動詞として用ゐられ日本全國の通用語となつた。労働同盟神戸聯合會は全員數千名を加へた。そして各種の研究會が次から次に開かれて、新見は殆んど毎晩のやうにさうした會合に引張り出された。

その後間もなく、日本労働同盟全國大會が、大阪西區西九條の市民殿と云ふ耶穌教の教會堂で開

かれた。東京からは總同盟會長青木友治を始め、大正七年春、帝大を卒業して直に本部員に加はつた、青木繁、市橋良熊など數十名の闘士が大阪に乘込んで來た。

大會は中ノ島から天王寺公園までの示威行列で始まつた。その行列には、日本で始めて見る、黒旗をかざした一團が加はり、赤旗を振る社會主義者の一團が參加した。東京から來た闘士連もそれらの人々に劣らじと、

一舉に屠り打建てよ
労働自治の新世界

を歌ひ出した。

關西側の一幹部として新見榮一もその示威行列に參加してゐたが、關東の青木繁に注意した。

『君、あの歌は少し、大阪にはきつ過ぎるよ、警察が行列を禁止する恐れがあるかも知れない。』

『××、××、××××、××××××××××××、新しい運動は出來ないよ。』

警察は果して、その歌を禁止した。そして主義者連を拘束する爲めに行列は大混雜を來した。

市民殿で愈大會が開かれた。第一日は無事にすんだ、そして第二日普通選挙の問題が議題に上つた。關東側でも若手の連中は、今にも日本に×××××と云つたやうな句調で、氣勢をあげた。

だ、私は正義がいつも勝つて欲しいよ、僕は戦の凡てが悪いと云ふのではないのだ、やはり、正義には勝たせたいのだ。然し、僕はね、暴力によつて正義の審判をさせることはあまりに無謀なやりかただと思ふのだ。原始時代ならまだ善いよ、産業革命を経た今日では、さうした方法は凡てを破壊することに成りやしないか！ 早い話が、僕は豫言して置くよ、ロシアのレニンは必度、その方策を變更しなければならぬから……あの方法では産業と云ふものは起らないよ、あれぢや、産業革命を政治革命で行かうとしてゐるのだ、劍と機械の間にはさう聯絡がないからなア。』

青木は新見を反駁しようと思つて口をもぢくしてゐた。

『然し、その段になると、僕は君の反對だなア、今日の世界の法律では所有權と云ふものは、全くXが保證してゐるのだからなア、あゝやつて、X、X、X一つやつておくと、後々がやり安いぢやないか！ あれからは仕事が楽だよ。』

『だけど、實際、土地國有と云つたところで、實際問題になると、さう便利なものと思はないね、凡ての方面に細胞分裂が有つて、有機體が一つの完全な機關として動くので、最初から脳髓が出来て、細胞を後から造つて行くと云ふのは少し變則だね。僕の考では自由組合から漸次進化するのが最も善いと思ふがね、土地の國有などでも、日本のやうな狭い國では、國有も、いが、ロシアのやうな廣い

國では寧ろ土地組合有にして、その組合によつて管理せしめて差支へないと思ふね。』

『そんなことはどうでも善いがね……僕はどうも君が無抵抗主義を主張する理由がわからんね、君は人が殺しに來ても戦はないかね。』

『僕はその人間を擱へて縛つて了ふよ。』

『ぢや、戦ふのぢやないか！』

『それは違ふ、殺すことを欲しないのだ。僕はストライキも、サボターヂも、ボキコツトもラベルも、總同盟罷工も是認する。然し、資本主義と、資本家を混同したくないのだ。制度と人間を區別する。それで、僕は近代人の凡てが陥つた迷妄の爲めに、人間としての資本家を殺すことが出来ない。……よく考へてくれ給へ、奴隷解放と、労働組合運動とは大部、性質が違ふから。産業革命は全く機械の産んだものだ、機械を征服するのに、銃劍じや仕方がないぢやないか？』

青木は起ち上つて、床の上に座つた。そして煙草を上向きになつて吹かせ乍らデレツタさうに云ふ、『そら判つてゐるさ、僕の云ふのはなア、金權とXが一緒になつて居るその所有權の急所を衝くのはXの外無いと云ふのだ。』

『僕は必しもさうは考へないね、大衆の生産者が、社會的組織を持ち、一方に労働組合、他方に、

消費組合、中央に銀行を驅逐する爲めに信用組合を作り、搾取階級の手足の出ないやうにすれば、暴力を使用しなくとも、社會革命は或程度まで可能だと思ふのだ——恰度、機械が産業革命を産んだと同じやうに……最初武力を以て顛覆しても、またく組合を基準として社會を組立て、行かねばならないとすれば、暴力はさう急ぐ必要はないぢやないか……見てゐたまへ、レニンはモスカウの信用組合を解散させたやうだか、今に後悔するから、彼の政策を轉換しなければ、決して、社會革命は成功しないよ……みな革命と云ふから、暴力を用ゐなければならぬやうに考へてゐるが、それは大間違ひだ、死は最後に來る可きもので——初めからそんなに急ぐ可きものではないよ。」

夜が更けて行くので冷氣が身に沁む、青木は蒲團を身體にくるむ。

「然し、君のやうな軟弱なことを云ふて居れば、労働階級は何時、解放せられるか解らないねエ、労働階級は、君のやうに先が見えないから、先づ打壊して行きたいと云ふぜ、君には、労働階級は陰いて行かないよ。」

「それでも善い……僕は眞理と知れば、大衆を敵としても戦はねばならないのだ、そして結局は僕の云ふことが眞理だと云ふことがわかるだらう。」

「然し、人格だとか、君の云ふ主觀經濟だとか云ふてゐても、労働階級は永遠に解放せられないね、

僕は前途唯物史觀で行かなくちや嘘だと思ふね。」

さう云ふと青木は巻煙草の灰を灰皿に振り落す。

「では君に質問するがね……マルクスの云ふ労働價値と云ふのは物質のことを云ふてゐるのかね？」

「そら勿論、商品を生産する力を云ふてゐるのだ。」

「力は物質かね、エネルギーかね？」

「そんなことは聞かなくても判つてゐるよ、そら勿論エネルギーさ！」

「マルクスの本意は資本主義的偶像主義から、生命と労働とを解放しようと思ふにあつたらうと思ふのだ。商品以上に労働を、機械以上に生命を、投機以上に社會組織を重んずるところに彼の科學的社會主義の主張がある可きだと思ふのだ。だから、僕はたゞ唯物論だけを主張する社會主義は必ず行詰ると思ふ……それとも生命が物質だといふなら、私は理窟を抜きにしよう、結局は同じことを云ふてゐることだから……」

他のものはみな寝つて了つた。時計は疾に一時を打つた。青木は退屈さうに云ふた。

「そんなことは、どうでも善いさ、一つぼかんとやらなければ、有産階級が目醒めないからなア、米騒動を見給へ、あれで、資本家は餘程目醒めたぢやないか？」

「然し、労働階級は少しも目醒めて居やしないぢやないか？ お米一升を三十五錢で賣つて貰つたところでも何にもならんぢやないか……」

遠くに聞えたレールを轆る電車の音も、いつしか止んだ。按摩の笛も絶えた。たゞ隣の室から、對論に疲れた東京の猛者連の大きな鼻が聞こえてくる。

青木は腕時計を一寸見て

「新見君、もう睡ようか、明日もまた早くから市民殿に行かねばならないのだから……」
 すぐ二人は仲よく枕を並べて睡つた。

五十二

新見は、朝早くから急がしく原稿を書いてゐた。朝の霧が深く六甲山脈を立ち込め、秋の静けさが街にも満ちてゐた。そこへ、元京都教會の牧師であつて、今は内務省の社會事業部の囑託になつてゐる鳴澤義人と云ふ人が突然尋ねて來た。

「今日ねえ、新見君、内務大臣が、君に會ひたいと云はれるのだが、會つてくれるかね？……實はね、今日大阪に來て居られる、米國で有名な社會事業家のロバート・ホルン氏をも内務大臣に引合す

ことになつてゐるのだよ、それで、ホルンさんと一緒に君が、太田さんに會つてくれるなら、非常に仕合せだと思ふがね、……先方は非常に會ひたがつてゐるんだ、太田さんは、人が善いからね、微行で、新川を見に來ても善いと云つてゐられるんだ……然し警保局長の池永君がそれには反對なんだよ……それでねえ、君、太田さんが是非新川を見るやうに勸めて貰ひたいものだ……」

鳴澤は庭に立つた儘、黒の帽子を右手に持ち、黒色の皮靴を右手に提げてさう云つた。

「太田さんは何處に見えてゐるんですか！」

「今ね、大演習があつてね、陛下に隨行申上げて、須磨に來て居られるんだよ、君、あの堀内の邸宅を知つて居るでせう——離宮のすぐ下の——」

「あゝ、知つて居りますよ、新築中の？」

「あゝ、あの邸宅が、もう落成して、今度の大演習に、總理大臣以下内閣の諸公がみなあそこに宿を取つてゐるんだよ……だから、君が今晚、あそこに來られるなら、色々の人に會へるわけだ」

新見は鳴澤と、その晩七時に海岸のオリエンタル・ホテルで落ち合ふ約束をした。そしてロバート・ホルン氏と一緒に自動車で、須磨の堀内の本宅まで行くことにきめた。

——さう約束をきめたに就ては、新見に色々理由があつた。個人的に大臣と云ふ人にも會つてみ

たいし、神戸で飛ぶ鳥も落すばかりの船成金、堀内の邸宅も見えたかつた。彼は貧民窟とその邸宅の比較がしてみたかつた。

約束の時間が来た。彼はオリエンタル・ホテルの大廣間でロバート・ホルン博士に紹介せられた。博士は脊丈六尺五寸もあらうと思はれる大男で、顔は林檎のやうに赤く、米國人特有の或種の角度を持つた面長で、白襟を縫ひ付けたチョッキにフロックコートを着てゐた。「大臣に會ふので改まつてゐるな」と思つた。兵庫縣廳差廻しの自動車が出来た。三人はそれに乗り、須磨に急いだ。アメリカから歸つて来て、新見が自動車に乗つたのは此時が初めてである。須磨は陛下奉迎の提灯行列で沸くが如くであつた。その中を掻きわけけるやうにして、自動車は離宮道を駆け上つて行つた。離宮道を左に少し這入つたところに堀内の大きな邸宅がある。自動車は門を這入つてまだ一町ばかり奥に這入つた。左右には紫宸殿か大極殿かと思はれる程の立派な唐破風の女關の付いた日本建りの御殿が立ち、正面にはホテルとも見ゆる赫々と電燈の灯つた洋館が立つてゐる。自動車は洋館に横付けになつた。女關番が叮嚀に車のドアを開けてくれる。今日はまるで大臣扱である。

新見が立關でうろくしてゐるうちに、そこにもまた、もう一つの自動車が横付けになつた。そこから燕尾服を着た立派な老紳士が現れた。老紳士は叮嚀に名刺を出して、女關子に取次を頼んでゐる。

「大久保です、御主人はお宅ですか？ 先程電話でお伺ひすることを申上げておきましたが……」

女關子はかしこまつて、

「大久保侯爵でいらつしやいますか？ 主人はお待ち申上げております。どうぞ、こちらへ」

「いや、一寸急いで居りますので、失禮ながら此處で、お目に懸ることが出来たと仕合せですが……」

女關子は奥に駆け込んだ。老侯は女關に立つた儘で新しい木の香のまだ失せやらない總檜の御殿造りの家を見廻してゐる。主人の堀内金作は小走りで出て来た。そして祿々お辭儀もしないで、

「まアお通り下さいませんか？ 一寸でも〜。」

と繰返してゐる。老侯は自動車の中から軸物を取り寄せて、堀内に手渡した。

「堀内さん、之はほんのお土産と云ふのでもありませんが、先日の戴きものに對する御禮です、拙いものですけれども御覽に入れます……」

「それは誠に恐縮致しました。」

新見は黙つて女關の片隅に立つてそれを見てゐた。明治の元勳、大久保通禧と、驅出しの俄成金堀内金作とが珍品の取かわせをしてゐるなと思ふと、あまり感心した舞臺でもなかつた。それから、堀

内は靴下の上へすぐ草履を引かけて、大久保侯爵を案内して、新築の邸宅と庭を見せて廻つた。

内務大臣は新見等と何處で合ふのか、なかく室に通してくれない。或は鳴澤が今朝云つた通り、警保局長が反對して、途中でゴテてるのぢやないかとも新見は想像してみた。然し待つてゐる中に面白い芝居が見られる。登場人物は維新の元勳と、大正の俄成金の二人、舞臺面は須磨の濱を前にした成金の邸宅、時は大正八年十一月四日午後七時半、維新の元勳が無耶味に成金の贈物を有難がる！

「——あゝ、時代も變つたなア——」

と新見は女關に立つてひとり嘆息をした。

「——若い時には彼等も徳川の權勢を尻目にかけて、薩州男子の意氣を天下に示したものだらうがなア、世も澆季になると、建國者が今世の紀文大盡に頭を下げねばならぬことになるかなア——」

侯爵は少しも落付かないケバ／＼しい建築物には、あんまり感服しなかつたと見えて、庭先に立つて別れの挨拶をしてゐる。堀内は庭にも立たないで、階段の上からお辭儀をしてゐる。その大盡振つた態度に、新見はグツと頬に觸つた。

「あゝ、金の世なりけり、金の世なりけりだ……日本帝國もドン底に墮落した……こんなことでは國家百年の計が危い……金の前に軀を屈する元勳、そして金を誇る俄成金……」

新見はすぐそこから引上げようかと思つた。侯爵と別れて、堀内は嚴肅な顔をして、新見に挨拶もしないで、その前を通り過ぎた。暫らくして、新見とホルン氏は二階の應接室に通された。そこは實にしつとりとしたいい部屋であつた。凡て鈍色の家具がそこに備へ付けられてあつた。

鳴澤はモーニング姿の内務大臣太田景輝を案内して室に這入つて來た。ホルン氏は先づ椅子より立つた。で、新見も立ち上つた。大臣は中央の大きな膨張椅子に座つた。それでみなものは着席した。内務大臣は新見の來訪を別に意に介せざるものゝ如く、たゞホルン氏と外交辭令のやうなことのみ取り替してゐる。

「——この大臣には、ほんとのことが云へないと見える——」

新見の、太田内務大臣の印象はそれであつた。體格も顔も堂々たるものである。然し、可哀相なほど、世間に對して脅えてゐる。相對して座つてゐても少しも話題が無い。岩下知事などと話してゐると全く違ふ。

「——こんなのが善いのだ——大臣としては——これを重みがあると云ふのだらう——自分の意見を云ふたり、無闇に質問したりすると、頭腦の程度を見透されるものだから、三月節句の大裏雛のやうに、沈黙して座つて居れば政治がとれて行くものと見える——」

新見は大臣とホルン氏の外交辭令を聞いてゐる中に、こんなことを考へてゐた。

庭のアークライトの紫の光が窓硝子を越して、滑かに磨きたてた机に反射する。窓と窓の間に懸つた古雅なコブラン織の壁掛けが、入口の隅に据えられた、青銅の靜かな日本婦人の胸像と相對して何とも云へぬ善い感じを與へる。

内務大臣秘書官、大沼晋策が這入つて來た。その後間もなく此家の主人公堀内金作が出て來た。

彼は大臣に食事の用意が出来たと知らせた後、ホルン氏と新見に挨拶をした。新見は堀内が妙な顔をするであらうと豫想してゐるに反して、愛想よくお世辭を云ふのでさすがは商人だと感心した。

食堂の入口で、秘書官の大沼晋策が、新見を警保局長の池永厚に紹介してくれた。池永は大勢の中でひとり和服を着てすましこんでゐる。新見は叮嚀にお辭儀をしたが、池永は軽く顎で挨拶をして、かつと食堂に這入つて行つて了つた。

食堂は家の割にしてはさう廣いものではなかつた。十五六人坐れば満員であつた。食卓には銀製のナイフやフォークが幾百となく並べられてある。それに電燈の光が反射して實に美しい。黄金の鉢に盛花がしてある。如何にも成金らしい裝飾であつた。向側の中央に主人が坐り、その隣には、堀内の一人息子で今年七つになる男の兒が坐つてゐた。反対側には内務大臣が坐つた。内務大臣の左右にホ

ルン氏と新見が席を與へられた。鴨澤はホルン氏の右側に坐つて大臣の通譯を承り、大沼は新見の左側に坐つて、大臣に取次ぐ可き社會事業を彼から聞き取らんとした。警保局長は右の端に坐つた。不圖見ると、お給仕に出て居る青年は、貴合新川のイエス團に出入する、神戸三番の踏切の寶亭のボーイ、渡邊卓藏であつた。新見は彼に軽く挨拶をした。席が定まつた時にも一つの空席があつた。

太田さんは、主人に、

「大阪夕刊の本條君がくることになつてゐたが、まだ來ないやうだ。」

さう云つてゐるところへ、本條紅葉君が這入つて來た。本條君は大臣に叮嚀に挨拶をして席についた。

新見は本條とは勞働組合の演説會や、普通選舉の演説會で屢々一緒にになるのでよく知つて居る。

「今晚は！本條さん！」

と大沼の左側に席を取つた本條に、新見は小さい聲で挨拶をした。

「ヤア！」と本條が云ふ。

變つたお客さんを迎へて席は白らけ渡つた。離宮からは第四師團の軍樂隊が盛んにやつて居る。

「——まるで、我々の爲めに吹奏してくれるやうなものですな。」

と堀内は善い氣になつて、大臣に云ふ。

『善く聞こえるね、陛下も御夕餐と見えるね。』

アンチオツベが廻つて、スープが出た。

給仕がシャンペンを盃についで廻る。新見にはサイダーがあたる。大臣とホルン氏の間に例の外
交辭令が鳴澤の通譯で取替されてゐる。酒がみんなの盃に廻つた時に主人は盃を捧げて、

「内務大臣の健康を祝します」と云ふ、席の凡てのものも高く盃を捧げて、そして揃ふて盃を
唇に持つて行つた。それが済むとまたホルン氏と大臣間に外交辭令が續く、

大沼は小さい聲で、

『新見君、大臣に詳しく下層社會の事情を話してくれないか！先生少しも知らないのだから、太に知
らせて置く必要があるのだよ……池永君は、君が此處にくるのを馬鹿に反對して、今の先までグズグ
ズ云ふてゐたがな、僕は、それはいかない、また米騒動のやうなことがあると大變だから、大臣もよ
く下層社會の事情に通じてゐなければならぬと云つたのさ……先生は随分保守的だからなア……先生
は頻つて、村山佐平と云ふ傳道師のことを云ふてゐたが、あれは君に關係があるんですか……』

『大にあります。村山君は私の宅から擱まつて行つたのです……』

大沼は米騒動の時まで京都帝國大學の經濟學教室の助教をしてゐたのだが、米騒動と共に内閣が
更迭し、憲友會の齋藤純正が内閣を組織し、太田景輝が内務大臣になつたので、彼はその秘書官に撰
ばれたのであつた。年はまだ若く新見と五つ位しか違はないのだが、頭の中央が禿げ、毛が薄くなり
年より遙かに更けて見えた。

オウグラチンが済んで、魚が出た。新見はとても、こんなに澤山な御馳走を食ふことが出来ないとい
思つて、側らに置かれた獻立表を見ると、佛蘭西語で二十位並べてある。

ホルン氏との會話が途切れた時に、太田氏は、新見を顧みて尋ねた。

『貧民は米の高いのに弱つてゐるのでせうなア。』

『はい、弱つて居ります。』

大臣はさう云つた切り、また、堀内と話を始めた。話の内容は憲友會系の谷田萬之丞が大坂取引所
のへ貫と一緒になつて、新しく上海と天津と、漢口に取引所を新設したいと企んで居ると云ふこと
である。

『あれは望みがあるでせうな！』
と大臣が云へば、

『大に有望ですなア。』

と堀内も相槌を打つ。

『支那も然し、困つたことすなア、あゝ排日が盛んぢや……私も日清汽船に少し關係があるので、先日一寸上海まで行つて来たのですが、逆も、今の所は手が出ませんね』

と堀内が大きな銅羅聲で大臣に云ふ。

『困つたことだね。』と大臣は主人の顔を見詰める。

蝦の飛行機が出た！

『あ、飛行機！飛行機！』

と堀内のひとり息子が突拍子もない聲で騒ぐ。なる程、大臣の前に据えられたものは一尺もあらずと思はれる大きな赤い伊勢蝦を断ち割つて、その赤い皮で飛行機の翼を作り、客に供へたのである。

『閣下、大藏大臣がお見えになりました。』

さう、書生が、太田に取次いだ。

『大廣間にお待ちを願なさい……唯今、お食事中だと申上げて。』と堀内が云ふ。

太田はまた新見を顧みて、

『神戸造船所の職工はもう落付いたかね？』と聞く

『はア、よく勉強致して居ります。』

『労働運動の方は關東より關西の方が、よほど進んで居るやうだが、……労働者は悪化する傾向はな
いかね？』

『悪化と申しますのは？』

『悪化すると云ふのは、つまり、破壊的にだね。』

『サア？ そんなことはないと思ひますが……悪化してゐるのは、關西では寧ろ、金持ちでございませ
す——』

それを聞いてゐた、堀内は大聲で笑つた。

『ほんどぢや、新見君はよく云ふた、確かに關西の金持ちは悪化して居る、』

堀内はひとり言のやうに云ふ。

——新見は心の中で考へた——『堀内の阿爺！自分が悪化してゐることをよく心得て居るな。』
と。鶏肉が出た。マトンが出た。大片のビーフステッキが出た。それに一々ソースが廻る。
書生が取次の爲めに主人の側に近づく

「神戸造船所の大久保さんと、花木商店の山川さんがお見えになりました。」

「すぐ、大廣間にお通しして——」

堀内は大臣を顧みて

「大久保君と、山川君が見えました。」

と席はまた白らけ渡つた。警保局長はシャベンに酔ふて頸の根元まで赤めてゐる。

彼は初めから一言も云はない。眉間の立皺を一層深くして皿をナイフでコツ／＼やつてゐる。

酒が廻る。みな静かにして居る。離宮の軍樂隊の美しいメロデーが、食堂の模様入の硝子を揺がせる。

「総理大臣は明日何時頃こちらにお見えになりますか？」

「サア、何時になりますかなア、今夜東京を立つことになつてゐるから、神戸は朝の七時頃じゃないかなあ？ 君知つてゐるか？ 大沼君？」

「は、その頃と思つて居ります。」

アスパラガスが出る。

「このアスパラガスはなか／＼甘い！」

大臣は人差指と母指との間にアスパラガスを握つて、さう云ふ。

「お氣に召しますれば、お變りを致しませうか？」

「いや、もう結構です、アスパラガスは樂だと云ふね、君。」

「さうですかね。」

大臣は話題が無いので、アスパラガスの講義を始めた。サラダが廻つて、コーヒとアイスクリーム

にお菓子が附いて出る。

新見は久方振の御馳走に甘いと思はぬでもなかつた。然し歐洲戦争以後、日本人の生活振りが全く

西洋化し、成金とは云へ、アメリカでも、餘程贅澤な宴會でなければ食はぬものを日本で食ふやうに

なつたことを思ふと、日本も餘程贅澤になつたのだとも思ふ。粗食論者の榮一に取つては、この御馳

走は少しも有難いものではなかつた。

面白くもない晚餐は果物が出て最後になつた。大臣は自らホルン氏と新見を再び二階の應接室に案内した。本條氏も黙つてついて來た。話題は少しもない。太田が敢て聽かうとしないものだから、新見

も敢て語らない。

堀内も上つて來た。

『ホルン博士に日本造の家をお目にかけませう。』と云ふ。
大臣も見たいと云ふ。

『堀内君が、僕等の爲めにこの大きな家を解放してくれたものだから、暫くは僕等の家のやうなものだ。』と大臣は得意になつて喜んでゐる。

竣工したばかりの百二十疊敷の大廣間には奈良神代杉の戸が立つてゐた。その一枚に何萬圓とかかつてると聞かされた。節なしの檜の柁が美しく見える。

本條が新見を顧みて云ふた。

『こんな廣いところで堀内は寝るのだらうか？——少し贅澤過ぎるね、君、工事が全部で六百萬圓かゝつたと云つてゐるぜ——』

新見は自分の寝て居る、葺合新川の二疊敷御殿のことを思ひ出した。今更成金を呪ふのも馬鹿臭くなつた。こんな時には青木繁の言葉が思ひ出される。

堀内は庭の石を一々指さして、「あの石は鞍馬から曳つばつて來ました。一萬圓位に附いてゐませうかなア——」と嘯ぶく。

「石一つに一萬圓とは少し贅澤過ぎる。」と本條が小さい聲でひとり言を云ふてゐる。大臣と堀内は二人で先に行つたものだから、本條は新見のところに寄つて來た。

『新見君、大藏大臣が來たらう。それに、後から大久保と、山川がやつて來ただらう……君、戦争が濟んでなア、船が段々悪いのだよ、だから、堀内と大久保と、山川の三人が政府に船を賣附けようとしてゐるんだ。こいつらみな喰へない奴等ばかりだからなア、彼等は郵船、商船、東洋汽船その他凡ての大小廿五六の小汽船會社を合併して、鐵道國營と同じく、汽船國營を持ち出して居るのだ……戦争中はうんと懐にねぢ込んでおいて、少し損するやうになると、それを政府に持込むのだからね……こいつらがみな國家を喰ひ物にしてゐるのだ！』

大廣間を見て廻つた後、堀内は更に他の建築物を見せた。然し、成金の俄造りの建築物に感心すべきものがあらう筈がない。たゞいや氣と癪の種を植え付けられて玄關まで歸つて來た。そこで太田氏は大藏大臣が待つてゐるからと云ふて、ホルン氏と新見に別れの挨拶をした。で、新見は黙つてお辭儀をした。玄關で彼はホルン氏とも別れ、徒歩で、ひとり淋しく離宮道に出た。街の騒ぎも既に鎮まり、沖の軍艦のイルミネーションも消えた。離宮道をはなれると、そこは、闇と十一月の冷氣が支配してゐた。

闇を踏んで、貧民窟に歸ると、缺乏と、どん詰まりと、浮ばれない悲しみが彼を待つてゐた。それを瓦屋根の上から、いつも同じ所を窺く、北斗星が、遙かに悲しんでゐた。

五十三

「こら老婆！ おまへのやうな厄介ものは死んで了へ！ 俺はおまへの顔を見ると胸糞が悪くなるわ！」

さう云つて、上杉は老婆の顔に坊主枕を投げつけた！

「豪たれめが！ ど畜生！」

老婆さんもなか／＼まけて居らない——

「何？ ど畜生！ も一遍いつてみい！」

眼を据て上杉は、老婆の處に飛んで行き、頬べたを烈しく擲り附けた。

「人殺し！」と老婆が泣き叫ぶ、

老婆の聲があまり大きいので、イエス團の留守をしてゐる書生の高井が二階から降りてくる。上杉は蒲團を頭から蒙つて素知らぬ顔をしてゐる。

老婆は、高井に上杉の虐待を訴へる。

「この人つたらなア、わたしの顔を見るなり、「おまへのやうな厄介婆は死んで了へ、おまへのやうな皺くちや婆は、くたばつて了へ」と云ひまんね……わしはなア、なんにもこの人に厄介になり來たのや、おまへんさかい、出て行けと云はれても、行くところがおまへんさかい、黙つて坐つてゐると、どついたり、蹴つたりしまんのや……わたしほんまに辛らうなりまつさ、こんなに年とつて、どこの馬の骨かわからん酔拂ひにど突れるのやあつたら、年とるまで生きとるんやなかつたのに……と思ひまつさ！」

上杉は、蒲團の中から首をつき出して、酒呑童子のやうに血相を變へて老婆を睨み付けた。

「こら、齒抜け婆！ 「何處の馬の骨？」もう一遍云つてみい！」

上杉は、半身だけ體を起し、そこに有つた物尺で、老婆の頭をしに入るほど擲り附けた。老婆は頭を抱へて、そこに泣き倒れた。

高井は飛び上つて行つて、上杉の腕から物尺を抜き取つた。

「この齒抜け老婆が！ 蹴殺すぞ！」

鼻先をピクツかせ乍ら、上杉は阿修羅のやうに目をひきむく、老婆は息もしないでそこに泣き伏し

て了つた。

こんなことは、今迄も屢々あつた。上杉は生れつき残忍性に富んでゐて、人を苦しめることが面白いのと、馬鹿に縁起を八釜敷云ふて、老婆の顔を見ると、一日胸糞が悪いと朝から酒屋に走るのであつた。彼の顔は全く酒の爲めに焼けてゐた。

新見は屢々彼に忠告をしたが、それは全く無効であつた。忠告せられる日に彼は黙々として出て行き、また酒屋のバーに立つのであつた。

その程度が段々烈しくなつて來た、沖仲仕に行くと、一日、四圓、五圓と取れるものだから、彼は船のハッチの中でらくらしてゐて、暮にはその日の賃金を懐にねぢ込み、波止場から、葺合迄の十四五町を酒場から酒場へと梯子酒を呑み、イエス團につく頃は結構彼は豚のやうになつて、轉がり込むのであつた。その爲めに、入口の硝子障子を破壊したり、拳でテーブルを叩き壊したり、障子の箱め板を蹴破つたりすることは珍らしくなかつた。

それでも最初の間は新見の妻喜恵子の云ふことはよく聞いてゐた、それがいつとはなく、甘へるやうになり、更に進んで酒代を要求するやうになつた。

酒代を要求するやうになると、五十錢から、一圓、一圓から二圓、三圓、四圓、と段々要求額が殖

えて行き、終りには月額いくらときめてくれと月給取りのやうなことを云ひ出した。

それをやらなければ亂暴をする。「出て行つてくれ」と要求しても、決してそれに應じない。「三百圓呉れるなら出て行つてやる！一旦這入つた以上は挺でも動かねえのだ、出すなら出して見ろ」と云ふ。

新見夫婦の寝てゐるところに暴れ込む、出入りする書生を片端から擲る。無抵抗主義の新見が沈黙の中に凡てを忍んで行くと、それが更に募る。釋迦に提婆の話が思ひ出される。

『出て行つてくれ！』と云つたことが癢だと云つて、毎日毎日その一つことを繰返して、新見をいちめる。新見は全くイエス團で原稿が書けなくなつた。彼が原稿を書いてゐると、四時間でも、五時間でも、そこに座つてゐて、それを邪問する。彼が出て行くと、追ってくる。山手に行けば、山手に追ってくる。「だに」のやうに彼にひつついて離れない。

『彼は全く酒の爲めに發狂してゐる！』と、新見は診斷をつけた。

續けて、あまり老婆をいぢめるものだから、老婆を隠さねばならなくなつた。幸ひ老婆は知人を頼寄つて上杉の毒手から逃げ出すことになつた。

逃げられないのは榮一と喜恵子である。二人は靜かなる祈の中に荊の上に毎日座つた。

新見は、その判の上座を頗る勞費の如くにも考へた。彼が上杉の理由もない鐵拳に打ち伏せられる瞬間、彼は哀れなる受難者として、修道僧の如く、そこに蹲まつた。

『こいつ等をいくら擲つても痛くないと見えるわい——不死身かいな！』

さう云つて、上杉が怪しむ程、新見は上杉に對して無抵抗であつた。

或時は、酒代が少ないと云つて、新見を撲り附けて、胸を足で跳飛ばした。喜恵子が泣きながら飛んで来て、上杉に組み付いたこともあつた。それでも、新見は凡てを赦して、そのよるべなき上杉に出で行くことを強て要求しなかつた。

新見を迫害することが激しくなると共に、上杉自身が段々とおそろしくなつた。

『俺も、もう近い中に罰が當るのや、來年は厄年やし、妙な因縁で、俺の氣が立つやうに仕向けるさかい、益々俺の壽命が縮まる。俺には妖怪が一匹憑いてゐるんやろ！』

など云ひ出す——こんなことを云ひ出すと決して仕事には行かない、色々と迷信を所々方々から拾つてくる。仕事に行かないものだから、金がない、金がないので、酒が呑めない。酒が呑めないので新見夫妻を脅喝して金を奪ふとする。新見も段々強くなつて、金を與へ無いと、看護婦の宇田川の財布を強奪する。ブラツシユ會社の職工から金を巻き上げる。看護婦の宇田川は、とう／＼大正八年の

暮になつて、上杉が怖いと云つて逃げ出して了つた。

逃げ出すことの出来ないのは、新見夫妻である、肉體的に苦しめられることがあまり苦しいので、ついで／＼五十錢出し一圓出すと大威張りに出て行く。

こんな時の新見の感想は——墮落した人間の姿は、天地の凡ての被造物の中最も醜いものであると云ふことであつた。それは狂犬を飼つてゐるより恐ろしい、新見は朝晩その人と一緒に起き伏しすると、いつとはなしにその人の性質が移るやうに思はれてならない。殊に上杉と争ふ場合——いつとはなしに口穢くなり、自分のことを「私」と云つてゐたものが、いつとはなしに「俺」となり「何々して下さい」と云つてゐたものが「何々してくれ」と出るやうになり、「君」と云ふ可きを「おまへ」と云ふやうになつて行くのを、我乍ら恥かしく思へるのであつた。

『——惡魔を見詰めてゐると、何時とはなしに惡魔になる、——いつ、私の姿がこんな醜しい姿になつたか？』

と上杉と争つた後、ひとり後悔して、海岸の石に嚙りついて新見菜一はひとり泣くのであつた。

『もし、神様が全能なる父で居られるなら、どうか、この刺を私から取り去つて下さい』とも彼は祈つた。

然し、その時、いつも聞く聲は「わが恩、汝に足れり」と云ふ聲であつた。

五十四

平和第一年のクリスマスが、また近づいて来た。新見榮一は、迫害の中に、彼の唯一つの慰めである、貧民窟の幼児の宗教々育に専念してゐた。

『そこはねエ、かう歌ふのです。』

美はしき 朝も

静かなる 夜も

たべもの きものを

賜はる 神様

我儘を 捨てよ

人をば 愛し

日毎の 務めを

なさしめ 給へや

小さい聲で、新見は子供達に歌つて聞かせた。

新見は、北本町の長屋の「二疊敷」に、近所の幼児を集めて、クリスマスの準備をしてゐた。

そんな時は、彼の天国である。労働演説會の混亂を忘れ、消費組合の煩雜より離れ、教義と、乾燥した形式宗教から脱れて、眞の神の國の住民の仲間に入れて貰つた氣になるのであつた。もし出来るならば、貧民窟の子供の爲めに一生を棒に振つても惜しくはないと思ふ。

そこには階級も、名譽も、野心も、虚榮も、財寶の誇りも、何にもない、子供らは中産階級の子供のやうに威張つて居ない。着物は汚でゲト、ゲトとして光つてゐる。完全な帯をしてゐるものは誰れもない。寅ちゃんの帯は先が破れてゐる、花ちゃんの帯は心がはみ出してゐる。禿の無い子供は少ない。鼻を垂れてゐぬ子は一人も無い。然しその頬は林檎のやうに赤く、その膚は絹のやうに柔かである。誠に彼等は貧民窟に咲く花である。

新見は三十分位繰返して暗誦と歌を教へてゐた。そしてもう子供も疲れたので止めようと思つてゐた頃に、高井に案内せられて、弟の益則が長屋の路次に這入つて来た。益則が長屋の路次の間に這入つたことは榮一が歸朝以後初めてのことであつた。殊に、結婚して後、彼は一度も兄を訪問したことがなかつた。彼は金儲けに夢中になつて、貧民長屋の兄を訪問する機會などを持たなかつた。

榮一は 益則に一寸會釋したゞけで、子供の授業をつゞけた。益則は待つてゐる間路次を見て廻て

わた。授業が済んだので、榮一は外に出た。子供等もみな彼について外に出た。新見は益則を伴つて、イエス團の事務所に行かうと路次を出かけた。

『兄さん、やはり、臭うおますなア。』

益則はさう云ふた。彼は縞縞のハイカラな洋服にキツトの漆塗りの靴を履き、ポケットに絹のハンカチを覗かせ、如何にも大阪の若旦那らしく装ふて、絹製の白の手袋を携へることすら忘れて居ない。兄哥は木綿のガツ／＼の縞の袴に、古着屋から買ふて来た木綿の袴をつけて、何處の田舎物かと思はれる程、貧相な風彩をしてゐる。

弟の云ふことが、グツと頬に觸つたが、榮一は心の中で、弟を不憚に思ひ乍ら、大通りを歩いて行つた。イエス團の前にはちやんと弟の車が待つてゐる。

『益則さん、戦争が済んでも、景氣には變りはないかね——』
と兄が聞くと、益則は鼻を鳴らしながら、

『お蔭で、景氣には、少しも影響がありません……春になると、わかりませんが、まだ大丈夫のやうで……今年はお蔭で八十六萬圓位儲けさせて貰ひました。……それで今度、それを百萬圓の株式會社に爲たいと思つて居ります。今日も、そのことで、一寸と神戸に來たものですから、どんなに爲て

居しやるだらうかと思つて、お尋ねして見ました……然し兄さん、やつぱり、貧民窟は臭うおますなア』

『成金には臭いだらうね!』

榮一は笑ひ乍ら、さう言つた。イエス團の二階に上つてから益則は一身上のことに就て、色々榮一に話して聞かせた。大阪府下の豊中に、新夫婦二人の爲めに、一軒の家を買ひ取つたこと、その家のもと、住友銀行の支配人が住んで居た家であつたこと、郊外生活は非常に愉快であること、妻の美代子がとかく弱いこと、それで毎日大阪病院に通ふてゐること、番頭が、放蕩すること、旅行の面白いこと、繁忙しいこと、電話を二つにしたこと、阿波の親戚の林が、満洲の豆糟で一大損害を受け、買入れてゐた赤星家の骨董品を今度凡て吐き出さねばならぬこと、彼がもしも百萬圓の株式會社を造つて、その社長となり、毎月一萬圓位の収入があるやうになれば、少々位は榮一の社會事業に寄附しても善いと云ふこと、然しそれまでは節約せねばならぬことなど……彼は殆ど彼が頭の中で考へてゐる凡てのことを、兄に告げた。

榮一は、弟の云ふことを一々頷いて聞いてゐた。そして、一つとして、精神的の話の出ないことを悲しく思つた。然し、新見に取つては吉田益則の話すことは、小さい資本家としての弟の偽らさ

る告白であるだけに、彼には全く珍らしく聞こえた。夕飯時が来た。

彼は例の階下の食堂に弟を連れて行つて、飯を食はせようかとも思つた。然しそれはあまりに成金振つてゐる弟には可哀相だと思つたので、妻の喜恵子に云ふて、二階の書齋に膳を運ばせた。

「實際、兄さん、私ガもしも、百萬圓の株式會社を造つて、少し儲かるやうになれば、毎月いくら兄さんの社會事業に寄附しますよ——」

益則はまた繰返してさう云ふた。榮一はそれに對してかう答へた。

「そんなことを考へ無いで、自分が引繰り返らないやうに注意し給へ——君等の爲てゐる仕事は波の上を徒歩で渡つてゐるやうなものだから、明日のひが判らないよ……その時になつて、兄さん、助けて頂戴など云はないやうにし給へ……もう少し經濟生活の本質を考へて、少しでも消費組合の運動を助ける位にからなくては駄目だぜ！」

「ほんとに、さうですね。」

益則は喜恵子の備へた膳に一寸箸をつけたが、すぐやめて了つた。そしてお給仕する爲めに側に立つてゐる喜恵子を顧みて、こんなことを云ふた。

「姉さん、今夜は、神戸海上保險の宴會に呼ばれて居りまんね、誠にお志は有難う御座りますけれ

ども、晩にもう一度御馳走を食はな成りまへんから、一寸だけ箸をつけさしていただきます……榮一を顧みて……近頃は毎晩宴會續きだんね……」

新見は神戸海上の篠田専務を知つてゐるかと思ひ尋ねた。

「知つて居りますとも、篠田さんとは、ウラジオから硝石を引いたときから懇意だんね、兄さんとは、えらい心安い方ですつて……そらほんとだつたか……私は近頃までちつともそれを知りませんでした。だが、つい先達昔話が出て、兄さんと篠田さんが、舊いお友達だと云ふことを知りました。——あの方は豪い善く遊ぶ方ですなア、儲けもする變りに、よく費はれるやうですな、近頃は商事會社にも關係してゐられるようです……」

「さうかね？」

「海上ビルデングに事務所を持つてゐられるようです、泰洋洋行とか云ふ支那貿易の會社です、専務は人にやらして居られるやうですが、出資者は篠田さん一人のやうです……」

「篠田君は、あれでどれ位持つてゐるんだね？」

「まア百萬圓と云ふところでせうね……うちらとあんまり變らんでせう、商事會社の方は少し店の出すのが遅れましたね、もう二年早いとな、うんと儲かるんですけれどもなア、それでも一時は、船の

ブローカーで、篠田さんも五六百萬圓も儲けてゐたでせうが、まだ船にして、持つてゐられるものだから、こんな船の値段が段々下つてくると、豪いでせう……然し、愈々、神戸造船所の大久保や、花木の山川、日本海運の堀内、それに神戸海上の篠田さんなども加はつて、政府に社外船全部を買ひ取らすことになつたようですね！」

新見は、その時、堀内の屋敷で大阪夕刊の本條が彼に云ふてゐることが思ひ出された。

「船も愈々悪いかね？」

「悪いやうですね、戦後アメリカがうんと太平洋に船を持つてくる計劃を立て、居るさうですから日本の海運界はえらい警戒をしてゐるやうです……、なんでせう、社外船全部を一纏めにして、郵船會社に匹敵するだけの大きな貨物船専門の船會社を造らうと計劃して居るらしいです……つまり政府が船成金を救済してやるんですね、さうでもしてやらなければ、海運界の整理がつかぬと當局も考へてゐるやうですね。」

「成金と云ふ奴は強慾な奴だね、儲ける時には自分勝手に儲けておいて、少し具合が悪くなると政府に救済を求めるかね……日本の金持は、政府をわやくちやにしてゐるんだね。」

「さう云へば、さうも云へませうな。然しさうでもしてやらなければ、財界に一大恐慌が來るでせう

なア」

「困つたことだね、儲ける時には勝手に船を造つておいて、損をする段になると、國民の膏血を絞つた税金で、その尻拭ひをさすのか？今にそんな資本家を叩き潰して了はなければいかんなア……益則もよく注意しろよ、あまりお調子に乗つて、人様に御迷惑をかけんようにし給へ！」

晩秋の暮れ易き日は、鐵拐山の後ろに隠れて了つた。イエス團の向隣の酒屋が急に賑やかになつた。相變らず今日も上杉は熟柿のやうに酔ふて二階に上つて來た。喜恵子の姿を見るなり、

「こら、お多福！ 酒代を借せ！」と叫んだ。益則は慌て、立ち上つた。彼は挨拶も碌々しないで、立ち去らうとする。

上杉はつか／＼と益則に近づき、彼の胸倉を捕へ、

「俺が怖いので、逃げ出すのか？ 何にもそんなに慌て、逃げなくても善いぢやないか。まア座れ、兄弟、一杯飲まう！」

益則は、上杉の腕を振り放して、急いで二階から駆け降りた。上杉がそれを追断ける。段梯子の途中で益則は中折帽子を落した。上杉は慌だしく、それを拾ひ上げて頭に蒙る。

「之は……上等や、恰度、わしに合ふが……これ貰つておかう……」

さうしてまた、二階に上つて来た。益則は帽子も冠ら無いで、その儘、待たせてゐた車に打乗り、逃げるやうにして、兄の家を立ち去つた。

榮一は静かに溝板の上に立つて益則を見送つた。二階ではまた上杉が喜恵子を虐めてゐるらしい。上杉の人を撲つ音と喜恵子の泣き聲が聞こえる。酔拂ひの「失敬」さんが新見の姿を見て「失敬！」をする。

榮一は妻が氣になるので、また二階に飛び上つて行く――。

五十五

新見が大阪で組織した消費組合共益社は毎月損失を續けた。それで、新見も頗る悲觀した、またブラツシ會社の二の舞をやるのぢや無いかと。

然し、ブラツシ會社それ自身は、新見が手放して後、あまり著しい損害もなく中村氏と竹田君と二人で經營を續けてゐた。それは新見に取つては悦びであつた。然し、歐洲が平和になつたので、また、ロンドンのブラツシ市場が開かれることになる、當然、それが、日本にも影響して、大正ブラツシ會社の如きは閉鎖せねばならぬことは明かな事實であつた。それで、新見は竹田に「あまり損

害の大きくなならない中に整理し給へ」と勸めてゐた。それに對して、竹田の返事は「やれるまでやります、中村さんもさう云ふてゐられますから――もし外國品がいかなくなれば内地向きのものを製造ませう――」と云ふのであつた。

暮が押し詰まつて来た。世の中が、不安に沈み行く中に、新見は貧民窟の兒供を對手にして、賑かなクリスマスを送つた。

五十六

正月の三日に、新見が江戸堀の吉田へ年賀の挨拶に行くと、主人の正雄さんは淋しい顔をしてゐる。「益則は今度、百萬圓の會社を作ると云ふて、一生懸命になつて居ります……成立いたしますと結構ですがなう。」

玄關につゞく四疊半の茶室には、床に渡邊華山の蘭の軸をかけ、隅に銀屏風を立てある。桐の火鉢には切炭が赤く燃え、盛られた白色の石灰とのコントラストが美しい。紺色の大きな縞の絹の座蒲團に座りこんで、下だけ硝子になつてゐる障子を越して、中庭を見ると、南天の木が青銅の手洗鉢の側に植えられ、青苔が庭一面に生えてゐる。隅にある雪のやうに見える斑の這入つた大岩の下から高

山植物の「雪の下」が紅のやうな色をして覗いてゐる。榮一が庭を賞めると、正雄さんは得意になる。「美代子がどうも弱う御座りましたな、毎日婦人科に通ふて居るのです。……どうも、益則から感染したのだらうと、醫者さんも云ふさうです……益則にもちつと云ふて頂きたいものですな。」かう正雄さんが云ふたので、彼の曇つた顔がよく讀めた。新見は話もそこそこにして吉田の家を辭し去つた。

實際、益則は信仰もなく、教養もなく、そしてまだ若くはあるし、恒川などの誘惑を振り切つて、純潔を保つことは出来なかつた。殆んど毎晩、續く、宴會のはねた後には、妙な藝者に搔はれて思ひもよらぬ失敗を取ること度々であつた。金廻りが善くなると共に、鞭の店では不潔な會話がおいつびらに聞かれるやうになつた。

うぶな美代子の直接の病源は全くかうしたところから出た。さうかと云つて、益則は大膽な遊び方をする男でもなかつた。晩には必ず家に歸つて來た。旅行先からは必ず美代子に手紙を出した。然し、彼が商賣上の交際と稱するもので、墮落を意味せぬものはなかつた。

五十七

春になつて、喜恵子の妹初子は、一生を貧民窟の救療事業に捧げる爲めに、編入試験を受けて、名古屋の金城女學校に入學した。喜恵子の母も榮一の事業に奉仕する決心が出来て、イエス團の炊事を受持つことになつた。

イエス團診療所の磯村ドクトルは兵庫長田の貧民窟に自らセツトルメント・ウオークを始めた。少し信仰を落してゐた植木虎太郎はまたも信仰を回復して、竹田と一緒に毎晩路傍に立つことになつた。新見は相も變らず三つの神學校を教へて廻つた。

新年になつて、三つの労働組合が、新見を組合長に推薦した。その一つは、安治川伸銅所を中心とした伸銅工組合で、之は組合員が五百名位あつた。も一つは大阪印刷工組合で、之は組合員の数がどれだけあるかわからなかつた。組合員千と號したが、會費を正確に納めるものは二百五十あるか無いかであつた。組合の事務員の給料は榮一が毎月半分だけ負擔せねばならない程、貧弱なものであつた。第三のものは新見の住んでゐる葦合區を中心として神戸東部の鐵工を組織した、神戸東部機械工組合であつた。之は日本労働總同盟に加盟した比較的完全な組合で、新見には少しも迷惑を掛けない性質

の善いものであつた。

世界の各地に於ける労働運動の情勢が詳しく新聞紙に報ぜられると共に、日本各地の労働者は思ひ／＼に労働組合を組織し始めた。今迄沈黙してゐた官業労働者までが、労働組合の運動を初めた。東京には小石川の砲兵工廠に、小石川労働會が生れ、大阪砲兵工廠内に労働組合向上會が産れた。名古屋から、広島から、福岡から、新見榮一に、労働組合の講演に来てくれと云ふ要求が多く來た。そして新見は欣んでそれに應じた。

イエス團の傳道集會は凡て竹田に委託して、彼は遠く、広島、門司、小倉、福岡まで、講演旅行に出かけた。

然し、新見に取つて、最も嬉しかつたことは、大牟田から新見に講演の招待の來たことであつた。そこは松野俊造といふ實に痛快な阿爺さんが、中心になつて、ひとり大三井の産業政策に反對してゐた。そして炭坑の中に約四百名の同志が出來たから、是非大講演會を開いて、三井に「アツ」と云はせると云ふ計劃であつた。

松野俊造は、もと／＼キリスト教の神學校にも居たことのある道理の判つた男であるが色々生活上に曲折があつて、遂に福岡縣大牟田に流れて來て、三井の礦務所の事務員として働いてゐた。彼は三井が労働者に對してあまり非道いことをすると云ふので、憤慨して、職を抛げ出し、「そばや」となり、小間物の行商人となり、たゞに大牟田ばかりで無く、福岡縣一體の炭坑を廻り北九州の資本家を向ふに廻して、労働組合の宣傳に、孤軍奮闘を續けてゐたのであつた。

彼は八幡で原野壯三と云ふ同志を得、後藤寺で吉光圓心と云ふ同志を得た。この二人は松野自らよりは遙かに若く、共に二十四五歳で、労働階級の解放運動の爲めには、身を捨てても働くこと云ふ勇氣を持つてゐた。

松野と、吉光と、原野の三人は、坑夫總聯盟の總會が東京にあつた歸り道に、神戸に立ち寄つて、新見に北九州の炭坑に於ける労働運動の困難をつぶさに述べた。

「——中鶴で、やりましたよ、あしこは納屋のあるところに柵が無いでせう、恰度、あと月の十五日でした、坑夫がみな休みで、上つて居るのを幸ひに、吉光と僕と、松野さんの三人で、納屋の一軒一軒に「労働組合を作れ！」と云ふ宣傳ビラをまいたのです……」

原野は、大きな眼をパチクリさせて話を續けた。新見は、その邊を詳しく知つてゐるので、原野の話に特別の興味をそゝられる。

「……もう、撒き了つて、引上げると云ふ段になつて、門までくると、サアそこには納屋頭の連中が

ゴロツキ連をかり集めて手に手に棒切れたとか、鷹口だとかを持って、あれで二十五六人も集つてゐましたかね、それ以外は、我々三人の姿を見るなり、いきなり獲物を振り翳さして、攻めかけて来たのです——こちらは勿論、何の準備もして居りませんわね、先づ第一に逃げてやらうと、一目散に群衆の真中に走り込んだのです。ところが、松野さんは眼が薄いものだから、充分逃げられないで、そこに打ち伏せられて了つたのです。吉光と僕は、二三町も一緒に逃げるのは、逃げたのですが、松野さんが「やられた！」と気が附いたものですから、松野さんを助けねばならぬと、決死の覚悟ですぐ引返したのです。武器も何にも無いものですから、料理屋に飛び込んで、出刃庖丁を一挺づゝに、棍棒を一つづつ借つて、逆襲したのです。我等が逆襲したものですから、或者は逃げ出したのですが、二三名のものが手向つてきたので、そいつを地べたに叩きつけて了つて、そこに打倒れてゐる松野さんを吉光君と僕とで交る交る背負ふて、裏山に逃げ込んだのです……敵は、僕等が撲り附けられて虫の息になつて居る同志を發見して、また僕等を追驅けて來たのです。然し、その晩は幸にも大雨となりましてな、それで、敵もその大雨の中を追驅けもせず、引上げたらしかつたです。私等はその大雨の中を、疲れた足を引づりく、態々山の中を廻り道をして八幡に出ると、先廻りしてゐるかも知れないと思つて、後藤寺まで徒歩で落ち延びたのです。そら……あの逃げた時の光景と云へば、全く

話にならなかつたですよ——」

話を聞いてゐても、まるで今様の義士討入の物語を聞くやうであつた。

そして新見が心配してゐたことと同じく、北九州では、資本家と労働階級が全く暴力で相對峙するやうになつた。新見は之を救ひ得るものは合法的な労働組合であると考へた。それで、彼は乞はるゝが儘に北九州に降つて行つた。

五十八

演説會場にあてられた戎座は開會前にもう満員であつた。今にも一大ストライキでも起るか、それとも、米騒動の時のやうに焼打でも始まりはしないかと、市民の多くは心配してゐた。その爲めに、福岡から態々検事出張する。憲兵が来る。警察本部から特務がくる。大牟田市は新見榮一の講演と聞いて、蒸せ返るほどの騒ぎとなつた。

演壇には正服巡査が十名も居並ぶ。表には大牟田×××總出で、劇場に這入る坑夫の姓名を一々控へて居る。かほどまでに壓迫しなぐとも善いと思ふが、さうしなければ、三井家に對して忠勤振が示されないものと見える。

演説が始まつた。聴衆は初めから熱狂してゐる。御用掛の博徒連が百人位、演壇のすぐ下に三筋になつて、座席を占めて居る。

最初、松野俊造君が開會の辭を述べた。

「よう、ひんがら目！」と博徒連が演壇の下から彌次る。

松野はトラホームで、潰れさうになつた眼を瞬き乍ら、小さい丸い頭を左右に振りくゞ對話の句調で初めた。

「私はひんがら目ぢやから、ひんがら目と云はれたつて、少しも構はんけど……」
聴衆はドツと笑ふ。

「……私の心の底には眼は開いて居るのぢや……」
坑夫の連中は喜んで拍手する。

「……私は北九州二十萬の坑夫のものに代つて、資本家と戦ふ積りで居る。」

「お爺さん、しつかり頼む」と半疊を入れるものがある、松野は涙を流してゐる。

「……私は三池の坑務所を追はれてから、或は人足となり、そばやとなり、或は小間物賣となり、どうかしてこの虐げられたるわが同胞に一日も早く光明を與へんと努力して來たのである……」

「おつさん、泣くない！」と博徒の一人が彌次る。

彼等の中の四五人のものは「禁煙」と舞臺に書いてあるにもかゝらず巻煙草をふかせて平氣で居る。

「……今日は、神戸から新見榮一君も來て居られるし、福岡から、原野君も見えて居ることであるから、私は長いこと喋りたくもないが……、然し、實際、我等の今日の現状はなつちよらんが！炭坑主には搾り取られ、「朝の疾から、カンテラ下げて、坑内下りも親の罰」と云ふが、親の罰も何にも受けて居らないが、たゞその日、その日の生活をする爲めに、一日十時間も地下幾千尺の下に勞働しなければならぬのではないか！」

「それが、何ぢや！目腐れ！」と博徒の一人が罵る。

「黙れ！」と二階から坑夫が叫ぶ、

博徒の一人がツウと立ち上つて、二階を睨む、

「黙れ！……つて何ぢや？……」

之には聴衆が承知しない、會場の四方から罵聲が聞こえる。

「馬鹿！」

「博徒！」

「演説を妨害に来たのか？」

「會社の犬！」

「チンコロ！」

松野は演壇の前に進み出て、

「静肅にして下さい、でない、解散を命ぜられますから……」

さう云ふても、聴衆は聞かばこそ、蜂の巣をついたやうに騒ぐ、博徒の一人は棍棒を引提げて、花道を闊歩し、二階に登つて行つた。そして正面に座つてゐる若者の胸を引搦んだ。周圍に居るものが承知しない。擲り合ひが始まつた。會衆は總立ちとなつた。博徒の一人は階下より二階へ棧敷の支柱を攀ち登つて居る。巡查はぼんやりそれを見て居る。

會場はもう戰鬪的氣分になつて了つた——。

「やツつけてしまへ！」

「擲れ！ 擲れ！」

「生意氣な奴を、擲つて了へ！」

會衆が口々に叫ぶ。會衆の凡てが、博徒と戦ふ氣分になつてゐる。

新見は演壇の後ろに立つて、靜かに祈つてゐた。

あまりに聴衆が興奮してゐるので、博徒の連中も手の出しやうが無い。暴力で會場を蹂躪するなら、どんな大騒動をも起さないともわからない氣配が見える。刑事が博徒の頭目の耳に囁いた。それで博徒はまた靜かに坐席に復した。

向つて左手に座つてゐる婦人席は、女坑夫の一團で一杯になつてゐるが、

「ほんとにまア、小面憎い人らだなア。」

「會社の廻し物やな。」

と云ふ聲が、彼等の小さい唇の間から漏れる。

松野は、すぐ吉光圓心君を紹介した。聴衆は反動的に破れるばかりに拍手を以つて彼を迎へた。

「諸君、私は學者でも無ければ、教育のあるものでもありません、もと伊田の炭坑に働いてゐた、一人の坑夫にしか過ぎないものであります……然し、學者や、教育あるものの演説などは、諸君はいつも聞いてゐられるであります。私の今晚この演壇に立ちました理由は、一坑夫として、經驗して來た、坑夫の生活の悲惨なことを、そして、如何にすればその悲惨な生活状態から、自らを解放し得るか

を一言云つて見たいと思つたからであります。』

博徒の連中は静まり返つて居る。中には演説に興味が無いとみえて居睡りして居る者もある。

『……諸君、一昨年の米騒動の時を考へてみ給へ！』

演壇の警官がサーベルをガタづかせて、

『注意！』と叫ぶ。

聴衆は、何のことだかわからないで視線を警部の顔に集める。別に何事も變つたことがないので、また辯士の顔を凝視する。

『あの時、私はまだ伊田の炭坑に居つたが、米は買ひたくも、賣つてくれず、炭坑の事務所に行つても無いと云ふし、我等は殆ど三日間食はずに居つたのである。何と云ふ不人情な資本家であらう……一日坑内に瓦斯が爆發したと云へば親子、夫婦、四人のものが全滅する。そんなことがあつても、會社は我等に日給の百七十日分しか呉れないぢやないか！』

婦人席にはすゝり泣きをして居るものもある。會場は濕つぽくなつて了つた。

『——こんな悪逆な資本主義制度に、我等は何時迄屈從して居るのだ！』
警部はまたサーベルをガタづかせて立ち上つた。

『辨士、中止！』

聴衆はたゞ呆氣に取られて、呆然してゐる。松野は原野を紹介した。原野の演説も三分と経たぬ中に「辨士中止」になつた。原野はこんなことを云ふた。

『北九州に於ては、警察官も凡て

そこで直に中止になつたのである。

最後に新見榮一が紹介せられた。

新見榮一は先づ、労働組合の一般論から始めて、至極落付いた句調で語つた。

『……労働組合の運動は決して、破壊的な運動ではありません、米屋に組合があり、車夫に組合があり、魚屋に組合がある如く、労働者にも組合が必要なのであります。

元來、金と云ふものは、持つてゐるものところには、益々集まるものであつて少しも働かないで銀行に金を預けて置くだけで、利子が殖えるやうな仕掛になつてゐる。それで一方には裸一貫で働いて、食ふだけにも足らない借銀を得て居る労働者が幾十萬人も居るにかゝわらず、他方には、株券一束持つて居れば、一年に五百萬圓も、三百萬圓も収入の道を持つ資本家が居るのである。

之は全く、制度が悪いのであつて、一資本家、一警官が悪いのではありません……之は制度の罪で

あります。之を資本主義制度と申します。この資本主義制度の下に於ては筋肉労働に従事してゐるものは益々不安に陥り、物價の騰貴と、賃銀相場の高下に挟み打ちにせられ、仕事か三日も無ければ早や飢え死にする覺悟で居らなければならぬことになり、不景氣になれば首を切られる心配をせねばならず、多少自分の意見を云ひたいことがあつても會社は機械の附屬品としか考へて居らないのだから、顧みてくれる筈もなし、信用はなし、知人は無し、父親が死んでも、葬式代はなし、坑内で負傷すれば、その日から一家眷族みな泣かねばならぬと云ふ仕末である。かうした、不安と、不信と、孤立と、奴隸生活から逃れて、生活の安定と、互助と、自主と、信用を回復し、人間らしい生活を送らうと云ふのが、労働組合本來の目的であります——」

聴衆は拍手する。

「——我等の運動を危険思想のやうに云ふものがありますけれども、實際國を危険に陥れるものは、成金どもであつて、労働者ではないのであります……」

聴衆はまた拍手する。

「——我等をロシヤの手先のやうに云ふものもあるけれども、それは働かないで、飯の食ひたい連中の宣傳である。我等は國を愛するが故に労働運動をしてゐるのであります。」

見給へ、諸君、成金共は何をしてゐるか。京の祇園を賑はし、東京の新橋を榮えさせてゐるのは誰だ？ 淫風は蕩々として國民の髓にまで沁み込み、一旦事あれば立ち得るものは、たゞ労働者ばかりではないか！ 國を守るものは誰か？ 労働者ではないか！ 汽車を造るものは誰か！ 労働者ではないか！ 四萬噸の軍艦を作るものは誰か？ 労働者ではないか！ 地下三千尺に、石炭を掘るものは誰か？ 労働者ではないか？

坑夫は歡喜して拍手する。

「然るに、君等の中で、誰か成金の一人が、田を耕し、家を建て、汽車を走らせ、汽船を造り、機織り、石炭を掘つてゐるところを見たことがあるか？ 彼等はみな働かずして、濡手で粟を掴まんとする生産者の寄生蟲ではないか！」

警部はまた、サーベルをガタづかせて、「辯士注意！」と叫ぶ。

「——我等は暴力に訴へてこの問題を解決しようと思ふのではない、組織を以つて、の

に置き換へようと云ふのである。我等は陋劣な資本家のやうに、暴力と陰謀とを知らない。我等の道は互助と光明と人類愛を基礎として進むのである。

——資本家は直に、國體を云々する。我等は彼等如き寄生蟲が國體を云々する資格が無いことを主張するものである——」

警部がまた小さな聲で

「注意！」と云ふ。

「——レニンは「凡そ働かざるものは食ふ可からず」と云ふ一ヶ條をロシアの憲法に挿入してゐる。働かざる資本家は日本の國體を云々する権利は無いのである。日本は日本の生産者が支持してゐるのである、天下は天下の天下である。——」

「辯士中止！」

警部は威丈高になつて、新見の演説に中止を命じた。坑夫連は何ごとだか薩張りわからぬので、席も立たないでヂツとして居る。

「何のこつちや……あれだけのことで中止になるのか、つまらんア。」

「初めから、中止しようとして待つてゐたのぢやア。」

聴衆は互に語り合つてゐる。

博徒の連中も何の爲の中止か薩張り理解しないと見えて、或者は兩手を上に舉げて、大きなあくび

をしてゐる。

松野は閉會を宣言する前に、日本坑夫總聯盟に加盟してくれと勧誘した。入會申込書を受取るものが四五百名あつた。

會はそれで閉じた。幹部一同は驛前の大分旅館に引上げた。

五十九

その翌日もまた演説會があつた。それは昨日の出番に廻つた爲めに、演説會に出られなかつた坑夫に聞かせる爲めであつた。

今日は警察署の警戒もゆるみ、博徒連も出て來なかつた。それは、新見等の運動がたゞ煽動の爲めでないとわかつたからであつた。

演説も、原野が「中止」を命ぜられた外、誰れも中止を命ぜられるものはなかつた。

新見は、大牟田に四日間留つた。そして、坑夫達と親しく交つた。組合員も一度に四百五十名以上増加する望みがあると云ふので、松野は大喜びであつた。

五日目に彼はひとり東に立つた。然し何だか、その後絶えて消息のない玉枝のことが氣にかゝるの

で、折尾から乗換へて、直方に廻つた。直方に着いたのは午前十時であつた。それから俥に乗つて、遠賀川の川筋まで急いだ。春と云つてもまだ寒い三月の風に吹かれ乍ら遠賀川の橋を渡ると、打開いた殺風景な土手の下に相も變らず、淫賣窟が立つてゐる。然し、大正七年夏の好況時代と違つて、何たる寂れ方であらう、片端から空家が並ぶ。瓢軒の家は二年前と同じく元のところに立つてゐる。然し名前が變つて、「竹の家」となつてゐる。

俥をおりて、竹の家で、瓢軒のことを聞くと五十恰好の髪をひき詰めに結つたおかみさんが出て来た。

「福岡に引越したと云ふことだけを聞いてゐますが、その後、どうなりましたことですか……」

と要領を得ないことを云ふ。

「もしや、もと瓢軒に居た、菊子と云ふ娘が何處に居るか、御存知ぢやないでせうかね？」

と新見が腰を低くして聞くと、

「ア、あの娘を尋ねて居られるのですか？あの娘なら、あなた、去年の春、殺されて了ひましたが……そら、あの、このあたりでは大變な評判で、福岡の新聞にも出た位です、ほんとに可哀相でした……」

新見は、それを聞いて胸にドツキと釘を受れたやうに感じた。

「誰れに殺されたのですか？」

「殺した人ですか？名前は確かと存じませんが、このあたりでは「横禿ノ」で通つて居たゴロツキが殺したんです。」

それだけ聞いて新見は、それが誰れであるかをすぐ悟ることが出来た。玉枝が「巳」の性の男に魅入られて、その男に命を取られるのだと、繰返し、繰返して云つたことが、今になつて思ひ出される。大正七年の八月、新見が初めて、瓢軒を訪ねて来た時に、留守番をしてゐた頭の横に禿のある腹の大きな破戸漢風の男が眼の前に浮ぶ。

「可愛相なことをしましたね……死骸はどうなつたんでせうね——」

「サアもし、詳しいことは知りませんが、あの娘のことでしたら、裏のきよちゃんがよく知つて居りますから、その娘を呼びませう——」

おばさんは裏口を出て、裏隣の長屋に這入つた。やがて、一見して淫賣婦だとすぐわかるやうな風態をした、十八九の娘を連れて来た。その娘は庭に立つた儘、細く開いた眼瞼の間から、茶色の瞳を新見に向けて、黙つて立つてゐる。髪を七三に別けて、田舎娘とは見えないハイカラな結び方をし

てゐる。昨夜つけたお白粉が、頸のところだけ残つて、半襟にまでお白粉が附いてゐる。

『——この方だす、お菊さんの殺された様子を聞いてゐられるのは。』

さうお婆さんが、おきよを顧みて云つた。

『御面倒をかけます、私はお菊さんとは長く交際してゐるものでしてね、一寸と、九州へくる用事があつたので、寄つてみたのですが、お菊さんが殺されたとは、今の今まで知らなかつたのです……』

『あなたは、もしかや、新見さんと仰るお方ぢやありませんか？』

おきよは新見の腫を見詰めて尋ねた。

『はア、さうです……』

『お菊さんは、息を引きとる最後の時まで、あなたのことを云ふて居られましたわ……』

おきよは、その當時のことを思ひ出して早や泣いて居る。

『まア、お掛けなさいませ！』

お婆さんは押入から座蒲團を出して新見にすゝめた。新見は上り口に腰をおろして、土べたを見詰める。そこは凸凹になつてゐて、土の波が打つてゐる。入口からの光線が、その土の波に明暗を作つて、美しい模様を畫いてゐる。軒に雀四五羽囀つてゐる。おきよは俯向いて襦袢の袖口で眼頭を拭い

てゐる。

『このお方は、お菊さんのことを詳う知りたいたと仰るのですから、あなた、始めから云ふてお上げなさいよ。』

お婆さんは、おきよがあまり沈黙してゐるものだから、物語を催促する。おきよは上り口に歩み寄つて、そこに腰をおろす。この社會の常例として少し打解けると、初めから十年も交際したものゝやうに話をする。おきよも、何の遠慮なく新見とすれ／＼に寄り添ふて席を占める。

『——ほんとに、可愛相なことをしましたわ——もう少し早く氣が附いて、逃がしてあげたらあんなことにもならなかつたらうにと思ふのですがね、今、こんなことを云つたつて仕方がないが、ほんとに少しの違ひで、やられたんですわ……あしこない……(おきよは軒先の便所の側を指さして)……あしこまで、姉さんは逃げて出たのですわ、その時はもう、二三ヶ所、頸のあたりを斬られて居たと見えすな、一人殺し！助けてくれ！と云ふて姉さんの聲がしました。それで私は裏から飛んで來たのですが、その時にはもう姉さんは、あしこのところに轉がつて、虫の息になつて居られました。私が飛んで出た時には殺した男は南の方へ一生懸命に逃げて居りました。駆けつけるのは私がいつと早かつたのですが、少しの間に皆んな出て來て、みんなして、姉さんを抱えて、こゝの奥座敷にねかした